

叛旗

6

DEC. 1970

戦闘宣言から戦闘へ＝三上 治／1

—70年代をわがものとするための原点を創出せよ—

中大闘争総括＝室 淳一／33

70年代へのルビコン＝神津 陽／63

—「かくめい」へ向かう核心的諸問題—

共産主義者同盟
理論機関誌

戦闘宣言から戦闘へ

— 70年代をわがものとするための

原点を創出せよ —

三 上 治

△1▽

いつの時代でもそうであるように、凝縮された最も鮮明なたかひのあと、後退—敗退局面としかいいようのないときには、たかひは闇にせずみ、拡散していくものだ。

たかひのなかで流れた血やうめきは乾いていき、やがてひとつの關係は視えない關係へ転位してゆく。

がしかし、闇と白昼のその数年も、凝縮された数時間が敗退の数年を一気に乗りこえることが可能であり、その時かって流れた血やうめきも關係を復権しようという経験こそ、67年の私達のところであり、時の時であった。67年から69年へ到るたかひが形成しかつ含んだ一定の解放的感覚—エネルギー精神が戦後世界—過程そのものであった存在の総体と激突した衝動力のなかで、私達が最も深く想いこめてきたものは何であったか。

それは戦後世界—過程と激突することで、秩序から最も離陸した時間や空間、感覚—エネルギー—感性和意識、総じて存在と意

識の総体がどのようなように永続性へ転化するかであった。いいかえれば秩序から最も離反することで生成した解放感、あるいは現存的な共生的な衝動力がいかに永続性を獲得しようかということであった。

「革命」からかくめいへ、戦後世界—過程から離陸しその総体と激突するに到った。到ろうとした力が、時間的だけでなく空間的な永続性へ深まることで、戦後世界総体（円環的秩序—閉鎖的情況）を革命するということであった。

けれども離陸し総体と激突しようとした力とエネルギーが永続性を獲得する為に必要不可欠な戦後世界—過程の成熟と危機を考えれば、つまりいわゆる情勢—情況からは、その限界及び敗北必至は自明というほかはなかった。

だからこそ私達の「革命」—「かくめい」へのおもいは、秩序から離陸し、その総体と激突せんとした力やエネルギーを赤い糸のように永続的なものへ転化させる主体や、原理の創出であっ

た。ここでいう主体や原理とは、私達の実存としての関係の内部で、あるいはそのものとして不可避に交叉する個と歴史（現存性と歴史性）、存在と意識、時間と空間の総体を貫き、表現する私達の意識力―自然力をさしている。

確かに私達の意識力や自然力が他者の感性的対象となり、逆に私達が他者のそれを対象とするためには、それを可能とする歴史的―社会的条件を必要とする。それは歴史―世界―自然（総じて社会）の成熟が必要であり、それが情勢―情況としてあらわれることはたしかである。

けれども個的でありながら共同的な、あるいは普遍的な主体や原理の存在なしにそれは不可能であることも事実である。

情況―情勢の必然性から離陸することで、それらをはじめて自己の必然へ到らしめることを可能にするのは、ここでいう主体―原理の存在、いいかえれば個と歴史、存在と意識、時間と空間の総体を貫き、包括する意識力と自然力の存在なのだ。

明治百年史と戦後史は、この主体と原理の創出と成熟において永続的な敗北過程なのである。

67年―69年のたたかいのなかに戦後世界―過程から離陸し、それと激突しようとした力やエネルギー、その解放感―共生感を永続化する主体―原理の創出に於て私達は敗北した。

それは私達の現存の秩序―世界総体から離陸し拮抗し得る意識

うことの出来ないように、この衝動は強力にあらわれてくる。我々にとってこれと抗うことの困難性は、それが日本近代史の総体、つまり主体と歴史の創出に於る永続的な敗北過程と拮抗することであるからだ。

すでに67年から69年へ到るたたかいが戦後世界―過程の総体と深く激突したものであり、そのなかで私達が想いをこめてきたものが、このたたかいを永続的なものへ転化することであり、それが「革命」からかくめいへということであり、その主軸が主体―原理の創出であったことを記した。

我々の軌跡をふりかえることで、敗北の認知を出発へのそれへ転化する道をさぐる。実践としての総括をなす。私達が自己の軌跡からしか語ることをもたないとすれば、まず69年へ到ったたたかいの総括に執着しなければならぬ。

△3▽

67年から69年へ、そのたたかいの道程をかえりみると、戦後世界―過程の危機の成熟、いわゆる情勢―情況のなかで、このたたかいが限界づけられた敗北づけられたものであるという想いはたえず存在していた。敗北や限界感とともに、情勢―情況を「過渡期」に名づけられるような特質を我々は直観的に感じてきたのも

力や自然力が死を貫くことで生をも貫くにほど遠く、それこそ私達の主体―原理のいつわりない水準だったのだ。

私達は、この敗北の認知からしか出発することは出来ない。

△2▽

明治百年史のなかで、戦後史のなかで私達が所有した時間や、私達の占めた空間が、私達の解放感―エネルギー―精神、総じて現存的共生的な時間や空間として何ものであり、何ものでしかなかったかは、多くを語る必要がない。

ただ時間―空間が集中―拡散の波の中で全て自然にのみつくされてきた怖しさを知ればよい。私達が時間―空間を主体―原理によって占めようとする時、その主体―原理が自然への同化であっても、拒絶であってもどんな抵抗を耐えを必要としたかを知ればよい。

主体―原理の創出過程とその敗北は、実存の、関係の解体感としてあらわれる。

その時、存在の根拠や感性―心情が拡散し風化にさらされる時、現実を、秩序を自然として受入れていこうとする衝動の誘いとしてこれはあらわれる。主体や原理によって時間が成立したり空間を占めたりすることがありえないことこそ、自然であり普遍的なのだと受入れていこうとする衝動となってあらわれる。もはや抗

である。そしてまたこの情勢―情況と相対的独自に「革命のかくめい」へむかう主体や原理の創出過程としての「過渡期」という直観をもっていたが。

私達はたえずたたかいの主要な軸が、主体や原理の創出に於ける「過渡期」をかくめいへ転化させることを念願しながら、それが限界づけられ、敗北づけられた情勢とどのようにかわるのか、また主体―原理の創出―成熟の「過渡期」と、情勢―情況の「過渡期」と、情勢―情況の「過渡期」がどのように連関するか考えできた。

私達は67年から69年へのたたかいのなかで不断の党内―分派―党派闘争を展開してきたが、それは67年から69年へ戦後世界―秩序から離陸し、それと激突することによって、主体―原理を時間―空間へ転化させている力やエネルギーの根源、根拠を、情勢―情況の「過渡性」に於て、主体―原理の「過渡性」に於て、どのように認識し実践へ向かわしめるかということであった。

情勢―情況の限界性と「過渡性」の特質、また主体―原理の「過渡性」、これらの独自把握と相互連関について、私達が経験してきた論争は無惨なものであったといつてよい。現存の党派闘争が党派闘争として成立する為、何が必要であるか、まことに無惨なものだ。赤軍派―戦旗連合派―諸党派いずれも問題の所在すらわからない。

私達が彼らとかかわずらうのは彼らが優れた敵であるからでな

く、優れた敵すら生み出すことの出来なかつた己れを撃つために
ほかならない。

67年―69年へのたたかいを生み出している、またそのエネルギー
―や力の根源―根拠を、そのひとつを情勢―情況の「過渡期」の
特質のなかに把握、認識してきた。その把握―認識こそ、私達
が党派闘争を展開せねばならなかつた最初の領域であつた。勿論
私達は、いつも危機を絶叫し、67―69年の情勢―情況が革命的情
勢とか、昂揚期であるとかいう連中と闘わねばならなかつた。

独断や主観的願望を科学的粉飾のもとに主張するこの種の連中
はいつも存在するのであるが、私達は共産主義者同盟の党内闘争
として岩田弘に表現される旧コル戦派と赤軍派と、やがて戦連連
合派とこの闘いを展開した。この党内闘争は、即ち全左翼に存在
する傾向との、日本革命運動の否定的現実との闘いであつた。

だが主要なことは、私達が情勢―情況の「過渡性」、
「過渡期」
の特質をどのように把握―認識するかであつた。

戦後世界―過程の成熟、情勢―情況の特質とは何であるのか。
67年―69年のたたかいを媒介として私達が情勢―情況の認識、
像の輪郭を与える以前に、60年過程の経験によって次の認識をも
つていた。

戦後世界―過程の情勢―情況を特徴づけてきた体制間論の疑制

る危機であるという見解、及びこれと同じく、社会主義者―共産
主義者が「戦後憲法―民主主義」総じて「民主主義国家」の完成
が否定しようとしているという見解が流布されてきた。

これらの見解の背後には戦後世界―過程を、一九一七年ロシア
革命から、資本主義社会から社会主義社会（共産主義社会）への
移行が開始された、その現実の発展として考えられ、それらが歴
史観にまで押し上げられて存在していた。

当然にもまた戦後世界―過程が共産主義の成立―発展の破綻と
資本主義社会の永続性の確認ということのように考えられたもの
が、同じように存在していた。

体制間の、国家間の内部で私達はこのいずれかを選択するしか
ないように存在させられていたのである。だがこれらは戦後世界
―過程の秩序―構造の保持、また「戦後憲法―民主主義」、総じ
て「民主主義国家」の完成―防衛ということで、共同な性格をも
つていたのである。

「戦争」―「平和」―「民主主義」―「ファシズム」―「共産
主義者」―「帝国主義者」、これらの言語は相互の転換、相互交
容の可能なものとして存在していたのである。

それはかつて戦前―戦中に於て、「共産主義」が「ファシズム」
と相互転換と変容が可能であつたことが、戦後過程にあつて「帝
国主義者」とそうであるものとして存在しているということな
のである。円環的―閉鎖的秩序―情況を相互補完的に、いわば戦後

性をはっきり認識していたことである。国家間相互の交通として
の戦争の表現が、体制間の交通のような表現をとるのは高度で普
遍なことであるという幻想が存在した。

国家間相互の交通としての戦争、あるいは平和が、体制間交通
のような表現をとる根拠が、国家の、近代的共同社会の差異（社
会主義社会と資本主義社会）に依っていると主張されてきたこと
の疑制性が認識されたということである。戦後世界―過程を把握
認識するにあつて、先験的な前提とされていたこと、即ち
資本制社会以外の国家―社会が体制として成立したという見解を
疑わしいものとしておさえるということであつた。

それまで次のような見解は最も支配的なものであつた。
戦後世界―過程の危機と矛盾は、資本制社会が「社会主義社会」
の体制への発展によって、不断の危機となつていくことであり、
そのため資本制社会の支配階級―帝国主義者が体制間戦争を準備
していることである。

勿論この対極に、資本制社会の発展が「社会主義社会」の不断
の危機を形成し、「社会主義社会」の支配階級―全体主義者が、
体制間戦争を準備していることという見解が存在してきたことも
周知のことだ。

そしてまた支配階級―帝国主義者が「民主主義―戦後憲法」を
拒絶、いしかえれば「民主主義国家」の完成を否定し、「反動的、
天皇制的、ファシズム的国家」の復古―再生を志向―準備してい

世界―過程を支配しているものの認識に、私達は到達していたの
である。

私達が60年の過程と経験から手に入れた認識はだから次のよう
なものであつたといつてよい。

「わたしたちはいまや当初に強いられた問いにかえらなければ
ならない。文学者よ、この現実のなかをどこへ行こうとしている
のか、と。タブーはふたつだ、わたしたちは「社会主義」へ行く
にきまつていると答えることと、この社会の情況に満足している
と答えることを禁じられているのである。すると、すべては決定
的に未知であり、新しくはじめられるものでなければならぬ」
（吉本『戦後文学の転換』より）

戦後世界―過程の内部に成熟し、必然的に離陸し、その総体と
激突するエネルギーと力のあらたな性格を着目していたのである。
けれども私達は60年の過程と経験のなかでは――それは不可避
に私達の主体―原理の水準と関連するのであるが――戦後世界―
過程、情勢―情況に輪郭、像、論理を与えることは出来なかつた。
旧共産主義者同盟のこの位相での敗北と解体は、みずからが実践
のうちに開示し、イメージ化した戦後世界―過程の過渡性と、そ
れに輪郭を与えた時立脚した理論との矛盾にあつた。

革共同は旧共産主義者同盟のこの矛盾を論理やイデオロギー、
内部の問題へ歪少化したのみであつたし、諸党派は気付きもしな
かつた。

しかし私達もまた戦後世界一過程のイメージへ輪郭一像一論理を与えようとした時、表現へ到った時、旧共産主義者同盟と同じ矛盾と限界に達着したのである。その表現への過程で我々もやはりトロツキーや宇野のエビゴーンとしてたちあられざるを得なかったのだ。

戦後世界一過程、情勢一情況の把握一認識に、67年一69年のたかひはあらたな「経験」と「領域」をもたらした。

それは「ベトナム革命戦争」を媒介とする第三世界であり、「沖繩」であり、「市民社会一社会過程」での流動である。これらへの関わり、実践は私達のイメージと表現（論理）の矛盾へはねかえるものであった。戦後世界総体と激突するエネルギー、力、精神の方向性とそのイメージと、その表現に於て、私達が60年代に依拠していた水準と内実を越えるものとして、過渡期世界ということが提起された。

私達は戦後世界一過程がその内部に成熟させてきた矛盾、その内部に息づいているエネルギー、力、叛逆的精神をイメージ、表現にわたって方向性をつかみ、実践の方途を提示しなければならぬ。

ここではしばしば総括に言及しよう。

戦後世界一過程の内部に成熟し、そこから離陸し、秩序総体と激突する力やエネルギーや叛逆的精神は空間として第三世界に集中しており、それ以外のところでは時間として耐えることを余儀

なくされている。

戦後世界総体をはせみると、戦後の円環的一閉鎖的秩序をつぎやぶり、そこから離陸、激突することで、その変革と革命的改変を可能とする空間と時間の存在のおびただしい距離としてある事態をはせわたせる実践が問われている。

「ベトナム革命戦争」（第三世界）一「沖繩」一「市民社会一社会過程」での流動という67年一69年の経験を、戦後世界一過程の過渡性を現実的展開として対象化してきた。

これらの現実的展開を私達は「国家一国境を越える」革命とプロレタリアートの自己表現としてとらえてきた。ベトナム革命戦争は、「戦争」一「平和」の密通した交通一関係、いかえれば戦後の国家間、体制間を越えるものであり、そのはざままで展開されているものである。

戦後過程によって、またその円環的一閉鎖的秩序は必然的なものとして「戦争」一「平和」を展開してきた。その戦争は、経済過程の必然的根拠から解かれるべきものであったか、その必然的根拠はイデオロギー的根拠から解かれるものであるか。

それらは部分であるか、ないしそのように把握するときは媒介が必要である。

「ベトナム革命戦争」が国境を越えるとは、戦後世界一過程の円環的秩序を越えるたかひを帝国主義的な「戦争」一「平和」、一「社会主義的」な「戦争」と「平和」を越えるものとして展開してき

たことだ。帝国主義的一「社会主義的」な「戦争一平和」は、戦後世界総体の構造と関係が、「戦争」一「平和」を必然にして不可能とさせている事態を示している。国家を成立させる観念のもつ衝動力も現実力も、「戦争」を必然にして不可能にしている。

この戦後世界一過程総体の構造と関係を革命的に改変するエネルギー、力、精神が、戦後世界一過程総体の構造と関係と離陸し、激突する構造一関係の創出として、外化された時間一空間として「ベトナム革命戦争」は存在する。

「市民社会一社会過程」での流動は、「市民社会一社会過程」から離陸するエネルギー、力が、己れ総体の関係一構造と激突し、新たな関係一構造を生み出したことであらわれていく。

帝国主義的社会再編に対するたかひとして展開されたこの流動は、新たな関係一構造（私達はこれを、共同性への衝動と外化とよんできたのであるが）を創出し、これは新たな空間性を創ったのである。

この空間も確かに「政治的」なものとして、いかえれば時間として外化されるほかなかったのであるが、この提示した、開示した関係一構造は、旧来の階級的関係一構造、即ち時間と空間を串刺しするものであったことはまごうかたなきことなのだ。

それは「政治的國家一市民社会」のはざまから生まれ、はざまを形成したのである。戦後過程に於る「市民的社會一政治的國家」のはざまを形成し、それから離陸した流動は、これまで政治過程

での「民主主義としての國家の完成」、社会過程での「近代的市民社会一秩序の完成」へ集約されたものであり、その枠組みを越えたことはなかったのである。

「沖繩」は外に「戦争」と「平和」の、内に「階級的抑圧」と「民主主義」の関係一構造一総じて交通を形成することで、戦前一戦中過程に到る國家の歴史過程を転移させてきたことに対して、ちょうど第三世界が戦後世界総体で占めた位置をもったのである。

明治百年史過程、また戦後史の過程から疎外されることによって、「天皇制」からも「民主主義」からも、その二重性の緊張と転移一相互変容のうちに進展してきた、日本に於る國家一政治のはざまとしての時間一空間を「沖繩」は占めるのである。

「ベトナム一第三世界」一「沖繩」一「市民社会」での流動を、赤い糸のように貫く共通性を、私達はそのようなものとして表現してもよいであろう。私達が過渡期世界と名づけてきたものは以上のごとく、戦後世界総体、日本社会総体のはざまからいって、それと激突する（関係一構造）（時間と空間、あるいは新たな共同性）の形成の歴史的一社会的根拠を示してきたのである。

ところで私達は過渡期世界にどのような輪郭と論理を与えてきたか。また何をメルクマールとしてきたか。

私達は「過渡期世界」の指標をどのようなものとして把握するか。世界総体の構造一関係としては、それを構成する諸國家一諸民族

の等質化—等価化への接近と不均等の極限化である。世界総体の構造—関係に於て、諸国家—諸民族は近代的共同社会（政治的—民族的國家／市民的—國民經濟的社會）として等質化へ接近し、その発展、軍事—經濟諸力で、不均等発展が極限化されている。

世界総体の構造—関係の内部で、近代的共同社会（政治的—民族的國家／市民的—國民經濟的社會）はマルクスの時代においてヨーロッパに限定されていたし、レーニンの時代であっても、すでに近代的共同社会として爛熟していた帝国主義とよばれる諸國とそれに向かおうとしていた植民地とが主要であったが、現在はいより拡大しているのである。他方では軍事力—經濟的諸力で不均等発展は極限化するほかなくなっている。

「政治的—民族的國家、市民的—國民經濟的社會」を単位とする諸國家—民族の成立と等質化、その発展の不均等という矛盾、そのなかで形成される交通様式こそ、「過渡期世界」の指標である。

マルクスの時代、レーニンの時代から第二次世界大戦へ到る過程は「政治的—民族的國家」の性格（イデオロギー的ではない）、「市民的—國民經濟的社會」のそれであれ形式的にせよ等質化は存在していなかった。

つまり近代的共同社会を共同体として成立させていた諸國家—民族と、それに到る段階のそれとの共存や関係は、私達が一九四五年をメルクマークにこの関係に於ける等質化へ向かったという

段階とは、決定的な違いをもつものである。

これまでの歴史的な諸矛盾は、近代的共同社会「政治的—民族的—市民的—國民經濟的社會」内部の階級的矛盾、逆に諸國家—民族間相互の矛盾が、世界的—国内的再編成を要求するものであった。世界総体の関係—構造の再編成過程が「戦争」へ到る危機として私達はこれまで、世界総体の関係—構造が危機—矛盾をはらんできたことを知っている。

「過渡期世界」とよばれる今日の世界総体の関係—構造も、近代的共同社会「政治的—民族的國家／市民的—國民經濟的社會」の等質—等価化と、発展の軍事的—經濟的不均等性の極限化の中で、再編が要求されている。いいかえれば、世界総体の関係—構造の世界的—国内的再編を不可避とする危機にあるのである。

ところでこの世界総体の構造—関係の再編過程が、20年から30年代の過程とどのように異なるのであるか。

30年代に於る世界総体の構造—関係の再編は、その構成体である諸國家—諸民族相互の関係—構造の等質化と、発展に於る不均等の平準化を目指すものであった。だが、世界総体の構造—関係が、下部構造での世界性と上部構造の一国性が、近代的共同社会「政治的—民族的國家／市民的—國民經濟的社會」の相互性に依って調和するという近代の幻想、近代の枠組みを越えることはなかった。

世界総体の構造—関係の再編が、総体の構造—関係の改変とし

て、いいかえれば諸國家—諸民族を近代的共同社会の交通のうちになりたせざる構造—関係の改変として存在しなかったということである。

それはちょうど、国内的—國民的再編が「民族的—政治的國家／市民的—國民經濟的社會」の枠組み、そのものの再編をせまらなかつたようにである。

たしかに再編を要求した諸國が世界総体の関係—構造の本質を改変するような要求を、「インターナショナル」や「アジア解放」—「民主主義」ということとして提示したようにみえる。それらは國家的—民族的主張の急進化にすぎなかつたという矛盾をもつたのである。

それは世界総体の関係—構造としての近代的諸關係の、近代的存在様式の否定でなく、その成熟—完成様式のちがいを主張したにすぎなかつたのである。ちょうど国内的—國民的再編が近代的共同社会の成熟—完成様式の差異にすぎなかつたようにである。

ただ特徴的なことは、世界総体の、一国の關係—構造の改変、再編が、近代的諸關係—構造を止揚、あるいは超—せねばならないという要素を含まざるを得なくなつたことである。

比喩的にいえば、民族的主張／ナショナリズムはインターナショナルな表象をもってしか成立しなくなつたということである。だから戦後過程に於る体制論が、民族的—國家的主張の幻想であり構造化されたものにすぎなかつたのも自明である。

今日の世界総体の関係—構造の再編—改変は、諸國家—民族間の、經濟的交通の近代的存在様式そのものもつ「民族的—政治的國家／市民的—國民經濟的社會」構造—関係のそれとしてあらわれるよりほかないものとして存在している。

國家—民族を媒介として階級的統合軸を持つ現在の支配階級が、再編—改変をやり抜けないこと、またその展望をもっていないことはあきらかである。

支配階級はブルジョア—地球主義として、近代的諸關係—構造を止揚—超克するという幻想と、旧来の再編方法との二重性、矛盾的二重性のうちに解決の方途をさぐるよりほかないのである。同様に「市民的社會」と國家の關係においても然りである。

私達が「過渡期世界」の成立として、一九四五年に着目してきたのは、世界総体の関係—構造、一国での「政治的—民族的國家／市民的—國民經濟的社會」の關係—構造の成熟—完成様式のちがいが相互転換—変容可能なものとして同一性へ到る出発点であるからであり、このような關係—構造内部での再編を拒絶し、新たな世界—一国の総体の關係—構造の成立する諸条件の存在が、ここから出発したと把握するからである。

そうであるが故に、私達は「米國圈」に代表された諸國と、「ソ連圈」に代表された諸國に流布されている見解のように、世界総体の關係と構造、諸國家—民族内での關係と構造を相互転換

変容不可能な異質なものとしては把握しないのである。この関係と構造を、資本制社会と社会主義社会との関係として把握しないのである。

これら諸国の相互転換―変容の可能性は、頂度日本に於る国家内部に存在してきた二重性のそれと同じであるといつてよい。

世界総体の構造―関係に於る近代の成熟史と近代的共同社会「政治的―民族的國家／市民的―國民經濟的社会」の成熟史としての明治百年史は重なるのである。

30年代世界総体の構造―関係の内部で、明治以降の日本近代史の内部で、世界―日本の近代の再編要求として登場した、反近代―反資本主義の時間と空間が戦後過程の中で近代―資本制へ構造化されるか、相互転換―変容可能なものへ到るかの根拠と過程がはっきり総括されるのである。

世界―日本の近代の内部で成熟した反近代―反資本制のエネルギーと力が、精神が、「反近代や反資本制」の幻想に彩られた近代―資本制と、伝統的な近代―資本制との円環的―閉鎖的關係―構造へ吸収されていく地平からの離陸と分岐として「過渡期世界」は存在するのである。

「過渡期世界」の自然発生的諸力が、円環的―閉鎖的關係―構造へくりこまれていく地平から離陸と革命的改変への地平に到っているところ、その根拠の底深い成熟と、それによる現在の危機

上であるにすぎない。

危機に接近すればする程、コミンテルン期の教義体と30年代への類推へ到ってしまう彼らの現実との闘争こそ「過渡期世界」の把握についてのたまたかであった。彼らには旧共産主義者同盟の実践的―感性的危機の体現とその表現―表出をめぐる矛盾や苦悶などわかるすべがなかったし、旧共産主義者同盟がその逆説的な死によってこの矛盾を告知したことなどわかる筈がなかったのである。世界総体の関係―構造の近代的成熟史と明治百年の近代日本の成熟史とを総体として把握し、世界的―日本的な「反近代―反資本制」の運動が体制にくりこまれるか、相互転換―変容したかをふまえ、「過渡期世界」、情勢―情況の把握にあたって、古典的方法や安易な類推から訣別するなど思いもよらなかったのである。

「過渡期世界」の危機、情勢―情況の危機や矛盾が、今日の世界総体の、日本社会総体の関係―構造から離陸し、その革命的改変をめざすエネルギー、力、叛逆的精神を形成するのであるが、それが30年代の「反近代―反資本制」、その延長上での論理や心情と渾然としてあらわれてくるのは不可避である。しかし真なるものを視るたまたかいと苦闘がいるのだ。

もしそうであったら、67年―69年への過程で、情勢―情況を「革命的昂揚期」から「革命情勢」への過渡期などという把握を生まなかったであろうし、「ベトナム革命戦争」―「沖繩」―

こそ30年代との分岐なのである。

私達が旧マル戦派―赤軍派―戦旗連合派、また彼らを媒介として、新―旧左翼諸派と、この過渡性期世界をめぐって対立してきたのは、彼らがロシア革命の成立によるソビエト國家の形成が世界総体の構造―関係に於て、國家的―民族的内部の構造―関係で反近代―反資本制の共同社会（そのような時間―空間が）成立し、そこから近代社会の永続的危機が發展しているという理論―思想、情勢認識から訣別出来ないからである。コミンテルン期に確立し、教義にまで高められ流布されてきたこの見解と訣別出来ないのである。

ロシア革命の成立とソビエト國家の成立、その拡大が、今日の世界―一國の關係―構造の再編を不可避として生み出し、現代の永続的危機を生み出しているという見解と、他方でソビエト國家の發展と拡大がその内部変質と帝國主義との円環的―閉鎖的關係―構造の補完となっているという見解との矛盾をときえないのである。革マル派のように、この矛盾を「反スターリン主義」の問題へ、いいかえればイデオロギーの問題へ解消するか、また旧マル戦派のように世界資本主義論による危機の把握しか出来なかったのである。

戦旗理論戦線派の日向のごときはこの矛盾を理論―思想の範囲では革マル派のようにふるまい、現状分析では旧マル戦の延長線

「市民的社會―社会的過程の流動」への正確な評価―判断を形成出来なかったというのではないのである。

赤軍派の情勢―情況認識の空想性と誤謬についていけなかった戦旗連合派が、赤軍派批判を私達の情勢判断でおこない、赤軍派の心情で一方私達を批判してきたのは彼らが何もわからなかったことを意味する。

原理的な（スコラ的なという意味であるが）論理とプラグマティックな情勢―情況判断―認識の間でゆれろごき、何ひとつ建設的な実践を生み出せなかった戦旗連合派など問題ではないのである。

反論があるなら戦旗紙上で君らがくり返した主張を、一年といわないが半年にわたって検討してみるがよい。ひとつの主張が、或は情勢認識が、いつの間にか何の脈絡のない主張にとってかわられていることが明きらかとなるであろう。

私達の影のような存在であった情況派に若干ふれよう。

彼らは共産主義者同盟内の「過渡期世界」をめぐる情勢―情況認識について、何の提示もせず私達の主張を公的にくり返すだけであって、他方で戦旗連合派と同じ主張をかっての中央委で述べ、同じ内容を恥ずかしげもなく主張したのである。（松本礼二著の赤パンフ『過渡期世界と階級闘争』）

共産主義者同盟九回大会とそれへ到る過程ですでに、その後の過程における党内闘争に彼らがかかわれないこと、無縁でしかな

かったことが明きらかになつてゐる。私達が『叛旗』（8号）で主張した内容が彼らには戦旗連合派批判へのかくれみのにしかすぎなかつたのだ。

確かに私達は彼らと共同フラクを形成してゐたのであるが、私達としては彼らが何ら問題を提示せず、部分的な意見を語るだけである限り、それをくりこむ努力をするしかなかつた。まことに今もってわからぬのは、彼らが突然の如く私達が批判してきたその当の見解と同じ内容を主張したり、無関係な評論家の見解を密輸入することを、何の恥じらいもなくおこなうことである。

理論―思想や認識での中途半端性は、実践の中途半端性と密通するということがわからないのであろうか。いつも中途半端な実践家には中途半端な知識人―同伴者が鳥合するものであり、理論―実践もサロンへ変わってしまうということがわからないのであろうか。

情況派の諸君が何の恥じらいも総括もなく、今もって『叛旗』の引用をもつて彼らの主張となしてゐることを許しはしないのだということ警告しておこう。

67年―69年へ到る「ベトナム―沖縄―大学」闘争のエネルギーや力の根柢を、情勢―情況の「過渡期」の認識との関連でふれた。次に67年―69年のたまたかいで私達の主要な問題であった主体―原理の「過渡性」についてふれよう。最後に私達の展望と方針とし

てこれらは関連づけ、展開させる。

△4▽

67年―69年への闘いのなかで、私達が想いをこめてきたのは、「過渡期世界」の特質をもつとはいへ、戦後世界―過程の成熟、情勢―情況の限界づけられた水準のなかで、主体―原理の「過渡性」を越え、主体―原理の創出過程での明治百年史の、戦後史の永続的敗北をのりこえようとするのであつた。

またこのことによつて67年―69年の闘いが戦後世界総体の構造―関係から離陸し、それと激突することで形成した構造―関係（時間―空間といつてもよいし、階級的団結といつてもよいのであるが）永続化させたのであつたのである。

私達がある時はともに闘い、また党派闘争の対象となつた新―旧左翼はこのことにとんと無自覚であるか、良質の部分さえ殆んど盲目である。

「革命」のかくめいへ、関係のかくめいへという主張によつて、私達はこの主体と原理の創出を語ってきた。さきに私達にとつて、主体と原理というのは、私達の実存としての関係の内部で、或いはそのものとして不可避に交又する現存性と歴史性、存在と意識、時間―空間の総体を貫き表現する意識力―自然力であると記した。これは次のことを意味してゐる。

私達が、階級―主体―原理を表現したとき（正確には階級的実存を意識的に、自然的に顕在化したときといふべきであらうが）、ばならないのであるが、支配階級の階級形成は次の様にあらわれてくる。支配階級―ブルジョアジーはこの領域での階級支配の根柢を国家―民族においていくのだから、今日の世界構造―関係の枠組みを交えることは出来ないのであるが、世界構造―関係から離陸し、それと激突し、そのはざままで形成される関係―構造の創出によつて引き起された自己の階級的統合軸の危機を、国家的―民族的表象―表現を世界的―普遍的なものとして（あくまで疑似的なものであるが）表象―展開することで解決しようとするのである。勿論「ナショナリズム」や「排外主義」の強化との矛盾的な二重性としてである。

この前者は、体制的表現や表象へいたるブルジョア地球主義とも「疑似労働者主義」ともいふべきものへ収れんし、そのみせかけのはなばなしの対立にもかかわらず、相互変容可能なものとして、現存の関係―構造の保持で統合されていくのであろう。「平和」―「民主主義」―「経済開発構想」が具体的展開となるのである。後者は「戦争」―「ナショナリズム」―「侵略」の強化となるのである。

諸国家―民族間の関係―構造に於て、その関係―構造を突き破る階級形成は、世界総体の関係―構造から離陸し、それと激突し、新たな時間―空間を形成するということであり、今日の世界のはざまで、近代世界総体の打倒とその革命的改変をなす世界プロレタリア独裁へ向かう世界的プロレタリアートへの自己展開をなすということである。現実過程としては民族的な表現―表象をとるのであるが。

この領域に於て私達は、支配階級の階級形成とたたかわなければ

国家―民族に立脚する今日の支配階級は世界関係―構造の内部で、その階級的統合軸をブルジョア地球主義や「疑似労働者国際主義」という世界的な表現―表象と、「ナショナリズム」や排外主義という表現―表象、いかえれば二重の表現―表象によつて提出し、その実践的展開によつて、被支配階級―プロレタリアート形成する関係―構造をくりこんだり、解体しようとするので

あり、それが彼らの階級形成である。

これに対して、世界総体の関係―構造から離陸しそれと激突し、新たな関係と構造を形成する被支配階級―プロレタリアートの階級形成は、世界的表象―表現と民族的表象―表現の二重性の提出とその実践的展開である。

この二重性の関係は、普遍と特殊の関係ではない。何故なら世界一般がないように、民族―国家一般もないのであるから。

支配階級―ブルジョアジーが階級的統合軸の表現と実践を二重性に於て展開するのに対して、被支配階級―プロレタリアートもそうなのであるが故に、階級形成は「革命」と「反革命」のせめぎあいとしてあらわれるのだ。

がしかしその決定的分岐点は、ブルジョアジーは、支配階級がどのような世界的表現をたどろうとも、「国家―民族」の枠を越えることが出来ないということによって現存の世界関係―構造内の再編しか出来ないのに、被支配階級―プロレタリアートは、民族的表現をたどろうとも「国家―民族」を越えることが出来るということであり、そのことによって現存の世界関係―構造を革命的に改変することが出来るということである。

けれども私達は現存の世界関係―構造から離陸しそれと激突しながら新たな関係―構造を形成した表現と実践が、そのままくりこまれていっただけでなく、現存の世界関係―構造内のそれと相互転換―変容可能なものとなっていき、ついには閉鎖的―円環的

情況―秩序の支柱へ転化したことを知っている。

「近代―反資本制」―「社会主義」として表現―実践する階級形成のたどりついた経験をもっているのである。

私達が階級形成に、主体と原理ということを語ってきたのは、この敗北を、客観的な歴史性に、また主観的なイデオロギー性に還元しないで、まさに歴史性も現存性も含めた意識力―自然力の総体から押えていこうとするからにほかならないからである。

諸国家―民族間の関係―構造の新たな創出としての階級展開は、被支配階級―プロレタリアートの世界プロレタリアートへの展開であるが、この現実的展開が絶えず民衆―民族的な媒介をもってなされ、ブルジョア地球主義や「疑似労働者主義」、ナショナルズムや排外主義と闘わねばならないということは、結局のところ、民族的―ナショナルな表現―表象をもちながら展開を続ける世界構造―関係から離陸しそれと激突しながら形成される構造―関係の同時的創出を、相互転換―変容可能なものへ発展させていくことよりほかない。

例えば今日では、第三世界とよばれる諸国から形成される新たな構造―関係と、帝国主義諸国及び「労働者国家」から形成されるそれとは、また国家―民族で形成されるそれは、世界構造―関係の内部の諸国家―民族間のはざまを形成し、新たな構造―関係を創出するという意味では共同性や共通性を有するが、また各々

個有の独自性をも有するのである。

旧来「インタナショナルイズム」と「ナショナルイズム」の関係として論争されてきた共同性や共通性と独自性の問題は、プロレタリアート―民衆にとって先験的には「インタナショナルイズム」も「ナショナルイズム」もないということなのである。

プロレタリアート―民衆―被支配階級にとって「インタナショナルイズム」―「世界性」は抽象的―先験的に存在しないし、また「ナショナルイズム」―「民族性」もである。インタナショナルイズムや世界性は、ただプロレタリアート―民衆―被支配階級がその国家的―民族的媒介を通して（必然的な時間、空間を通して）ということであるが、現存の世界関係―構造から離陸し、その革命的改変を内包する関係―構造を形成したときだけ存在するのである。

また「ナショナルイズム」や「民族性」はただプロレタリアート、民衆、被支配者階級が世界関係―構造の内部で、国家―民族の存在、それを最も高度な共同性としての相互交通―関係の上で世界の関係―構造が成立すること、それが普遍的であると認められただけ存在するのである。

私達がこの時深く考慮を払わねばならないのは次の点である。

あるひとつの国家的―民族的媒介を通して形成された時間―空間、或いは関係―構造は、「インタナショナル」「世界性」であって、そのまま世界性へは転化しないということである。また「インタナショナル」「世界性」は、国家的―民族的媒介を

もってしか形成されないということである。

だからインタナショナルイズム、世界性は国家的―民族的媒介を通して、世界構造―関係から離陸し、それと激突しながら形成される構造―空間が相互転換―変容へ発展していくことになかにかないものである。

例えば「ベトナム」―「キューバ」で形成されている「インタナショナル」―「世界性」というべき関係―構造は私達にとってそれはそのまま「インタナショナルイズム」でも「世界性」でもないのである。こういう考え方は近代主義の裏返しともいえるべき表現にすぎない。

私達にしてみれば、こういう考え方にたつ赤軍派が理念の上で初期コミンテルンに、現実過程で「北朝鮮」「キューバ」へ到るのは必然であったのだ。戦旗連合派や諸左派は、それをつきつめなかつたにすぎないのである。

このことは逆に、私達が「インタナショナル」「世界性」ともいべき関係―構造を形成しても、それは「北朝鮮」「キューバ」のそれにはそのままではならないのである。

例えば、真にインタナショナルなのは、「ベトナム」―「キューバ」で形成されている関係―構造と私達のそれとが、相互転換―変容可能性への発展によって、「ベトナム」―「キューバ」の私達の、関係―構造が転変していくことなのである。

世界プロレタリアートの階級形成とはそういうことであり、その展開は世界性と民族性の二重性の展開であり、ブルジョア的枠

での二重性の解体と止揚なのである。

誤解のないようにいえば、ここでいう民族性とは、階級への表現や展開が民族的—国家的共同性を媒介としなければならぬということである。

国家—民族内部での関係—構造としてあらわれる階級的展開は、正確な意味では、政治的国家内部でのその展開と、市民社会—社会過程での展開とであらわれる。両者の関連に目をやりながらふれてみよう。

私達にはこれは、明治百年—戦後二十五年史を、日本に於る「政治的—民族的國家／市民的—国民経済社会」の成熟史として押える立場からなされる。

支配階級—ブルジョアジーは、日本に於る政治的国家—民族的國家の形成を、「民主主義としての日本」の土着化と「日本の自然の國家化」への二重の緊張関係を含みつつ、國家の完成となしてきた。そのことによって階級を信仰（宗教）として根拠づけてきた。

戦前—戦中過程で天皇制に象徴される政治的關係—構造が解体したとき、「民主主義としての國家」へいち早く転位をとげた。彼らは政治的国家—民族的國家の根拠を、「日本の自然信仰（宗教）」の觀念的共同化から、体制間論を媒介とする「世界性」の

觀念的共同化に転位させた。

いいかえれば、ナショナルなもの永続性から、「世界的」なもの普通性へ転位させたのである。

けれどもここでいう「世界性」は、これまで幾度と展開してきたように、民族的—政治的國家の表現—表象であったのだから、体制間論を媒介とする転位は、戦前—戦中過程に於る二重の緊張關係での共存によって見事に展開されたというほかない。支配階級—ブルジョアジーにとっては國家完成—成熟様式の転位にすぎなかったのである。戦前—戦中過程に於て、「天皇制的」な政治關係—構造から離陸し、それと激突することで政治的關係—構造を形成した階級的展開はこの転位の過程を通して支配階級—ブルジョアジー—八くりこまれるか、相互変容可能なものとして解体させられていったのである。

だが戦後過程は「民主主義としての國家」の成熟過程であることによって、天皇制としての政治的關係—構造、民主主義としての政治的關係—構造、いいかえれば共同性から離陸し、それらと激突しながら、新たな關係—構造（共同性）が階級形成として展開される情況を生み出した。天皇制としての政治的構造—關係、民主主義としての政治的関係—構造から疎外することによって、新たな關係—構造を階級形成として展開するということは、政治的—民族的國家のはさまに到るということである。

この政治的關係—構造は60年の過程に於いて「過渡的」に展開からやってくるからなのである。

されたのであるが、この創出が私達にとって「政治的國家—民族的國家」の形成—成熟過程として歴史的に展開されてきたそれと根底から対決せざるを得ないのであるのは明らかである。そしてこの政治的共同性の創出の闘いが、「ベトナム」「沖縄」「市民的社會—社会的過程」での闘いと関連しなければならなかったのは、したのは何に依っているか。日本に於ける天皇制としての國家、民主主義としての國家の關係—構造から離陸し、それと激突すること、政治的關係—構造を創出する展開は、日本の近代總体と（それは30年代の「反近代—反資本制」運動のみこんでいる底深いものであるが）対決せざるを得ないし、それは世界過程で近代の總体と対決し「インターナショナル」—「世界性」を表現してベトナム革命戦争をくりこむ、それへ変容可能な発展へ到ることで、世界プロレタリアートへの階級形成へ開かれていなければならないのである。

「沖縄」は明治百年史が、その展開過程に於て、天皇制としての國家、民主主義としての國家からも疎外され、抑圧された關係—構造であることによって、それを相対化する關係—構造であるだけでなく、私達が展開しようとする關係—構造（共同性）と深く連環するからなのである。それは私達が創出しようとする政治的關係—構造が、國家—國境の枠を超えることが出来るかどうかであったのだ。「市民的社會—社会的過程」との関連は「國家—民族」の相対化のもうひとつの過程が市民社會—社会過程の内部

再編に対する闘いとして展開されたのであるが、その中で私達が注目していたのは、この闘いが「市民社會—社会過程」と離陸して、バリエードに表現される關係—構造を形成したことである。どのような政治的共同性に基づく闘いもある面では社会的表現や表象となるように、どのような社会的共同性に基づく闘いもある面では政治的表象、表現をとるものである。けれどもこの社会過程での闘いは新たな社会的共同性を形成したことはまちがいのないことなのである。旧来社会的な闘争は改良一般か、政治闘争の手段としてみられるか、その反発としてサンデカリズムに到るものがあった。たしかに現実の過程では社会的闘争がそのような展開しかなしとげられないということは予測出来たことであつたといえるであろう。が戦後過程に於ける「市民社會—社会過程」の成熟に根拠を持ち、旧来の、現存のその内部での關係—構造から離陸し、新たな關係—構造を創出した意味は社会的階級としてのプロレタリアートの階級形成への端初であつたといえるであろう。

その敗北は社会的プロレタリアートへの階級形成としての社会的共同性が被支配階級—民衆内部の、社会過程總体の現存の關係と激突し、それが生活過程のもつ自然カー意識力と拮抗することが出来なかつたということであるのだが、その形成した社会的共同性を歴史性と本質性に於いてどのような位置と意味を有していた

かははっきりさせておかなければならないのである。

その歴史性に於て、「政治的國家―民族國家―市民的社會―國民經濟的社會」の成熟過程を契機―媒介として、この現存的關係―構造から離陸する、そのことによって市民社會―社會過程の内部から總体の革命的改變を根拠づける存在が過渡的なものであれ創出されたということである。本質的には、社會的プロレタリア―トへの階級形成への端緒であったということである。

このたたかいと政治的領域での闘争との關係は、階級形成としての政治的關係―構造の創造が相対化されるだけでなく、そのことによってそれが本質的に開かれていくということである。この兩者の關係は、ちょうど政治的―民族的プロレタリア―トへの階級形成と世界的プロレタリア―トへの階級形成がもつ關係と同じである。

さて、主体と原理が諸國家―諸民族間、政治的國家―民族的國家内部で、また市民社會―社會過程での階級展開としてあらわれた時、私達が何を提示したか、その敗北にふれよう。

67年―69年（70年といってもよいが）、これらはベトナム―沖繩―大學を焦点とし、それを媒介としての階級形成をめぐる支配階級との攻防となって展開された。

この過程に於る私達の困難さは次の点に存在した。この三つの領域での闘争は相互に深く関連しながら独自の展開をとげたが、

「情勢―情況の過渡期」をめぐる論争―経過のなかでこれらが展開されていったことはこれまで叛旗各号でなされているので、この領域については詳しくふれない。（世界論、または世界プロレタリア―ト独裁論と「情勢―情況の過渡性」との關係）けれども主体―原理としてこれがどうであるのかについては、ふれる必要があるであろう。

私達が共産主義者同盟の党内―分派闘争として、諸党派との党派闘争としてこれらの領域での論争を展開してきたときいつもいらだててきたのは、私達を除いて、これらの領域で主体―原理について検討するということが盲目であるものか全てであったからだ。スコラ的な理論戦線の日向、また仏論文いづれを読んでもつまらないのは、そこから主体―原理に関して何らの衝動も感じないからである。情況派の松本論文がそれ以下であったことは語るまでもない。

先に「インターナショナルリズム」―「ナショナルリズム」も先験的には存在しないといった。

世界や國家（民族）という概念で表象―表現される關係―構造についてもそのようなのである。世界は全体性―普遍性、國家は部分性―特殊性というようには存在していない。世界を國家の連合―總和、或いは國家を世界という共同内の一共同体というように考えてもそうであり、このように存在してない。また逆もそうなのだ。

このように考える限り、世界―普遍性というのは空間性では地

この連関と独自性をどのように提示し、かつそれぞれの表現と実践を私達の意識力―自然力として展開するかということである。

私達の実存―存在にあってこれら三つの領域（諸國家―諸民族間、政治的國家―民族的國家内部、市民的社會―社會的過程）は、相互に關係づけられ總体を含んだものとしてあるのだが、表現―表象される時は分離してなされるのである。分離して、關係づけられる關係―構造（共同性）こそ、私達が階級として実存し、支配階級が存在する根拠である。

私達の階級形成へ向かう主体―原理は、諸國家―諸民族間、いかえれば「政治的―民族的國家／市民的―國民經濟的社會」間の交通、關係―構造で成立する現存の世界という共同性を世界プロレタリア―ト独裁という共同性で解体し止揚していくことである。また、現存の「政治的―民族的國家／市民的―國民經濟的社會」をソビエト的共同性によって、解体―止揚していくことであり、あった。

この時決定的に問われたのは、私達が世界という概念をどのように把握するかということである。

「國境を越える革命」、「プロレタリア國際主義の復権」という表現によって示された世界プロレタリア―ト独裁論の萌芽は、私達の展開では、共産主義者同盟内の党内―分派―党派の過程を経て、世界同時革命論―過渡期世界論へ、世界党―世界赤軍―世界反帝戦線論への論争に煮つまっていた。「ベトナム革命戦争」

域性へ、時間性では歴史性へ還元されてしまうのである。ひとつの國家―民族の特殊性―部分性が、そういう概念が世界―普遍―全体性と関連づけられる時、それは他の諸國家―民族の地域性、歴史性へ具体的に還元されるのである。（正確にはそれとの關係ではかられるのであるが）

このことは逆に、ひとつの國家―民族の地域性―歴史性が普遍性―全体性として転化されることも含むものである。

私達が世界と國家―民族の關係―構造について経験してきた、もってきた歴史と主体はこのようなものであった。いわゆる「近代主義」や古典マルクス主義は、他國家―民族の地域性―歴史性を媒介として世界―全体性―普遍性と自國―特殊―部分性ということを展開してきたのであり、「ナショナルリスト」は自國の地域性―歴史性を全体性―普遍性へおし上げ展開したのである。

もちろんこの折裏も変形もあったことはいうまでもない。そして私達は「近代主義者」「古典マルクス主義者」と「ナショナルリスト」が相互転換―変容をくり返してきたのも知っている。

「國家―民族」の同伴概念としての「世界」「世界」の同伴概念としての「國家―民族」を拒絶し、そのようなものとしての「インターナショナルリズム」―「イショナルリズム」を拒絶し、そのはざままでこれらを超えてゆくことで、私達の近代が演じてきた悲喜劇にかたねばならない。「世界」という表現―現象、概念が登場した必然的根拠、「國家―民族」という表現―表象、概念が登場した必然的根拠を、共同体と共同体間交通の転換―変容によ

って超なければならぬ。私達にとって「世界プロレタリアート独裁」は「民族的・政治的国家」市民的・国民経済的社会」という共同体と相互関係―交通の転変―変容の上に形成されるものである。それは不可避に、「世界」―「国家一民族」と表象―表現せざるを得なかった旧来の共同性の質（関係と構造）によってよいのだが）をかえるものなのである。近代の世界総体の関係―構造が「世界」として（ブルジョア地球主義と疑似労働者国際主義として表現されている）体制間論を「国家一民族」としてナショナルリズムへたどりついた後から、そのはざままで形成され、新たに展開されている関係―構造の相互変容的發展の上にそれは実践的展開をみるであろう。けれども世界関係―構造から離陸し、それと激突することで形成される関係―構造（共同性と交通）が、現存世界総体の革命的改変へ突き進むためには、いかえれば現存の「世界」―「国家一民族」の共同性へ転換―変容しないためには次のことが必要である。それは歴史（時間）と地域（空間）の総体へ、最も抽象的なものと具体的なものへ、民衆のみなへ、はせいたる原理的考察力―実践力、思想力―感性力、総じて自然力と意識力が必要なのである。

今、私達にとって、それは生活過程の中で、政治的過程の中で、あらゆるものの拒絶へ到ろうとする自然感覚―感性のうち、
「自然―世界―歴史」―「意識―行為―所有」等々の思想―理念の根源的な検討なしにどうすることも出来ないという想いの中に

これらの領或に於ける私達の主張と展開は権力奪取（プロレタリア独裁）とソビエトの創出、また中央権力闘争とマッセーノスライキとしてなされてきた。これらをめぐる経過や、具体的な論争過程については叛旗各号を参照してほしい。ここでは詳しくふれない。これらの領或で私達にとって重要なのは60年安保闘争に於ける旧共産主義者同盟や三井三池闘争、谷川雁の大正闘争を羽田以降の諸闘争―諸大学闘争の実践的展開の中でどのように主体―歴史としてのりこえ、止揚してきたかである。天皇制としての国家、民主主義としての国家から離陸し、その関係―構造と激突する階級的展開が「ベトナム革命戦争」「沖繩」を軸とする「世界」「共同体内世界」として新たな関係―構造を、市民社会―社会過程での新たな関係―構造（社会的共同性）の創出を内包したということは決定的なことであった。また市民的社会―社会的過程での階級的展開も同じであった。私達が60年―初期のたまたかから新たな地平へ到ろうとするとき主体―歴史として旧来のたまたかいをのりこえるべき問われた軸や環は以下の諸点であった。即ち日本近代史がたどりついた、総体の（政治的国家―市民的社會）の共同性、また国家及び市民的社會の共同性の像―イメージを透察力としてもちえたかということである。たまたかの内在的生命力であった、近代的共同性、諸関係を超越しようとする衝動やエネルギーと私達は最も深く関ってきた。けれども私達もまた像―イメージによって現存の関係―構造から離陸し、拮抗を貫く

存在する。

「67―69年」へのたまたかの中で、私達が「国境を超える革命」―「プロレタリア国際主義の復権」をかかげ「世界プロレタリア―ト独裁へ」と展開してきたとき、主体―原理のもっていた限界は、コミテルン期に確立され流布されてきた「世界」―「国家一民族」像と原理的考察でも、イメージでも決定的に訣別をとげていなかっただけのことである。けれどもこの問題に最も深く接近し、かつその体系的展開は神津陽の『過渡期世界と世界同時革命』だけであった。

コミンテルン期に確立された「世界」―「国家一民族」像、概念と訣別をとげるといふことをイデオロギー問題に解消する革マル派―戦旗連合派、情勢分析に解消する旧マル戦派―情況派、いずれも無効であることは自明である。

日本の近代が私達に演じてみせてくれた悲喜劇を再演している民族責任論者から先進国革命論に到る新・旧左翼、いつか来た路へ環るだけなのだ。世界的プロレタリアートへの階級形成へ、支配階級―ブルジョア―の二重性をもった階級統括―統合の再編に抗して展開する回路は私達の方途のなかにしかないであろう。

さて政治的關係―構造の内部展開、市民的社會―社会的過程の關係―構造の内部展開として、正確にいえばそのような表現―表象を媒介としての階級的展開―形成についてふれよう。

くものとして限界に達したと語らなければならない。

他の点は「政治的国家―民族的國家」総じて政治的關係―構造（共同性）から離陸し、創出される政治的共同性と社会的共同性がどのような関係と連環をもつかについてである。

ことわるまでもなく、政治的共同性の創出過程と社会的共同性の創出過程相互には拮抗も、緊張も存在し、おあえつらい向きの予定調和があるのでない。また今日の社会ではどのような政治的共同性の創出も社会的なものとしてあらわれるし、また社会的共同性の創出も政治的のものとしてあらわれる。その上でなお私達はその独自性と全体性について問うているのである。

周知のように私達はこの相互の共同性を人間の存在の根底としての「存在と意識」―「意識と行為」、「時間と空間」、「幻想と非幻想」、「自己と他者」、総じて関係と構造から意味と価値としてとらえてきた。マルクスがプロレタリアートの措定にいたった根拠からえぐったのである。

この階級的表現が政治的プロレタリアートと社会プロレタリアートへととしてとらえられた。

私達は人間の実存が総体のからみの中で存在しながら現実的關係―構造へ表現―表象されるとき、不可避に政治的關係と社会的關係へ分裂し、その止揚のたまたかもこれを媒介せざるを得ないという怖しさを知っている。

だからこそ統一する原理を思想と実践のうちに要求されるので

ある。

政治的プロレタリアートと社会的プロレタリアートを結ぶもの、はせわたすものとして私達は了解という交通論を提出した。それは今相互容的發展関係というものとならなければならぬ。それを可能とする主体―歴史は何であるのか。

それは思想力―感性力、意識力と自然力に支えられた原理的洞察力と実践力なのである。私達が綱領と軍事と語ってきたのはその表現なのである。これらは最もゆたかな観念―想像力と具体的なゆたかな生活―自然力をはせわたることなしに存在しないのである。綱領―軍事が政治過程や社会過程で異った表現―表象をたどろうと、その表現―表象の限界をこえ、相互容的發展のうえに、全世界と「国家―市民社会」の総体をこえる共同性の創出にろうとするエネルギー、力をはらみえるのはそのときなのだ。（この具体的展開については神津論文を参照せよ）。

現存の世界の關係―構造から離陸し、それと激突するとき、形成される現存感―共生感をニヒリズム―アナキズム―ロマンテズムのかたへつき抜け開いていく、そこへ傾斜する頹廢を拒絶し、たたかうため、これは不可欠なのだ。67―69年のたたかいが凝縮し、敗北した地点をここからこえたいのである。

世界プロレタリアートへ、政治的プロレタリアートへ、社会的プロレタリアートへ階級形成への独自の關係―構造と全体の關係と構造の創出過程は主体―歴史からいえば結局ひとつのことである。

60年安保闘争後の後退局面と現在が異なるとすれば、支配階級―ブルジョアジーのこの現存によって、広範な被支配階級のエネルギーと戦闘力の、持続の根拠と現実が存在しているということである。

70年初頭から今日へ到る縮小再生産でありながら、60年代後半の過程を通じて社会党―共産党のヘゲモニーと別に成立した、広範な意味での革命的左派のヘゲモニーの大衆的―社会的確認と持続が存在することが、その左証である。

けれども69年10―11月の敗北過程を経て、67年―69年へ到る闘争を支えたエネルギー、精神、実践力は二重の解体と危機にみまわれている。

国家を媒介とする支配階級―ブルジョアジーの行政的―暴力的支配と統括の貫徹によって、行動や表現が不可避に秩序の枠組みに押しこまれていくということによって形成される解体と危機である。

また67年―69年の闘いのエネルギー、精神、力を永続化する主体―原理の敗北による、エネルギーや戦闘力の解体―風化である。いいかえれば、私達の階級形成に於る敗北により形成されるものからくる解体―風化である。

これまで幾度も展開してきたように、私達は明治百年史と戦後二十五年史に於る主体と原理の敗北過程を止揚する原点なしに、これをのりこえることは出来ないと言ってきた。それはまた70年

る。

独自關係―構造の創出と成熟は全体性への原理的考察力と実践力なしに不可能であり、その逆もまたそうなのである。

ハ5V

67年―69年へのぼりつめた闘いは、今どのように拡散し、どのような局面を経験しているのであろうか。

支配階級―ブルジョアジーは、67年―69年の闘争を行政的國家の暴力的統括によって粉碎することに成功した。即ち、67年―69年の諸闘争が現存の關係―構造から離陸し、それと激突することによって創出した關係―構造を暴力的に解体し、現存のそれへ封じこめることに成功した。

けれども支配階級―ブルジョアジーは、67年―69年の闘いが形成された根拠、闘いを支えたエネルギー、力、精神を彼らの階級形成の側から解体、とりこみ、構造化すること、いいかえれば政治的―思想的支配には成功してないのである。

戦後過程―世界の支配的關係―構造に叛逆し、新たな共同性への衝動にたつた矢を、彼らは打ち返すことができないのである。明治百年史と戦後二十五年史が、日本近代史が、その成熟事のはてにたどりついたこの矛盾を解決することができないのである。

代に於る私達の回路の発見でもあるのである。

72年―75年段階までを射程とした党派再編と大衆運動の転換を媒介として、軍事の組織化（表現―表出回路の形成）と綱領―戦略―戦術による階級形成―階級統合力を現実化させるこの方途に於る、当面の諸過程と方針について以下ふれよう。（私達の主体―原理についての、原点についての内容に関して、神津陽の第三論文を参照されたい。）

67年―69年に於る闘いを、行政的―暴力的支配と統括でのり切った支配階級―ブルジョアジーは、70年代への彼らの回路を基本的に戦後過程に於る階級的統合軸の保持にさだめながら、再編への方向のなかに展開しようとしている。

「ベトナム革命戦争」のアジアへの波及を焦点とする戦後の世界關係―構造から離陸し、それと激突しながら形成される關係―構造（共同性の創出）は、戦後の世界關係―構造に立脚する支配階級―ブルジョアジーの階級的統合軸と支配力をゆさぶるし、危機におい込んでいく。

これに対して支配階級は二重の過程を通して、「ベトナム革命戦争」の波及により形成される關係―構造（共同性）の解体に向かうであろう。ブルジョア地球主義と「疑似労働者國際主義」の補完關係の上に成立する体制論の再編によって、この共同性を現存の共同性との相互転換―変容可能なものへ追い込んでいくとするであろう。

「平和」「経済開発構想」等々を軸とするこの方途こそ彼らのひとつの方向である。他の道は反革命戦争による解体―拡大阻止である。「ナショナリズム」―「排外主義」―「国益論」としてこれは展開されていくであろう。

日本の支配階級―ブルジョアジーの路線に於てこの二重性は彼ら内部の分裂のようであられる。例えば、日米共同声明にみられる反革命戦争への傾向、軍事外交路線と親中国派路線の傾向とである。

けれどもこの二つの傾向は、支配階級―ブルジョアジーの二重性の表現にすぎないのであって、本質的対立でないことはいうまでもないのである。

私達にとって、「ベトナム革命戦争」の波及力を解体し戦後世界構造―関係の再編へくりこもうとする支配階級―ブルジョアジーと対決し、「ベトナム革命戦争」の形成する関係―構造を戦後世界総体の革命的改変へ到らしめる道をどこに求めるかが問われているのだ。何よりも私達にとってそれは、ブルジョアジーの階級的統合軸の再編、とりわけ日米共同声明にみられる「反革命戦争」の阻止でなければならない。だがそれは、支配階級―ブルジョアジーの階級的統合軸の再編と階級形成としての反革命戦争（軍事外交路線）と開発路線に対して、私達の階級的統合と階級形成を、世界的プロレタリアートへの路によってこたえなければならぬ。

に世界革命戦争をくっつけてみても、世界的プロレタリアートへの階級形成とは無縁なのである。彼らは世界プロレタリア独裁―世界社会主義論が新たな世界の構造―関係（共同体と共同体間交通の転変をなすこと）の創出であることについて、イデオロギー的な論求をするのみなのだ。彼らは先験的に指定された、世界概念を論理的にいじくるだけなのである。

戦後世界―過程は、支配階級―ブルジョアジーが世界間交通―関係の再編をせまられ、彼らがこの領域に於る階級的統合軸の再編によって彼らなりの階級形成へ向かうことで、67年―69年の過程の闘いを解体させようとするのであるが、かかる支配階級―ブルジョアジーの回路はまた全領域（国家―市民社会）にわたるものである。

戦後過程の中で支配階級―ブルジョアジーは、日本の自然宗教の国家への転位に軸をおくことで彼らの階級的統合軸を展開する過程から、体制問論による「世界」の国家への転位に軸をおく過程への転換をやってきた。体制問論による「世界」そのものの再編と（これば世界関係―構造に於る近代の成熟の果てなのであるが）、転位によって形成した民主主義としての国家の成熟によって、彼らの階級的統合軸の再編が求められているのである。

天皇制としての国家から、民主主義としての国家の時間的―構造的推転―緊張の上にくり返してきた近代日本の成熟が、今やその内部でありなす階級的統合軸の転位そのものを不可能としてい

世界的プロレタリアートへの路は、理念の上で、またあるべき世界像として指定されたものへの接近でもなければ、アジア革命への帰依や合流でもない。

これらをまことしやかに語る諸君に問いたい。世界革命への道としての世界革命への道としての世界プロレタリアートへの道筋を鮮明にせよと。

世界プロレタリアートへの階級形成とは、ブルジョアジー支配階級のブルジョア地球主義や「疑似労働者国際主義」―「諸民族―諸国家」の総体の関係―構造の革命的改変をなすことなのである。「国家―民族―市民社会」という共同性の交通とそれ自身の共同体の転変をなすことなのである。

「ベトナム革命戦争」が展開している近代世界関係―構造と対決しながら、ベトナム自身の共同性と世界（他の共同体であるが）との交通形態―様式（関係）の転変を、自己の内部（共同体）から突き破ろうとしている私達の共同体と交通の転変とを、変容的相互発展、いいかえればはせわたすことで、世界総体の革命へ到るといふことなのである。

「反革命戦争阻止―自国帝国主義打倒」という表現展開と、民族解放―社会主義を志向する革命戦争の原理的―実践的統合こそ世界プロレタリアートへの階級形成なのである。

戦旗運合派の諸君のように、抽象的スコラ的に世界プロレタリア独裁―世界社会主義論をあれこれ展開し、その上に接木のよう

る。

支配階級―ブルジョアジーにとって、階級的統合軸の再編としての階級形成が、国家を支える核の転位としてなしとげられないということこそ、彼らの回路の限界を表現しているのである。

支配階級―ブルジョアジーは、行政的國家の強化として、戦後の政治的関係―構造から離陸しそれと激突することで形成される階級的表現を解体させ、これと対抗する過程を媒介にして、戦後の民主主義としての国家―秩序の保持、強化をなさんとするこの回路しかないのである。「国益論」の強調や「自主防衛論」、「帝國主義軍隊へ」もこの一環なのである。

沖繩は、天皇制としての国家からも、民主主義としての国家からも疎外されつづけてきただけでなく、差別と支配にくりこまれてきた。支配階級―ブルジョアジーにとって、沖繩は彼らの階級的統合―再編へくりこむ対象なのであるが、また彼らの回路への環なのである。

沖繩―日米共同声明、圧倒的な行政國家の強化として展開される支配階級―ブルジョアジーの階級的統合軸再編過程に対して、私達はどのような階級形成―階級的統合軸の提出と展開によって彼らの回路とたたかうべきなのか。

戦後二十五年の過程に於る民主主義としての國家の成熟は、政治過程の相対化と、その内部で政治的存在の等価性を滲透させた。（疑似的なものであるが。）

「左翼」（旧左翼）と「支配階級」の相互転換―変容の悲喜劇

は、私達に戦後二十五年過程に於る政治的等価性の滲透を見せてくれた。だから60年への過程で支配的であった「民主主義としての国家」の防衛と発展が、私達の階級形成の回路への環なのであるという考えは拒絶されねばならなかったのだ。

周知のように「民主主義としての国家」の防衛と発展、及び行
政的暴力の統括へ非暴力を対置することが階級形成への環なのであるという考え方に對して、60年の過程で私達は、プロレタリアート独裁や暴力革命論を提示してきた。

旧共産主義者同盟で表現され、展開されたこの私達の階級形成への路に於る決定的限界は、プロレタリア独裁論や暴力革命論のそれまでもってきた（歴史的・時間的であるが）共同性へのイメージ、構想力の限界としてあらわれた。それは、そのもっているイメージ、構想及び表現―表出水準と、日本に於る戦後、近代が成熟させた政治的共同性や表現―表出水準への叛逆、及びそこから流出した共同性へのイメージ、衝動力とが、決定的落差をもっていたということである。

旧共産主義者同盟は、その逆説的な死によってこの落差を私達に告げた。67年―69年へ到る闘いは、より深い共同性への衝動―エネルギーの存在と開示し、それが現存の政治的關係―構造から離陸して新たな政治的時間―空間を形成しようとするものであった。

これまで私達が所有してきた政治的時間―空間と、この現実的とであった。私達は、政治を相対化する政治的共同性への路によって、この突きぬけをめぐらしたかったのである。

だが私達は敗北した。私達のエネルギーや力を流出させていく過程での現実とイメージの落差を、死にはしまいと妥協してきた敗北として、けれども私達は今なおそこに固執することによってしか、勝利への道は考えられないのである。

私達の胸深く刻み込まれた他のひとつは、現存の構造―關係から離陸しそれと激突する政治的關係と構造（共同性）が、これまでの左翼の所有してきた關係―構造の止揚を含まねばならないということであった。意識―理論の共有性―共同性（その内部構造の中で、知識を媒介とする意識と感性を媒介とするそれとの分裂―対立が存在するのであるが）と行為―運動の共有性―共同性との分裂を、どのように構造化するか、いかえれば止揚するかであった。

このどちらに主軸をおくかでボルシェヴィキと社会民主主義―アナキズム以来くり返されてきた傾向（この折衷や変形もあるが）を、いかに止揚するかであった。「党―大衆」運動、「党―大衆」組織の図式の中で、党を強調するか、大衆を強調するかのちがいであった。政治的關係―構造（共同性）の内部では、このような区分は止揚される必要があるのである。

政治的關係―構造の内部での価値秩序、序列へ到るこの区分は、

展開との深淵なる落差のなかで、どのようにこれをどのような階級形成への回路を切り開くべきであろうか。

ここで私達に胸深く刻み込まれたのは、二つのことであった。そのひとつは、現存の政治的關係―構造から離陸しそれと激突しようとする私達のエネルギーや力の奥深く赤い糸のように流れる共同性への衝動が、現存の構造―關係を支えている根底的な支配階級のイメージを、敵との切りむすびとしてえがけなかった。また私達のゆくはてとイメージの中でぎり結ばれることもなかったということである。

アモルフなエネルギーとしてしか、私達の現存性や共生感はいたらなかった。私達はニヒリズムやロマンティズムへ、現存性や共生感をゆかせることを拒絶しようとしてきた。生命の充実もまた頽落へつらなるのではと考えたからなのである。

確かに、現存の政治的關係―構造から離陸しそれと深く激突しようとするエネルギーや、叛逆的精神へおいつめていく、おいつめられた時、アモルフなエネルギーがニヒリズムやロマンティズムへ到ろうとすることを知っている。

しかし戦後過程と世界が、天皇制としての国家、民主主義としての国家、いかえれば政治的共同性から私達を疎外しそれへの感性的共感や現存感をもはやうけつげぬ現実を、解放過程へ、新たな政治的共同性の創出へ転化させようとする私達にとって、ニヒリズムやロマンティズムの回帰を拒絶することは、必至のこ

広範な意味での政治的過程（幻想的過程）と社会的過程（非幻想的過程）の混同なのである。もともと人間は先験的に政治人としても、大衆としても存在していない。それは傾向である。けれども人間が共同性の中で自己をとり出してきたとき、關係づけたり、その表現―表象はこの区分をもつてあらわれるのである。

このような区分―分裂を不可避とする關係―構造を、止揚する運動や実践も、そのようにあらわれる。この差違は政治的階級へと、社会的階級へとあらわれるだけなのである。

政治的階級への過程では、「党―大衆」運動―組織と区分はないのである。自己がどのように大衆づらしようと、政治的關係―構造へ表現した時は必ず政治人なのである。それは、どのように党的人間づらしようと、社会的關係―構造の内部では生活者―社会人であるようになるのだ。後にふれるが社会過程でもそうなのである。

それ故私達は、政治關係―共同性の内部で（社会的關係―構造―共同性の内部でも同じであるが）「党―大衆」運動―組織の分裂―対立を止揚するために、以下のことを必要とする。

そのひとつは、政治過程―社会過程の総体を貫く表現と実践を、原理的に統合することである。私達が政治的階級―關係づけの実存と、社会的階級―關係づけの実存との過程で、この相方が分裂して存在したにも抱らずそのように生きることが可能なのだという人間の存在の深い怖しさと対決することである。意識―存在の分裂とは、人間が政治過程に実存していることと、

社会過程での実存とが、分裂してあり得るといふことなのだ。私達がこの底深い吸引力を拒絶するといふことは決して容易でないし、また単純なことではあり得ないのである。

このように実存を関係づける、可能ならしめる関係と構造（共同性）から、これを止揚する共同性への過程を含めて、はせわたして生き死ぬことは困難なことなのである。これらのためにはなお、以下の諸点を必要とする。

社会過程—政治過程の総体を貫ぬく、歴史的考察とイメージに支えられたビジョンと実践力をである。総体として「意識と行為」の「時間—空間」をはせわたす思想と感性を必要とするのである。そしてまた、政治的關係—構造の内部で、また社会過程の關係—構造の内部で、「意識と行為」の総体をはせわたすことを必要とするのであり、この相方に於る交通—關係について旧来の方法をこえることが必要である。

『叛旗』をよく読み込んでくれている諸君や、私達の実践を知っている諸君ならば、この三点に於て私達が戦旗運合派—情況派との訣別を通して、新—旧左翼とどのように訣別をとげているか知っているであろう。60年代前半の党—運動—組織か、大衆—運動—組織かの論争と実践の過程を通してつみあげてきた首為を、政治過程と社会過程に於る階級形成の歴史的考察と実践へ、それぞれその内部での關係—構造の創出へ、相互はせわたる原理的考察と実践へ、どんな苦闘をもって生かしてきたことかを。

と構造の総体をはせわたる共同性へのイメージを必要とすること
に無知であったといふことである。原理的考察力と実践力、思想
と感性としてこれなしには不可能であるといふことに。

過渡期の中で、これらがニヒリズムやロマンティズムとして
あらわれてくることもある。しかし私達は、これらのかなたへ、
止揚のかなたへはせわたりたいという意志と、現実的展開のなか
で敗北した。

だが一体、彼らのどこに10—11月と関わった切実さがあるのか。
私達は自己の頽廃を拒絶するためにこそ、かつての友と訣別した
のだ。

支配階級—ブルジョアジーの階級的統合と再編への回路と闘う
道は、彼らの具体的展開との対決を媒介として（沖繩返還—帝国
主義軍隊の確立—入管体制の強化ETC……）私達が67和—69年
の過程の敗北をこえることこそ要請されている全てである。

ところで支配階級—ブルジョアジーは、67年—69年へ到る市民
的社會—社会的過程での關係と構造に対する叛逆と闘いを、行政
的—暴力的統括によってのり切った。これらの過程の展開と、私
達の実践的対抗は、ほぼ政治過程での階級形成をめぐる攻防と同
じであった。

戦後過程—世界に於る市民的社會—社会的過程は、前近代的共
同性（生産様式から社会的關係まで包括しているものであるが）、
近代的共同性の複合的からみの中で、その内部で社会的生産關係

私達の歩みには十年の月日の実践があるのである。意識と行為
の分裂に根拠をもつ、意識—理論と行為—運動との政治的關係—
構造の分裂を止揚するものこそ、旧来の「党—活動家—大衆組織」
から「党—軍—統一戦線」への鍵なのである。

軍事について語るならばこうである。
軍事が政治的關係—構造（共同性）の内部で、社会的關係の内
部で対象化される時、その様式や実践の形態は異なるが（軍事
の二重性）、67年—69年への過程で私達が出会ってきたのは、現
実の階級闘争の中で私達の形成する關係—構造が軍事をくりこむ
ことを不可避としてきたことであった。

この組織化の過程にあって私達が赤軍派、戦旗運合派、情況派
と深く対立し、実践の過程で彼らと訣別をとげってきたのは、次の
二点のためであった。

即ちその第一点は、彼らが軍事の二重性に無知であったとい
うことである。赤軍派—戦旗運合派が政治的軍事しか理解できな
かったのに対して、情況派は社会的過程の軍事しか（勿論彼らは、
これを政治的—大衆的軍事と錯誤していたのであるが）わからな
かったのである。戦旗運合派も情況派も、11月の過程で私達の戦
闘団に足もとも及びつかなかったのであり、己れのみじめさをか
くす為に全く無責任な総括をくりかえしてきたにすぎぬのである。
その第二点は、軍事を実践するといふことが、それを表現する
差はあっても、私達の実存と最も深く関わるが故に、私達の關係

の緊張—対立が戦前—戦中より転変をとげながら、その近代的共
同性の成熟—主軸が移行しつつ展開されてきた。

日本に於る市民的社會—社会的過程の成熟と発展が、前近代的
共同性の解体と再編によって生み出されてきたが故に、社会的關
係—構造と離陸しそれと激突するエネルギー、力、その叛逆的精
神が背負ってきた負性は、より急進的な近代的關係をめざすイメ
ージと、より急進的に前近代的關係へ到ろうとするイメージに分
裂するほかなかった。戦後二十五年は、この暗い闘いを相互転換
—変容させながら、市民社會—社会過程の關係—構造にくり込ん
できたといふことにほかならない。

私達はこの市民社會—社会過程が、その成熟が、あらゆる人間
にとつて実存が等価であるように、疑似共同關係—性が滲透して
いくとともにこの厳然たる階級的關係を越えることは不可能なよ
うに存在している。（例えば勤勉刻苦すれば、誰でも支配階級—
ブルジョアジーになることが出来るといふ社会的ナショナリズム
はもはや存在していない。）

明治百年史—戦後二十五年史は、日本近代史のうちに形成した
市民社會—社会的過程の關係—構造（共同性）から離陸し、それ
と激突する關係と構造を生み出す闘いの根拠を形成した。

67年—69年の大学を中心とする闘いは、日本に於る市民的社會
—社会的過程の形成してきた關係—構造を越えて、新たな共同性
を創出しようとするエネルギーであり、力であった。それは、よ
り急進的な（超近代的な）近代的共同性をめざすものでも、また

前近代的共同性への復古をめざすものでもなかった。それらをも拒否しようとするものであった。

この闘争は二重の過程によって敗北し、解体させられた。即ち国家の行政的・暴力的統括をもつての解体であり、また市民的社会・社会的過程へ、生活者総体へ、抗し派及することが出来なかったことでの解体である。それは、入試闘争に象徴されている。私達の言語でいえば、社会的プロレタリアートへの階級形成の過程に於て敗北したのである。

私達の主体的・原理的敗北は、新たな社会的共同性への衝動とエネルギーを發展させる思想力・感性力に於て敗北したというべきであらう。

確かにソビエト運動という言葉で、社会的階級へ、社会的プロレタリアートへの方途をイメージしようとした。けれども、この社会的階級としてのプロレタリアートへという私達の指標を、主体・原理として貫徹する過程で、私達も妥協してしまつたのである。

どのような社会的闘いも、全て政治的にあらわれるのであるが、（とりわけ既存の社会的関係・構造から離陸し、それへ激突する時そのものであるが）重要なのは、そこで形成される社会的共同性は即時的に政治的共同性へ転化できないということである。ここで形成される社会的共同性が全て政治的にあらわれようとするところから、これを政治的共同性へ代位させようとする考えも、

・変容的發展という形で進展する。

全共闘運動として展開されたこの運動での私達の敗北は、社会的階級への方向としてそれを徹底させる原理と実践を貫徹できなかったことである。アモルフでアナトーモなエネルギーを、アナキズムやロマンティシズムのかなたへ、その共生力や現存力を共同性へ貫徹し、意志と現実的展開で敗北した。

周知のように、私達はこの問題提起と実践を展開するにあたって、戦旗連合派・赤軍派、やがては情況派と党派・分派闘争を貫徹してきた。彼らはただ社会的共同性を政治的手段や利用に考えただけであるか、これを讚美することを、政治的党派性にしてきただけである。この実践的展開が、原理的考察を必死なものとして要求することも、社会的共同性の創出の過渡性が、その現存感・共生感をアナキズムやロマンティシズムへ傾斜させていく必然的な怖ろしさとも無縁であった。広松渉が無責任に書き残した社会的叛乱論や長崎活の雑文のどこに、この闘いのもつた深さや現実とふれているところがあるのか。ことわるまでもなく、この領域では赤軍や戦旗連合派が、彼ら以下であったことはいうまでもない。

この領域で支配階級・ブルジョアジーは、70年代への回路をどのようにとめていくか。

帝国主義的社會再編、私達がこのようによんできた彼らの階級的統合・再編は、70年代の過程で、戦後過程・世界の形成してきた社会的関係・構造（共同性）の保持を基本柱にすえながら、社

政治的共同性の手段とせんとする考えも、その対極に発生する社会的共同性に全てを還元せんとする考え方のいずれも、全て駄目なのである。

だが、この二つの考え方が形成される根拠は、この社会的共同性が即時的に政治的共同性へは転化できないが、しかし全ては政治的にあらわれるということに存在する。

この関係と構造を、現存の関係・構造から離陸しそれと激突させながら、永続性へ發展させる為には、原理と主体として次のことが必要なのである。

社会的プロレタリアートへの階級形成の展開の過程で、この社会的共同性への衝動やエネルギーを發展させることである。だがこの時、次のことを不可欠とする。即ち社会過程と政治過程の総体を買徹し、意識力と自然力、いかえれば原理的考察力とビジョンと実践力、思想力と感性力をである。そしてまた、社会的過程や社会的共同性の内部関係・構造への認識と洞察力をである。なおこの社会的共同性と政治的共同性をはせわたる交通・関係、コミュニケーションを、である。

これらの関連は、政治的共同性についてのことからと全く同じであるといつてよい。社会的関係・構造、共同性の内部で、意識・理論、行為・運動の共有性、共同性が深く分裂している事態は同じである。ソビエト運動は、その内部に軍や統一戦線を内包しながら、その社会的共同性の創出によって政治的共同性との相互

会的存在の等価性を疑似共同性として滲透させ、他方で階級的差別と民族的差別的差別を拡大せんと展開されつつある。入管法、入管制、沖繩をめぐる労働再編 etc...をはじめ、公害・労働災害、また帝国主義的労働運動へ到る支配階級・ブルジョアジーの具体的展開との闘争を媒介に、地区共闘・人民評議会運動の創出過程の中で、67年・69年の敗北を越えてゆかねばならない。

これまで展開してきた三つの領域に於る支配階級・ブルジョアジーの階級的再編と統合として、70年の回路がより深く連関・一体化、時に錯綜して展開されてくることはいうまでもない。そうであるが故に、私達の闘いもそうなるであらう。この具体的展開を媒介として、主体と原理の敗北をのりこえる70年代へ、私達の回路を戦闘宣言から戦闘への歩みとして書きとめておこう。

ベトナム革命戦争のアジアへの拡大・波及を焦点とする戦後世界過程への、沖繩を軸とする軍事・外交路線、また体制論の再編へ、沖繩・入管を軸として帝国主義軍隊の確立、帝国主義的社會再編、要するに支配階級・ブルジョアジーの総展開が、彼らの階級的統合軸の提出と行政的・暴力的統括とによって階級的再編（形成といつてよいが）を進展させることに對して、私達の路は何か。これまでの展開で明らかなように、私達は次のように展望している。

世界・日本の近代史の成熟が形成してきた世界総体の関係・構

造から離陸し、それと激突する関係―構造（世界的―日本の新たな共同性の創出）へ向かうことである。この為には原理的考察力と実践力、思想力と感性力、総じて意識力と自然力との新たな力とエネルギーを必要とする。

自然―世界―歴史―意識―行為―所有の総体の原理的考察に裏打ちされながら、民衆のかなたへはせいたることで形成する意識力―自然力を、私達は綱領とよぶであろう。実存する個体がきわめて個性的に、かつ共同的なものとしてこれを獲得する過程の中に、創出する共同体が個体にそれをもたらず過程の中に、私達は綱領を形成するであろう。

私達が当面形成する組織は、この表現と展開の端緒なのであるが、基本的には政治的組織である。そして八洲―全共闘の再編―止揚をめざし、旧来の「党―大衆運動―組織」の止揚をめざす。軍事と綱領の構造化を軸として、政治的構造―関係の創出による政治的階級としてのプロレタリアートの形成へ向かうのである。私達の形成する政治的共同性としての組織原理は、以下の点である。

私達のこの政治組織に於て、出身や意識の所有による区分はあり得ない。それ故どのような社会的共同性に基づく組織を、政治組織に代位も転化もさせない。ただ社会的共同性に再づく組織の個々の成員が、個人として参加するだけである。

逆にまたいかなる社会的共同性に基づく組織へも転化させない。政治組織の成員が個々として、社会的組織へ関わるだけである。社会的共同性に基づく社会的組織と総体の関係―構造は、相互変容的發展なのである。

私達が世界プロレタリアートへ、政治的プロレタリアートへ、社会的プロレタリアートへ、独自の表現―表象をたどりながら、ちょうど人間の実存がこの総体からみながら関係しているように、この政治的組織は他の関係を内部にどのようにはらみ得るのであるか。それは組織総体が、個々の成員が、原理的考察力、思想力―感性力、総じて意識力―自然力を綱領として不断にくりこむことである。これは直接的表現―表出としては、戦略―戦術、軍事として展開されるのである。「ここで『党』の自然成長性を止揚するもの、党の意識的過程が問われる。『党』の意識的過程は何か。それは自己を含めた『世界』総体の対象化過程であり、自己の存在拠点の確認を、大衆との結全の深さの内に深めることである。『党』が大衆の外にあって内にあるとは、こういうことだ。」（『叛旗』NO・1、共同体論へ）

政治組織の内部構造、とりわけ地区党の位置、当面の組織―運動戦略等々については、政治新聞で展開する予定である。

「かれは紙のうえに書かれるものを恥ぢてのち未来へ出で立つ。」

（吉本隆明）

中大闘争総括

室 淳 一

――第一次中大闘争（学館闘争）、第二次中大闘争（学費闘争）、第三次中大闘争（常置委闘争）――

目次

はじめに

(I) 第一次～第三次中大闘争の概括と問題点

(1) 学館―学費闘争

④ 学館闘争

⑤ 学費闘争

(2) 常置委闘争

(II) 中大闘争総括の深化に向けて

(1) 政治―階級情勢の基調

④ 戦後世界の構造と転換

a 過渡期世界の成立

b 戦後世界体制の転換

⑤ 戦後世界と日本帝国主義

a 戦後日本社会の構造

b 戦後社会の転換と階級闘争

c 戦後社会と大学（全共闘運動まで）

d 全学連―全共闘の系譜

e まとめ

(2) 60年代の限界と止揚のために

④ 階級の形成

⑤ 権力闘争の時代と党―大衆組織の転質

――全中闘全共闘の限界――

(III) 総括の最後に

――諸問題点についての見解――

(1) 7月自主退去―8月学館徹底抗戦について

(2) 10月総決起集会をめぐって

(3) 自主オリエンテーションについて

(IV) 第四次中大闘争へ向けて

――学内共闘組織について――

はじめに

5年間に亘る中大闘争は敗北に終わった。そして我々はこの現実から又、出発せねばならない。故に第一次―第二次闘争のひとりの「勝利」と第三次闘争における完膚なきまでの敗北というこの過程に我々が何を語り、行ないそして何がどのように変わったのか、我々の闘いと共に「60年代」が終わった今、ふりかえらねばならない。

我々にとって総括とは闘いと運動の理論的解明である。この数年間の闘いに於いて、闘いへの客観的根拠、闘争の前提的情況はどのようなものであったか。そして闘いへの主体的条件、闘いの目的、方向をどう確定したか、闘いの総過程を明らかにしていかなければならない。我々の再生のために。

まずわが中大闘争の5年の過程をふりかえってみよう。学館―学費―常置委という様々の課題をどう闘い得たか。如何なる限界と問題点を残したか、明らかにしておこう。

日本学生運動史に新たな一ページを書き加えた60年代末激発した全国学園闘争の黎明期に諸々の大いなる限界と、問題点をかかえながらも、漸くにたどりついた地平の70年代に向けた切開をなしとげねばならない。そしてこの5年の闘いを真に理解し、又発展させる作業は我々をおいて他にありえない。何故なら闘いの総括とは闘った者の総括なのだから…… 66年学館闘争、68年学費闘争、69年常置委闘争―各々の闘いの過程から今日的に指摘できる限界

点と誤謬を今後の教訓として明らかにしていこう。

次には中大闘争の総括の深化のために歴史的―時代的背景への洞察を深めねばならない。闘いの全体的流れの中に中大闘争の位置を明らかにする作業をなしとげねばならない。第一に60年代後半における政治階級情勢の確認である。我々は「大学闘争」を闘い、組織するにあたり、大学をとりまく政治的・社会的状況を語った。すなわち「大学」という一社会的機構の位置する日本の社会的情勢―状況を明らかにせんとした。そして「日本社会」の分析は「世界」への認識である事も明らかである。日本帝国主義が戦後過程においてのみならず、一國に於いて成立すべくもない事を資本主義の世界史過程への分析としての洞察でなければならぬ。かゝる世界の日本を確かにするに、世界の体制とその変動を今の世界がいつからどのようなかを知らねばならない。すなわちかゝる作業の第一歩は、闘いの根拠が、今の日本、そして世界にあるのだから、世界―日本―そして我々の直接の小社会の情勢―状況を知る事から始めるという事である。

第二にこのような全体的情況において、階級闘争の構造と様式を明らかにしなければならぬ。諸学園闘争、諸反戦闘争の事実と過程から闘いの構造的把握と理解を行なう事である。闘いの根拠を現代世界の階級的矛盾に在りとするならば、闘いの過程こそ、その矛盾の発現である。矛盾がどのように闘いとして外化し得たか、矛盾の発現様式の理解をなさねばならない。

最後に我々、すなわち「政治党派」の実践的指導における総括

である。そして我々はここに於いて「党派」の存在様式、世界観、階級の理解という全てに於いて、否定的にとらえかえさねばならないとする。すなわち60年代の限界の指摘は、新左翼十年の存在そのもの、問いかえしでなければならぬ。

以上の内容に於いて、中大闘争の総括をおこなうものであるが、総括内容の基調は我々が所属する叛旗派のこの数年間の政治・思想的主張に於いてすでに述べられたものである。我々はその基調にもとづいて具体的に中大闘争の総括をなさんとするものである事を、最初にことわっておきたい。

それではまず中大闘争の具体的過程をふりかえってみよう。

(一) 第一次―第三次中大闘争の概括と問題点

(1) 学館―学費闘争

日本の学生運動、もしくは階級闘争が新しい局面に到達した60年代後半に於ける中大の学館―学費闘争の位置から明らかにせねばならない。60年以降の敗北の歴史、とりわけ65年日韓闘争に於ける「60年闘争」のより一層の敗北とは、一方に於ける情勢の転換と共に、闘いの質と構造の転換を抜本的に迫っていたといえよう。「67年羽田闘争に至る時期である。羽田闘争以降の情況と闘う主体の過去の全経験を超えた転換に至るこの二年間に我々が何を意図せんとしていたのか、60年―65年の敗北をどう越えようとしていたか。65年―66年闘い抜いた学館闘争の67年に至る先行的

闘いの総括はかゝる情況的把握から出発せねばならない。そして67年羽田闘争を経た68年1月佐世保エンブラ闘争と同時に起こされた学費闘争は68年―69年に亘る全国学園闘争の激発を促した闘いであった。学館闘争の終了後、中大に於いてようやく定着した新左翼―のエネルギーの結集と爆発をかついた闘いとしてあった。そして中大―東大―日大等、全国の全共闘運動を生み出した過程に至る中大学費闘争は羽田―佐世保で切り開いた街頭政治闘争の質と構造を拠点に於ける闘いでどう獲得し得るかという最初の試練でもあった。

我々はかゝる闘いとしてあった学館―学費闘争の切開から始め、中大闘争の先行的意義と同時に60年代闘争の構造的問題点がこれらの闘いの中に潜在していた事を説明せねばならないと考える。そして第三次常置委闘争の当初からの限界性も、そして敗北も69年秋の闘いの画期的意義と限界として共通に存在するものであると考える。

(A) 学館闘争 65―66年(第一次中大闘争)

事実過程

65年1月 慶応大学学費闘争

4月―11月 日韓闘争

12月

中大学館闘争 全学パリスト
管理運営準備会の設置

3名の退学処分(第一次処分)

66年1月～6月 早大学費学館闘争

6月 中大学館強行入館闘争敗北

24名処分(2次処分)

12月 全学スト

学生会館単独管理権獲得

1次、2次処分撤回

学館自主講座始まる

(政治、思想的内容)

学館闘争は学生会館の管理運営権をめぐる闘いであった。故に学館闘争は学館を通じてなされんとした文教政策に反対する闘争として、そして学生の自治権獲得の闘いとして表現されたものであった。しかしながらその根底にあったものは60年代支配の政治―思想と前衛―「進歩的」知識人の思想との両者からの疎外状態にある知的大衆の反抗であり、又、かゝるエネルギーの組織化とその表現としての自己権力の思想の獲得というものであった。すなわち学館闘争を通じて真に我々が表現せんとしたものは60年代前半において明らかになっていた戦後民主主義への全批判としての政治思想的追求であったのだ。すなわち、60年東大闘争において全面開花したかゝる闘いを、我々は65年～66年学内における教授会批判を媒介してなさんとしたのである。学館闘争の総括において中心になさねばならないのは、かゝる政治的思想的背景である。述べたように我々は60～65年の敗北は政治・思想的には

戦後民主主義を越えられなかったことに存すると考えた。

65年以降の帝国主義の膨張過程は国内的には、戦後の政治―経済―社会のヘゲモニーの全面的集約と転換の過程であった。対外的に帝国主義としての登場を可能にせんとする経済過程における資本の巨大化、集中、合併を基礎にし高度成長、政治―社会的には戦後民主主義の支配原理への組み込みと「民主主義」運動への近代化の対置による包摂的闘いの完全な敗北こそ60年代前半の闘いの根源的危機であると捉えた。すなわち65年以降の闘いの課題は権力の戦後民主主義を包摂した近代化への道と、闘いの基軸であった戦後民主主義運動の風化という二重の危機の中で、それをこえうる政治―思想的闘いの形成ということであつたらう。戦後過程への否定を戦後民主主義と民主主義運動への批判を否定として運動の形成をなそうとしたものであった。

(運動―組織)

市民的统一戦線から反帝統一戦線へ

それでは、次に50年～60年代前半の学生運動の限界を運動―組織論的にどう把握し、又どう越えようとしていたか、すなわち65年～66年学館闘争を組織するにあたり、我々が70年代をどう展望していたか、その限界を含めてとらえかえしておこう。

我々の60年代前半における学生運動の運動論的限界の把握はこうである。

50年代～60年代前半の学生運動はこの時代の階級闘争の基調と

して存在した「市民的统一戦線」の左派的な存在としてあったことの運動構造的な理解である。「平和」と「民主主義」防衛闘争としてのこの時期の闘争自身が有していた矛盾、すなわち急進ブルジョワジーの立場と同一基盤にありながら、「戦前型権力」の復権に対決しながら「議会民主主義」を守るという方向と資本制権力の否定―議会制民主主義の止揚へという方向のなかを、日本的組合主義―総評―社会党が前者に大衆のエネルギーを集約しようとしたのに対し学生運動は大衆の民主主義闘争を議会主義の止揚を媒介として(社会闘争)へ発展する事を追求したという把握である。そして、又、近代資本制社会と同位概念としての政治的民主主義の否定は体制そのものの否定、政治革命へと発展するなかでしか存在しないということへ運動の発展が、どれほど接近しえたかということである。

学生運動における学園闘争においてはどうかであったか。この期の政治闘争と同様、学園民主化闘争として日本の戦前型権力の体系を表現する学内反動派に対して教授会―急進ブルジョアジーの立場と左派―学生とが統一戦線を形成し、闘われたものであった。すなわちかゝる闘いは学生の大学での地位の拡大ということのみならず大学の古い権力体系を「民主主義」の立場に於いてつきくずすということであり、学生内部にあってはポツダム自治会を主軸とした統一戦線が教授会との間に民主化共闘という統一戦線が「民主主義」を要に存在しえたのである。かゝる運動の構

造は60年代前半より転換をせまられていった。戦後市民社会が成熟し、国家資本制権力が、戦後民主主義を支配の幻想とし新たな支配様式を生み出したとき、この中で本格的な帝国主義的再編を全社会的政治過程に於いて展開するとき、そしてかゝる過程が大学への新たな戦後権力の支配強化として展開されるとき、戦後民主主義―憲法体制―大学自治をよりどころにする抵抗たりえなくなる。すなわち学園闘争においては学園民主化路線を抛りどころとする抵抗は抵抗としての意識のみならず学生の地位の改良も実現できないでいる。大学再編の反動として資本と国家権力への根底的抵抗闘争なくして改良闘争もありえない段階に入っているのである。そして又闘いの学生の学内民主化の枠をこえて展開されるとき、学内民主化闘争の過程で運動を支えた組織―抵抗の構造としてのポツダム自治会の分解は適確に国家権力と対決し、それを支える指導部を形成しないかぎり運動はやがて改良主義―組合主義―学内主義と極左主義―政治主義のなかを統一した運動を展開できなくなるであろうという認識であった。

(限界)

我々は以上の情況認識―把握のもとに、教授会批判を媒介として闘いにとりくんだ。すなわち、学館闘争は60年代という後退期に於ける抵抗運動として学生自治論―学生自己権力論と文化運動―自主講座を生み出していったのである。教授会の学内民主主義の制約と抑圧を批判し、外には国家権力の介入と知識人の国家へ

の寄生を批判すると云う意味において政治批判として展開してきたのである。そして、学園闘争を必然化させる権力の大学支配と大衆の大学—国家への反抗をかゝる視点から組織することであった。しかしながら学生にとって現在の学園闘争の徹底抗戦の必然性を認識させたが、それを自治論—自己権力論として表出させた知識人論のみに陥った傾向は、もう一つの学内主義としての幻想を与えたという致命的な欠陥を有していたのである。本当にこの徹底抗戦が支えられ、この闘いが貫徹するのは社会的諸ヘゲモニーとの結合と、全国学生運動への発展に於いて実現されるという「原則」をとりこぼしていたのである。自治論—知識人論として展開した立場と、目標の実現ということ、すなわち、それが何によって可能であるかということとは別のことである。国家の発生の問題とその基盤の解明と結合を「政治論」—「権力論」の問題として解明せねばならなかったのである。すなわち自治論—知識人論、革命論が何によって実現可能であるかということ、すなわち媒介を欠落した上での、これなくして大衆の反抗の質を普遍化すること、組織化することがありえないという立場の追求に終った点に根本的限界が存在したといえよう。学園闘争の政治—思想的課題を集大成したものと設定された自主講座にその限界性をみることが出来る。すなわち「国家批判としての自主講座」と云う文化運動が、権力との緊張関係の形成のないところで、いかに「国家」を批判できうるのかという事である。

それ自身の過程からは即目的に革命的信念は生まれぬし、この信念に武装された政党は創出されない。しかしかゝる信念が広がり深められることは可能であり、このことを組織することが第一の課題である。

以上のように、闘いの後退期にあって抵抗の論理としての自主講座である。実践的運動として、社会的に広がり、深められることの困難性から闘いの永続性を文化運動としてなさんとしたのである。すなわち、大学の矛盾や帝国主義的再編の根源が資本制国家の現実運動にあること、又資本、国家の現実運動と対決することがどのようなことであるかを、ひろめ深めることにその任務を設定したのである。知識の技術者としての大学制度への闘いが極めて萌芽的、一時的段階にとどまる時、認識の内での闘いを組織せんとしたのである。根本的には時代と情況の限界であったとも云えよう。69年東大闘争に於いて実践的に越えられる以前の大なる前進と限界であった。66年結成された「全中闘」も新しい闘いの組織として発展をなすこともなく、その結成の意義を萌芽的段階にとどまると云える。

しかし、この段階での闘いの限界は69年闘争までつきまとう。すなわちもう一つの「学内主義」としてのそれを、
以上我々が今日の学園闘争の限界を指摘せねばならないのは含んでいた問題点が極めて根本的—古くて新しいからである。すなわち68年以降の全国の学園闘争に於いて問われた大学否定、

我々の自主講座の位置付けは次の通りであった。——大衆収奪、産学軍共同、職能的技術者の創出等の大学の性格の転換は50年代の大学共同体が、対内的には理事を中心とした上部官僚の独裁体制へ、対外的には大学と国家権力、資本家階級の結合、強化を内容とするものに再編される（帝国主義的再編）。かゝる再編に対して、抵抗運動が存在している。大衆収奪—職能的技術者—産学軍共同と云う資本の現実運動が要求する課題への抵抗及び国家権力の思想——イデオロギー的番犬化への抵抗がある。と同時に大学制度自身に対する、より具体的に云えば知識の技術者の生産場所への抵抗である。大学の性格の転換に対する抵抗の中には、現存あるいは50年代の大学維持という極めて保守的なそれもある。資本及び国家の現実運動へのラジカルなそれもある。しかし大学の性格転換への抵抗が資本と国家の現実運動にラジカルに発展するためには、大学制度そのものに対する抵抗として組織されなければならない。そして大学制度そのものに対する抵抗が進展する道は大学内に於いては不可能である。この闘争が大学内によって展開されるべきは大学の帝国主義的再編に対する闘争にとどまるか、大学制度そのものへの闘争は萌芽的段階にとどまる。闘争は社会運動—労働運動との結合が不可欠である。しかし、そのような条件は不在である。革命的政党の不在、労働運動の右傾化等、かゝる情況の中で大学の帝国主義的再編に対する抵抗闘争の課題は何か、帝国主義的再編に対する抵抗闘争

大学解体と云う闘いが全般的政治—社会情況の発展以上に個別の権力打倒と云う段階までにいたった。かゝる社会革命の質を内包した闘いが個別に、そして学生の闘いの枠の中に於いては敗北せざるを得ないときに、個別の闘いは如何なる方向に発展せしめねばならないか、又個別の闘いの中で何を獲得せねばならないかという問題を問われたのである。我々が66年に於いて解答した「自主講座」という文化運動—認識運動としての闘いの永続性は東大闘争に於いて始めて越えられた。しかし東大闘争の敗北は次の解答を迫っている。そして一つには我々が個別闘争の発展を政治闘争—政治革命への結合、発展として把え、運動戦略論として措定した中央権力闘争—マッセンストライキの革命論としての再検討を迫っていると云えよう。

我々の学園闘争の総括は現在のにもかゝる方向性に於いて解答しえたときに始めて闘いの限界を止揚出来たと云えるであろう。

⑤学費闘争

(事実過程)

67年10月 11月 羽田闘争

68年1月 エンブラ闘争

1月—2月 中大学費闘争

3月 王子野戦闘争、成田闘争

(問題点の所在)

67年羽田闘争以降の局面のなか、ら勃発した中大学費闘争は旺

倒的な大衆動員力と要求の完全な貫徹—白紙撤回と云う学園闘争の画期的な局面を切り開いたものであった。そして今日的にも最も大きな問題となるのは学館闘争に於いて問われたのと同じように、羽田闘争以降60年闘争の転換的局面の中での社会的拠点に於ける闘い—エネルギーにどのような方向を与える事が出来たのかということである。すなわち街頭に於ける政治的闘いと一拠点に於ける闘いを結合させる方法、媒介であり、総体としての闘いの深化の追求である。そして当時我々は個別の闘いの発展の方向を全人民的政治闘争への飛躍として回答せんとした。すなわち個別の闘い—経済闘争、経済闘争の政治闘争への飛躍、経済闘争における改良主義の否定—革命的敗北主義という把握であった。現在我々に必要な総括とはかゝる古くて新しい問題点の深化である。帝国主義の全社会—政治的再編に対する二つの領域に於ける闘い—政治課題に対する闘いと、市民社会の全面的再編に対する闘いというそれぞれの質的把握と大衆の団結様式の相違の解明と理解にこそ必要とされている。

個別闘争の全人民的政治闘争への飛躍を云う時、飛躍すべき拠点に於ける闘いのエネルギーの質的理解と全人民的政治闘争の内容の確定をなさねばならない。その上でそのように指導がなされるためにはどのような組織—党が、必要かと問題をなてねばならない。かゝる問題点に於いてレーニンの政治闘争・経済闘争に対する

見解は明らかである。

大衆の経済—社会構成に於ける（市民社会に於ける）資本—ブルジョワジーに対する闘い—経済闘争はその自然発生的延長に於いては対象をこえることではない。ということであり、これら闘い—経済闘争は国家に対する闘い—政治闘争は発展、結合されなければならぬのであり、階級の形成も国家に対する闘いを抜きにしてはありえないとするものである。階級的、政治的意識はただ外部からつまり経済闘争の外部から労働者雇主に對する関係の圏外からだけ労働者にもたらすことができるのである。

—何をなすべきか—

かゝる基本的原則とされる指導の方向は具体的な闘争過程に於いていかに実現されるべきか、学費闘争に於いては白紙撤回要求が貫徹された時点に於いて問われた問題である。学費値上げに對し、白紙撤回という改良の果実はより一層の矛盾への発展である。現実的にもそうである。学費値上げに對してはどのような闘いをくもとも値上げが資本の運動の必然としてあるかぎり敗北必至の闘いとして過去の学園闘争の歴史が存在した。中大における闘争課題の貫徹は画期的な影響を与えた。しかしながらその背景に《進歩的》中大教授会の存在があり、権力の介入を排した《話し合いの解決》と云う中大路線が貫徹したということであった。学館、学費を通して《進歩的》中大の枠を破ることなく「大学共同体」への組み込まれこそ我々が破らねばならない対象であった。

白紙撤回という現実はそのような現実的課題も含めて闘争の深化発展を問うていたと云える。我々は無対応だったのではない。スト—統行—試験阻止を主張した。しかし大衆闘争に於いて発展過程を無視した闘いは存在しえない。我々はこの時点に如何に対応すべきであったのか。問題点は豊富である。

—学費値上げの基本的位置の確認—

①帝国主義の全社会的再編の有機的一体系の一貫としての大学の帝国主義再編の突破口としての学費値上げの政治的役割—教育の帝国主義的再編を遂行するための財政保障としての学費値上げ、従って帝国主義支配階級が要求する支配イデオロギーの生産機能の充実。

②経済的役割（社会的役割）—教育の社会的組織化（労働商品への技術—知識などの寄与による価値参与）の質的転換（合理化の突破口）

③帝国主義の全社会に亘る組織の遂行は個別資本そのものの存在形態の転換を迫る。競争拡大—独占への道は教育資本家にとって産学共同政策か、学生からの収奪の強化を不可避とする。

—問題点—

以上の確認のもとに闘争は学内解決の要因はないものとした徹底的抗戦すべきものとして位置づけられた。従って「改良」の獲得はないものとして非和解的であると先見の的に見られていた。かゝる状況下での「改良」の出現は、闘う主体には惑いを行なわせ

たと云える。我々はこのことを、まず経済闘争—政治闘争—諸闘争のもつ内的構造としての改良と革命の問題の問題性から明確にしておかねばならない。

—個別闘争と全人民的政治闘争—

労働者大衆にとって体制の発展そのものが、その枠内に於ける自己の発展ということが改良的立場であり、体制そのものへの抵抗、その否定ということが革命的立場である。そしてこの両面を大衆自身は矛盾的同一性として有している。経済闘争—政治闘争を改良闘争—革命闘争という把握もまちがいである。経済闘争—「賃労働」と「資本」という市民社会の矛盾とその闘争—社会闘争という把握が適当である。政治闘争—市民社会に對して成立する政治社会の矛盾との闘争、つまりそれぞれに「改良」的要素と「革命」的要素が内在的に存在するのである。それでは大衆のもつ二重的同一性と領域におけるそれぞれの相互関連はどう指導されるべきか、かゝる問題性は個別闘争と全人民的政治闘争の結合、発展への問題である。社会闘争、政治闘争—二つの領域の成立から明らかにしよう。人間の労働の実践とその疎外物化の対象化が「資本」と「賃労働」という市民社会の差別性—階級（経済的）を生み出すとき、人間の観念への外化から宗教—法—国家へと結実し、共同性—政治的自由の幻想的寄与の必要性としての政治社会—政治国家の存在を生み出す。

政治国家の発生とその形成の源泉は、人間の観念への対象化を

基礎とするが、その基盤は人間の労働を核にする社会過程にある。すなわち、市民社会と対応する政治国家の否定は市民社会そのものの否定なくしてはありえないのであり、社会革命を内包しない政治革命は資本制社会をこえきれないのである。

また、「資本」と「賃労働」という市民社会の成立そのものは生産力発展という過程と同時に幻想過程—宗教の国家への発展とその存在という観念の共同体の完成過程でもあるが故に社会革命は政治革命を媒介としなければならない。かゝる過程は階級をも二重存在として形成するものである。(詳しくは後述)ここにおける政治指導の役割はかゝる大衆の二重的存在を止揚し、階級形成をなしとげることである。政治闘争と社会闘争に於ける政治指導については政治闘争との結合、発展のない社会闘争はサンディカリズムとして表現され社会闘争を切り捨てた政治闘争はプチブル急進主義の表現をとって現われる。革命的指導にとって必要なのは両者の内的関連のより一層の明確化とそれに伴う二重性の把握とを統一的に把握することである。したがって経済闘争—改良主義政治闘争—革命的立場という単純の把握はもろろんあやまりである。改良と革命の問題は改良—個別闘争の獲得—目標、その意義をどのように定めているかにある。改良の否定—革命的敗北主義という立場は改良主義のうらがえしではないし、又悪しき革命主義である。学館闘争に於いては65年—66年の政治社会情况から具体的に他の政治闘争、社会闘争との結合という現実的課題

はなかったといえよう。しかしながら学費闘争に於いては述べた通り前年の羽田闘争以降、政治—社会情况は流動化を開始し、階級闘争の新しい昂揚が始まっていた。我々にとって最も総括すべきは学費闘争の大衆動員力をなしたとげたことの解明よりは、そのエネルギーの質的發展を如何に行ないえたかということである。

すなわち個別闘争に於いての指導の方向性を「階級形成」という基本的問題設定の上で如何に運動—組織論上の展望を明らかにしたのかということである。階級情勢の推移の過程に於いて大衆団結の表現の転換と団結の様式の政治的發展をなしとげる具体策をどう明らかにしたのかという問題である。69年にいたり本格的に運動に問われたかゝる課題に学費闘争に於いては解答しえなかったことに、69年秋以降の常置委闘争の限界が当初より存在していたといえよう。個別闘争の切り捨て、革命的敗北主義の曲解による政治闘争の引き上げという指導こそ、階級の二重性の無理、運動の二重性を捨象した政治闘争主義として存在したといえよう。

(2) 常置委闘争(第三次中大闘争)

—事実過程—

68年9月 学館問題(学館費凍結問題)についての対理事
10月 10・21闘争 団交。
11月 教授会との常置委をめぐってのティーチン

12月 スト突入、全中闘結成

69年1月上旬 評議員会、常置委撤廃

学館費凍結解除、全中闘、常置委体制粉碎ス
ト続行。

18—19日 東大闘争激化

2月上旬 入試をめぐっての団交決裂

中旬 警察権力導入さる。占拠、ロックアウト。
入試強行さる。

3月上旬 中教審答申、全中闘決議の単独デモ。

下旬 全学連大会(於同志社)、全中闘百人派遣

4月上旬 奪還闘争失敗に終る。

中旬 練馬全学集会、全中闘これを大衆的に粉碎

6月下旬 大衆団交、再封鎖貫徹

学年末試験、レポート提出を強行さる。

69年7月上旬 全中闘組織的に対応できず。

下旬 全中闘退去警告を受ける。

8月中旬 学館ロックアウト、全中闘十数名徹底抗戦

下旬 授業再開強行さる。大学立法成立

10月 全中闘、全学総決起集会、全中闘分裂

10・21闘争

11月 11・13闘争、11・16—17闘争

70年4月 自主オリエンテーション

(概括)

まず簡単にその経過と概括をみてみよう。

羽田闘争の切り拓いた局面は68年全面開花した。学園闘争も東大—日大闘争を経る中で個別改良闘争の枠を打破し、社会的分業としての大学存在そのもの、否定にまで突き進んだ。中大闘争は過去の闘いの蓄積と限界の中から、東大—日大闘争の到達した水準と限界をどうこえられるかという状況に置かれていたと云えよう。68年学費闘争終了後、学内権力は常置委員会を設置し、第一の任務として学館費を凍結する。すなわち、常置委設置、学館費凍結は、学館—学費とヘゲモニーの学生、教授会による後退を強いられてきた中大個別資本の反撃であった。そして学生、教授会は等しくこの反撃を受けることになる。故に闘いの出発は学生、教授会を通じて数年間培ってきた学内既得権の擁護闘争として始まった。以下順次、闘争の過程を見ていこう。

△9月—10月V学館費凍結問題を焦点とした団交

△11月—12月V教授会とのティーチンを軸にした常置委問題への取り組み

ティーチン—すなわち教授会への批判と同時にそれ以上に闘いの契機、形成に於いての学内共闘という幻想への拠であったろう。こゝから始めざるを得なかったことにこそ、学館—学費闘争の限界を切実に示しているものであり、又その後の闘いの苦難が存在していたといえよう。12月・学生、教授会は共に闘いに突

入した。そして1月上旬、学校権力は全国学園闘争の昂揚に対する政治的判断により再度妥協する。

△常置委撤廃、学館費凍結解除▽

こゝで闘いのエネルギーと団結は、三度目にしてようやく飛躍を迫られ分解を開始する。我々にとって真の闘いはここから始まったと云える。撤廃して、教授会は当然にも闘いの終結を望んだ。我々は如何に対応したか、大衆闘争の発生→形成→発展を無視した闘いの続行はあり得ない。常置委撤廃→常置委体制打倒へと闘争課題を続行させる。この移行の際、保利・永山一派追放という課題をその内実としたことはどうか。闘いは抽象的課題においても発展することは当然あり得る。しかし、それを規定するのは歴史的状况を含めた闘争の形成→発展である。学園闘争がもつ普遍的内容に到着するには、闘争の形成の個別性→特殊性→多様性に規定されると云うことである。つまり保利→永山一派追放という闘いの方向と課題の設置がかなり技術的であったとしても、それ自身に誤りがあったのではない。問題は、東大→日大を始めとする学園闘争の実践的派及力に影響されつゝ、かゝる闘いへと進んだエネルギーをどう組織化したかということである。この時点で我々が着目せねばならなかったのは次の点である。闘争の方向と課題がもつ性格、一つには既存の権利・制度の防衛からより一層の改良を要求するという性格であり、もう一つは、この課題を通して中教審、大学立法への反撃から反政府闘争へ、制度・体

制の否定へと要求するという性格である。つまり個別的要求と全人民的普遍性という二重の性格である。個別闘争の徹底化の単線的延長上に於いて国家を越えうるものではない。問題はかゝる個別闘争のもつ矛盾の発展の指導の問題である。そしてもう一つの重要な点は学館闘争で、ティーチ・インで我々が最も批判した戦後民主主義と、そこに基盤を持つ大学の自治、そして政治的中立性と永遠の真理の体現者とされる戦後知識人に対する闘争を、学館闘争をこえ、ティーチ・インを進展させ、いかに実践的に展開されていったのかということである。国家批判の学問追求（自主講座）ではなく、目的と共にいかなる手段も実践でそれをなしたのかという問題である。

△2月入試▽

この様な問題点を持ったまま、闘いは2月入試へと突き進む。18→19東大闘争が一つにはそれを可能にしたと云えよう。この過程で最も意識的になさねばならなかった事は、二重の性格を持ちつつもそれ迄の闘いと異り、大学共同体の枠内での解決が現実・具体的に不可能なこと、闘いの方向は社会的再編に対する大学の存在に対する闘いへと突き進まざるを得ないと云うことであり、より一層の階級関係が明白になり、闘う者にとっても個別闘争の領域の深化、又はつき破る権力状況に対応した闘う共同体の再編→広さ、深さを獲得しなければならぬと云うことであった。最も意識的に運動→組織構造の転換を用意しなければならなかったの

である。そしてもう一方教授会（大学アカデミー）の粉碎と止揚を大学解体の思想性で獲得されていかねばならなかった。この時点で全中闘の再編を政治→大衆組織総体の転換→再編として意識的に指導し、現実的には権力状況に対応する行動隊の提起形成から着手しなければならなかったのである。又、入試をめぐる

得できないままの過程である。4月1日奪還闘争、4・20集会然りである。エネルギーの組織的結集、発展は運動→組織構造の再編→転換と云う意識的指導ぬきにはあり得なかったと云えよう。

△6月→8月▽

我々の政治→思想的追求も知識人論として形成してきた批判体系を大学解体へと実践的（運動的）にも成しとげ、もしくは提起し先頭に立つことが要請されていたと云えよう。これらの問題を含みながらも、闘いの過程は「入試」をめぐる決定的に飛躍を迫られる。入試を阻止すること→この戦術のもつところの意味は重大である。つまり資本制大学の機能の停止から解体へと云う性格と必然性を有するものであり、戦術的意志統一では決定的に不十分であり、闘いは不可能である。そして我々の対応は入試延期と云う主張である。闘いの質と組織・運動構造の致命的脆弱性はこの時点で完全に表現され、又指導部も大衆の分解と指導部孤立をどうこえられ、展望できるかという確信不在のまま、この様な対応に終わるのである。闘いの発展があり得ず、敗北はこの時点で始まったと云えよう。入試直前の官憲導入（これすら予測が狂うのである）→バリケード撤去→拠点からの追放、という過程はそれまでの可能性を秘めたエネルギーを霧散させていくのである。

△3月→5月▽

この過程は大衆のエネルギーを反大学権力と云う以上の質を獲

再バリ、自主退去、これらの過程は1月→2月の敗北よりも一層の危機的状況の再現にすぎない。以上見てきた通り、常置委闘争の過程に於いて凝縮された問題を提出するのは1月→2月の過程である。誤解を恐れずに云えば、それ以降の過程は2月の敗北の延長にすぎない。よって我々が最も総括すべきは入試期に於ける指導の方向性である。個別闘争に於いて問われた問題点、すなわち学館→学費に於いて問われた個別闘争の発展とは如何なるものかという課題が、常置委闘争に於いては大学という社会的機能の解体→打倒へと突き進んだ地平に於いて同様な問題に対する解答は、学館闘争に於ける思想的営為として方向性も学費闘争に於ける個別闘争→全人民的政治闘争の結合発展という運動戦略に於ける方向性の提示もなく、現実的→具体的に権力状況に対応した運動→組織構造の抜本的転換抜きにはあり得なかったのである。闘いが個別権力の打倒へと突き進む時、闘いの組織や運動の構造も権力に対応出来なければならぬのである。

（運動→組織構造の総括）

以上の総括から最も総括せねばならないのは、中大闘争を領導した闘争組織構造→同時に運動構造の諸問題である。中大闘争は

日大闘争に於ける無定形ではあれ学生大衆の爆発的な暴力エネルギーに及ぼす、東大闘争が到達した階級闘争の今日的水準に到らず敗退を余ぎなくされたのは、東大―日大の闘いと歴史的条件の形成過程が著しく異るとは云え、指導部の政治指導に問題の所在を確かめねばならない。中大は学園闘争の60年代の歴史に於いては東大―日大よりはるかに先進的な位置にあったと云える。東大―日大闘争は、65年―67年中大闘争の切り拓いた地平から始まったとも云えよう。しかし、68年―69年勃発した東大―日大闘争に、69年中大闘争は逆に実践的影響を受けていった。中大闘争は日大闘争に於ける反近代性に対する暴発的エネルギーとも、東大闘争に於ける歴史的な大学存在に対する反抗とも異った闘いであった。中大闘争は常置委に代表される歴史の逆行に対する闘いと云うより、それと同時に併存した「進歩的中大」との闘いであったと云えよう。すなわち、思想的には近代主義との闘いであった。学館―学費闘争の一時的勝利と、常置委闘争に於ける敗北は、民主的―近代的中大からの枠内での勝利、枠外での敗北と云えよう。帝國主義の新时代に対応し、これと闘いぬくために我々も新しくならねばならない。そしてその基本的軸は、運動―組織構造の全面的転換を勝ち取ることである。中大闘争に於いて暴発的エネルギー力不足であったのではない。それを引き出す組織構造がなかったのである。中大闘争に於いて、政治―思想的水準が到らなかったのではない。それを物質化―実践化できる運動構造がなかった

のである。かゝる問題点の総括は、全中闘という一個別の問題以上に戦後階級闘争史に一ページを加えた全共闘運動―組織確認と共になさねばならない。そしてこゝで我々は全中闘が2月入試期に、そして全国全共闘が秋期決戦において、軍事をつきつけられた時点で、分離と破綻をおこしていった事実から、現代階級闘争に於ける軍事の問題を中心的に組織的総括をなさねばならない。学館―学費―常置委という5年の時を経て我々はようやく個別闘争の発展と指導の方向性を思想的・組織的にも、運動戦略的にも解答できる地点に到ったと云える。そして、試行錯誤と迂余曲折を経ながら60年代から70年にいたる階級闘争の発展はよくよく70年代を望みえる水準に達したと云える。

(II) 中大闘争総括の深化に向けて

(1) 政治―階級情勢の基調

我々はこゝまでに、中大闘争の五年の過程をふりかえることにより大衆闘争の発展の中で如何に国家を批判し、市民社会成立の秩序を打破し、権力へと接近すべきかを運動―戦略を中心に検討してきた。かゝる内容検討は60年代後期の運動総体の説明へと更に深化させねばならない。運動、闘争の発生―形成を規定する現代世界―日本階級構造の分析と矛盾の発現様式としての闘争と、大衆団結の様式と構造の分析として進めねばならない。したがって情勢状況を一般的に述べるのであってはならない。現代世界―

日本の成立の基調と転換の基軸とを明確にすることにより、階級闘争の発展―転換の過程を総合的に把握する作業こそ必要であると考える。それをなした上で次に党―大衆という関連のなかで如何に指導されるべきか、我々が到達すべき「階級」への射程から組織論的に検討を進めていきたい。

まず60年代後半学生運動を中心に階級闘争の激発を促した歴史的条件から説明せねばならない。すなわち60年代階級闘争の基礎構造の解明として第一に戦後世界構造と日本帝國主義の位置から簡単にふれておかねばならない。

④ 戦後世界の構造と転換

戦後世界の米・ソを主軸とする二大陣営の成立、対立の構造こそが戦後世界体制の成立の基軸である。そしてアメリカを筆頭とする「資本主義ブロック」とソ連を筆頭とする「労働者国家ブロック」の両体制の成立―共存の現代史を我々は過渡期世界と規定する。そして過渡期世界の起点と存在様式を戦後世界に求めるものである。すなわち戦後世界の構造把握は、過渡期世界と云う、資本主義国家群、労働者国家群の共存と云う世界的に全く新しい時代の認証として行なわねばならない。我々はかゝる認証のもとに過渡期世界の成立として、戦後世界体制の具体的内容の分析と世界を貫く基本的矛盾の明確化を行ない、又、その戦後世界体制の動揺、転換と云われるものの政治―経済の範囲において把握を必要がある。

a、過渡期世界の成立

戦後世界体制は先に述べた二ブロックの他に後進諸国ブロックを加えた三ブロックの成立としてある。すなわちアメリカを中心とする資本主義ブロック、ソ連を中心とする労働者国家ブロック、そして旧植民地、後進国ブロックである。この三ブロック成立の要因、過程と三ブロックを共通に貫く普遍的矛盾の理解をなさねばならない。

資本主義ブロックの成立―内容的にはブロック経済の解体、ドル援助を軸として形成され、IMF、統一市場による経済の世界性が確定されていく。労働者国家ブロックの成立―人民々々義によって東欧諸国のソ連圏への組み込みによって成立、そして一國社会主義―民族国家―世界市場への組み込みの過程である。後進諸国ブロックの成立―民族国家としての成立、そしてその成立の基盤は両ブロックの存在にあると云える。すなわち政治的独立が両体制の民主化政策としてあったことであり、経済的には、統一世界市場への組み込みと国民経済形成の不可能性に後進諸国の今日的危機を見ることが出来る。すなわち後進国構造の植民地構造からカライ政権への移行に見られる民族問題の政治問題へのすりかえと云う両体制共通の民族国家の現在の有り方に後進国問題の基本軸を見ることが出来る。さらに両ブロック成立の構造内容を明らかにするならば資本主義ブロックの成立は、ファシズムの敗北により、ファシズムに代る共産主義に対する自由主義と云う政治的幻想による市民社会の包摂を基底にして、経済的にはI

M F ガットによる統一世界市場の形成と云う構造である。労働者国家ブロックにとっては統一世界市場への加入によるアウトルキ一経済からの解放、これを基礎にした生産力の発展と生産力理論による平和共存への移行の過程である。それではかゝる三ブロック一世界体制を貫く普遍的矛盾を明らかにせねばならない。結論的には三ブロックの普遍的矛盾は経済の世界性によるところの国家と市民社会の矛盾として把握することが必要である。すなわち私的所有一国家的所有の本質的矛盾である。そして現在の明らかにせねばならないのは経済の世界性とそこに於ける矛盾の発現としての国家の個別性一独自性と国家間対立の理解である。

b、戦後世界体制の転換

一三ブロック各々の転換一

資本主義ブロックの転換一アメリカの一元支配からの転換である。EECの成立、日本の帝国主義的發展であり世界市場の再編として進行している。又、同時に関税による資本主義国家間のブロック化傾向も進行している。しかし旧来のブロック化一市場独占による対立としてストレートに国家内対立が確立されているのではない。すなわち資本主義の不均等發展による世界分割が旧来一戦前のように民族国家一国民経済の發展過程が植民地をめぐる市場戦争として発現するのではなく、統一世界市場を前提とした資本主義国間分業を基調としつゝ、資本主義国内ブロックとしての経済共同体の形成、他への対抗という再編の進行としてある。

a、戦後日本社会の構造

それでは戦後の以上のような世界構造の中において日本はどのような社会構成を成立させていったか。戦後日本社会はその下部構造に於いてIMF機構の下での統一世界市場の内であった。戦後日本の資本制社会は朝鮮戦争を経てこの下部構造での戦前型構造とわかつ特徴は以下であった。アジアでの植民地の喪失によって自国とナショナルな統合をもつ市場を有していなかった。戦後の財閥解体から経済民主化へ至る諸政策は資本の蓄積様式、独占体の形成、矛盾に於いて打撃として存在したのではなく、逆に重化学工業を軸とする資本、及び産業構成の高度化となった。巨大独占資本による超近代的生産様式と、農村一中小企業による前近代的生産様式の独特の結合として特徴づけられてきた社会構成の変化である。農村を軸とする共同社会の解体による日本社会の二重構造の構成の動揺である。都市と農村の緊張関係から都市部へ軸が移行したと同時に生活の価値概念の中で旧共同体にまつわる種々のものが解体し、商品経済の浸透が進行した。他方上部構造では天皇制と議院制の緊張としてあった国家の政治的解体を遂行した。戦後憲法の形成と戦後民主主義の浸透は過渡的な意義を有していたが、戦後に於ける資本家階級のイデオロギー的環であった。以下要約するならば、戦後世界構造の連環の中で経済的にも政治的にも諸帝国主義国との同質な内容を形成しようとした。重化学工業を軸とする産業構成、資本構成、農村解体を急激に膨張する都

労働者国家ブロックの再編一ソ連を中心とするブロックと他の労働者国家との対立である。そして対立の根底には、経済建設過程に於ける経済的利害の国家間対立がある。ソ連ブロックによる生産力発展一理論を基底にした開発路線、すなわち統一世界市場への介入、依存と云う路線であり、政治的一国際路線としては平和共存路線である。他の中共を筆頭とするブロックに於ける一國社会主義建設一国民経済の育成、民族国家の形成過程に於けるソ連ブロックの資本主義ブロックとの共存を前提にした上での社会主義的分担性、国民経済発展への圧迫に対する対立である。これはアメリカブロックとの共存と云う世界体制への全面的敵対として存在している。

後進国ブロックの再編一政治的独立一政治的民族国家の成立と国民経済の未形成はここに於いて米ソに依存する世界市場一世界資本主義の分業に組み込まれる部分と他方この過程に対立する部分との両者を生み出し、この部分は、非和解的に世界体制をゆり動かすまでに到っている。統括的にみるならば米ソによる世界市場の發展に軸をおく開発路線という世界構造の基調に対して資本主義国、労働者国家、後進国を通したブロックの形成と対抗という関連であり矛盾を累積させている。そしてこの様な世界構造の転換こそ世界の危機として同時にプロレタリアートの危機として存在する。

⑤ 戦後世界と日本帝国主義

市社会の形成、戦後憲法と議会制民主主義の浸透、生活及び政治の民主化一近代化を軸とするあらゆる領域での価値生産である。これは世界的な平和共存による相対的安定期に高度成長過程で開化する。戦後世界が構造的再編を促され、矛盾を蓄積し、拡大する過程は高度成長の過程で蓄積してきた矛盾を開花させようとする。独占体は市場分割の激化に対応し、資本と生産の集積を要求され、かゝる過程は、「合理化と高物価」としてはねかえる。農村解体と膨張する都市は、「過密社会と過疎社会」の矛盾を提出すると同時に、「議会制民主主義」の成熟はそれがブルジョアジ一政治的イデオロギー的機関であることを明らかにする。「生活及び政治の民主化一近代化」を軸とする価値生産が国民的一共同的な目標であると言ふ幻想が明白になっていく。以上のような社会構造が50年代、60年代を通してどのような再編を促されていったのか、階級闘争の質的転換、過程も合わせて明らかにしていく必要がある。又同時にこのことは、大学存在ないしは大学に於ける闘いの發展変化の過程でもある。

b、戦後社会の転換と階級闘争

(50年代)

50年代一60年代の日本の市民社会一国家の動向が戦後世界構造に規定され、平和共存路線のもと国内的には高度成長の過程で相対的安定期にあったことはすでに述べた。それではこの時期に於ける階級闘争はどのように表現されたか。この期の階級矛盾はそ

の表出形態に於いては相対的安定期に於ける矛盾の激化と云うことである。労働者階級の経済—社会闘争にあっては反合闘争の敗北と賃闘—春闘の幻想、政治闘争にあっては戦後憲法理念に基く民主主義闘争の統合—すなわち日本組合主義的経済闘争と議会民主主義的政治闘争との統一性にある。すなわち50年代闘争は、高度成長に支えられた春闘—賃闘と高度成長そのものを生み出す基盤であり、又プロレタリアートへの抑圧の転化に他ならなかった生産性向上—合理化闘争と云う両面を有していた。そして高度成長を条件とする超過利潤の獲得としての賃闘と資本主義体制の発展そのものに対立する反合闘争と云う矛盾的性格を日本の組合主義の指導のもと合理化に妥協の賃上げをかちとると云う統一性で保障されながら進行していく。そして政治闘争に於いても平和と民主主義闘争が戦前型権力への反対闘争と云う側面と、議会制民主主義の否定から資本制権力の打倒と云う側面とがありつゝもこの期の資本制権力が分散化された民主主義的権利（私的価値）を権力の集中（公的価値）として再編せんとした動向から総体として民主主義闘争が反政府的であったと云うことにすぎない。—私的価値を対置したにすぎない。そしてこのような50年代階級闘争の最高表現としての安保—三池闘争に到ってその矛盾的側面が分化していくのである。

（60年代）

それでは次にこのような50年代階級闘争は60年代に到ってどの

ように転換をせまられていったのか。戦後世界体制の転換と日本資本主義の高度成長の停滞は、市民社会—政治国家の動向が相対的安定期から構造的不況へ入る過程で階級矛盾は進行していく。このことは反合闘争の敗北と賃闘—春闘の勝利の幻想によって、資本制国家の否定としての民主主義闘争の敗北を議会主義的方向で乗り切れることも、又社会—経済闘争の敗退を政治闘争の幻想で乗り切れることも、又社会—経済闘争の敗退を政治闘争の幻想で乗り切れることもできなくなっていった。すなわち春闘方式の分解と

社会党—共産党の統一戦線（市民的統一戦線）も崩壊していくのである。日本に於ける資本制権力がその政治的—社会的構造を帝国主義的再編を本格化する過程の中でその動向に対決する階級闘争の新たな質的ヘゲモニーを作らなければならなくなっていく。60年代の政治、社会的状況は大衆に次のような転換を迫っていく。経済過程—日本帝国主義の資本—生産の集積領有様式の広範な再編は、高物価とインフレによる大衆収奪を強化する。諸階層は合理化—首切り、配職—労働強化が現実化する。政治過程—イデオロギー的には「平和と民主主義」、形態的には「議会民主制」として存在した戦後の政治的ナショナリズムが幻想であるばかりでなくこの下で帝国主義が反革命—侵略の野望のために先行的に権力再編したのに対し、大衆は抑圧、強権の拡大への反抗—反逆を形成する。そして、この過程は政治的イデオロギー問題ではなくて政治価値の相対化としてあらわれる。

c、戦後社会と大学（全共闘運動まで）

（50年代—60年代前半）

50年代に於ける日本社会の構造は大学に対してどのような作用を行なったか。戦後に於いて創り出された市民社会の枠内に於いての自立を保證されるという存在としてあった。即ち大学の国家権力との関連に於いて憲法体制を前提とした大学の自治を存在させたのである。すなわち大学の自治という近代市民的イデオロギ—の存在は、資本制的生産様式と国家の肯定の上に可能であったのだ。そして「大学の自治」に立脚した運動の構造はどうであったか。50年代の資本制国家権力の打撃は戦後崩壊せしめられた戦前型日本権力に代わる新たな質の権力をどのような内容と方向に於いて形成するかという過渡期にあり、民主化路線によって分散化された民主主義的権利（私的所有の価値）を民主主義の集中化として権力を形成せんとしたのである。しかしそれは単純な戦前型権力の復活というものではなかった。それよりも、日本社会の政治的—社会的近代性を批判することにより近代思想—近代市民的イデオロギ—としての民主主義を具体的に抑圧せんとするものであった。市民社会—国家の成熟過程にあわせた、かゝる動向の中では近代市民的イデオロギ—としての「大学の自治」は抵抗の環たりえないのである。50年代の学内民主化闘争に於いても戦前の権力を体現する大学の旧い支配権力に向けられるとき戦前体制の上で急進ブルジョワ—の立場と同一基盤で展開されるの

である。すでに述べたがこのような構造の中で50年代の学内闘争は次のような性格を有していた。

○学生の大学での地位の一定の拡大と云うこと、大学の古い権力体系を民主主義的立場から突き崩すということである。そして学生内部にあってはポツダム自治会を主軸とした統一戦線が教授層との内には民主化共闘と云う統一戦線が存在しえたのである。○政治ブルジョワ—に対しては民主主義の支配幻想への過程を戦前型への反発として市民的イデオロギ—の立場からの反対と民主主義そのものへの抵抗という二重の側面である。

○このような二重の同一性はヘゲモニーの分化としてありつゝも学内民主化闘争が日本社会の民主主義闘争としてあったがゆえに学内的に解決できはしたが、その枠を破るときには権力の弾圧と学内—大学内部の分解があったのである。そして学内闘争はその分解と止揚という局面まで50年代、60年代前半に於いては成熟しないのである。

（60年代後半）

このような学内闘争に於ける運動—組織構造は60年代後半に入り展開をせまられている、巨大独占体の形成と超重化学工業を主軸とする産業と資本の有機的構成の高度化は職能的技術者の産業の近代的合理主義による研究—教育体制の再編を要求する。知識と技術、あるいは科学の個別化はより促進される。高度成長の終焉と高物価は労働力再生産のために大学へ投資する資本は減少し

収奪の拡大となっていく。このような情況下に於いて学園闘争は大学権力が新たな質として形成された資本制権力と結合し、大学の国家権力の癒着と産学協同路線により再編がなされるとき、学内民主化闘争は抵抗たりえなくなっていく。そして闘争がその枠をこえるとき国家権力との全面的対立に移行するとき、運動―組織構造は全面的な転換をせまられる。すなわち転換が成しとげられないときには、一方に於ける改良主義―学内主義を生み出し、対極には極左主義―政治主義を生み落とす。そしてこの時点に到って民主主義者との分化が必然的におこってくるのである。この歴史的必然性のもとに「全共闘運動」が登場してくるのである。すなわち、60年代後半に於ける全国学園闘争の激発は、客観的条件としては日本資本主義の帝国主義的發展過程に於ける全政治―社会的領域に於ける転換というなかで形成されたものではあるが、もう一方に於いて闘争の昂揚を促した条件は三派全学連分解以降の大衆組織の自然発生的転換にあると云えよう。安保全学連の崩壊以降60年三派全学連の結成と分解の過程こそ、ポツダム自治会―全学連、党派自治会―全学連という党派―大衆（組織）の関係の限界過程である。そして全共闘はその枠をこえるものとして登場してくるものである。

d、全学連―全共闘の系譜

これまでに見てきた通り、戦後学生運動に於いて、政治的大衆組織は各大学、学部自治会を単位とする全学連がその機能を果し

てきた。そして60年安保を頂点とする全学連の崩壊と混迷は三派全学連を過渡期としつゝ全共闘連合へとその大衆組織の転換を行なってきた。その全共闘連合も昨秋の闘いのなかで今一步の飛躍を問われてきた。60年代後半、三派全学連から全共闘連合へと云う過程こそ50年代全学連を根底的にのりこえる政治的大衆組織と統一戦線の形成を迫っていたといえよう。我々はこの70年代、階級闘争の実現の中を学生運動の新たな任務と、もに大衆組織の存り方自体を根本的に問い直して行なわねばならない。前衛的指導部と活動家組織と大衆組織、その結合関係自体から問いただしていく必要があると考える。

△大学（学部）自治会―全学連▽

戦後形成された全員加盟制大学自治会とその全国連合たる全学連が何故に大衆政治組織としての機能を有していたか。すなわち60年安保後の崩壊に至るまでの十数年間、戦後階級闘争のなかで全学連が急進化した運動を大衆的に保証しえたのかということである。戦後階級闘争との関わりの中で、構造的に明らかにしてゆくことは、同時に自治会―全学連が、闘争の急進化に伴ない又は、発展に伴ない分解をおこし、大衆組織としての機能を崩壊させていったのかという事の解明でもある。学生自治会の結成と存在が許されたのは戦後憲法体制下に於いてである。平和憲法―民主主義、議会議事体制として出発した戦後日本社会に於ける大衆の民主主義的権利としての学生自治会であった。かゝる戦後社会に於

いて学生の生活と権利を守るべく結成された大衆組織が何故に政治的に急進化し、戦後学生運動の組織的基盤として発展をとげていったのか。その政治的―社会的背景のなかを、大学の自治―学生の自治会という価値系列がどのようにその大衆性とその政治性を同時に反政府をもちえたのかと云う事を明らかにせねばならない。つまり学生大衆を包摂し得た根拠とかゝる大衆組織が階級闘争の発展のなかで前衛的指導部とどのような組織的関連をもつ事によって急進的に登場する事が出来たのかということである。

戦後憲法が大学の存在に与えた影響はどのようなものであったか。もともと大学の自治や学門の自由と云う理念にもとづく大学が市民社会の利害や国家的―政治的立場から相対的自由な立場にあるようにみえたのは肉体労働と精神労働の分割にもとづく分業の所産として「知識」や「意識」が仮称な自由としてあったからであるが、戦後憲法はこれに法的保証と云う幻想を与えるのである。すなわち戦後憲法自体、市民社会の階級的利害から独立し、普遍的利益を代表するような幻想を近代思想として付与するのである。すなわち、戦後、国民的総意としての憲法体制と、民主主義諸権利と云う幻想的共同体の枠にとじこめられるのである。大学の自治や学生自治会の存在が許されるのも、大衆的基盤を持ち得たのも、本質的には資本制的生産様式と国家の肯定の上に可能であったのである。このような大衆組織―自治会が政治的に闘争組織としての機能を果たしたのも、闘争の性格自体が民主主義的

△全学連の崩壊と全共闘連合▽

戦後憲法に立脚した民主主義体制やそこに基盤をおいた学生自治会―全学連は、活動家集団（反戦学同―社学同）との結合により急進化した闘争を行ないつゝも、よってたつ基盤そのものが本質的に資本主義との対立の上に存在したものでないが故に闘争の急進化と発展が組織基盤の解体へとつながっていくのである。又党―活動家集団―大衆組織原理も全学連そのものに問題をさしはさむことなく闘争の急進化と党派ヘゲモニーの形成といったものが故に全学連と云う組織基盤の解体との矛盾を生み出していき、党の活動家集団を媒介にして、戦略、戦術を持ちこむという運動構造も破綻していくのである。そして大衆組織たる全学連の解体は逆に党活動家集団のよりイデオロギー化した分解へとつながり60年以降の過程をむかえるのである。

△三派全学連から全共闘連合▽

60年結成された三派全学連は政治的には反帝闘争を軸としつつ、最低限に於いて戦術次元での結合を行ないつゝ、統一行動を保障

することにより、各大学活動家集団の統一戦線としての自治会をゆるやかに結合させるというものであった。しかしながら67年以降の政治闘争、学園闘争の発展は完全に自治会の枠を破り、実力闘争―武装の要求は三派全学連という結合関係をも破壊させ、自治会の完全党派系列という大衆組織の大衆性の喪失と云う過程とともに階級闘争の質やレベルは従来の党派―活動家集団―大衆組織と云う構造自体をも転換をよぎなくされていくのである。そして党派―活動家集団から意識的指導のないまま、大衆組織のレベルに於いて68年以降各闘争委員会の連合として大学全共闘が形成されていく。このような全共闘の形成と発展に対し、党派はどうヘゲモニーを貫徹させるかという次元でしか対応できないのである。すなわち組織構造の転換の意識的指導のないままに三派全学連の解体の総括のないままに三派全学連の、喪失に対して、これに下から補完するものとしての対応しかなじえないのである。

三派全学連という統一戦線と同次元に於いて、八派全共闘連合たる統一戦線が形成されていくのである。ノンセクトラディカルといわれる党派に包摂されない部分が登場するのはいわば当然であり、そして、彼等が全共闘連合へあきたりないとするのは根拠のないことではないのである。今やノンセクトラディカルというセクトとして存在しているのは、ともかくとして全共闘連合を止揚する道を明らかにしなければならないのは当然である。ノンセクトと云われる者たちが思考している間に解答せねばならないと

考える。これに解答しないかぎり、新しい大衆組織の形成は不可能であろう。

○まとめ

以上(2)―(3)に及いて簡単に述べた階級闘争―学生運動の現在の到達的、云いかえれば矛盾の現在の発現様式についてまとめらば、

①街頭政治闘争(反戦闘争)に於いてはイデオロギー的には「平和と民主主義」「議会制民主主義」を形態とする現在の帝国―支配様式そのものとの闘いとして存在している。したがって政治焦点の形成は現存の秩序―支配様式を前提とする議会制秩序をめぐって形成されるものではなかった。局地的なものであろうが暴動的に流出する抵抗として表現されている。又闘争戦術も暴力の復権を媒体とする高次なものとなっている。そして組織的には自立しながら既成の組織枠を乗りこえて存在している。

②社会的拠点闘争―大学闘争を軸に社会的再編に対する闘いとして存在している。旧来の個別闘争―経済闘争の改良的性格を乗りこえて大学存在の解体―否定を媒介にして社会そのもの、総体の批判にいきついている。闘争の契機となったところのものをはるかにこえていくのである。闘争戦術も暴力的形態を含む占拠闘争として存在している。組織形態もポツダム自治会と云う団結様式の分解からコミュニティの団結と云う私的―擬似的共同体への反抗に支えられた全共闘を生んでいく。

(2) 60年代の限界と止揚のために

④階級の形成

我々はこゝまで、中大闘争の諸過程とその限界から始め、60年代の階級闘争の過程と到達点を確認してきた。こゝで最終的に解明せねばならないのは、70年代に踏み出すべき、60年代の止揚である。そして我々に初源的に向われているのは綱領・戦術―戦術である。それへの解答は過渡期世界に於ける階級形成の問題であると考える。そしてそこに於ける「市民社会・国家」の止揚を見通した革命論、共同体論―階級形成論(国家、政治、階級)の再検討―提出であると考える。又、経済闘争に於ける戦略、戦術の検討は革命論としての中央権力闘争―マッセントの措定への解答として新たな組織構造の提起も不可決である。問題は山積みしている。我々はこゝでは階級形成論に軸を合わせた領域と軍事と武装への解答としての組織―運動構造の転換の二つの領域への接近として総括を進めたい。この二点の問題で我々が早急に問われるのは政治闘争と社会闘争(全人民的政治闘争―個別闘争)や改良―革命の連関性のはらんでいた問題点に根本的に答えるには両者を取り結ぶ媒介の解明であるし、そのためには階級形成への方向と内容こそ明らかにすべきである。又、軍事に焦点を合わせた組織構造について明らかにすべきなのは、中大闘争に於いても全共闘運動に於いても権力状況に対応し、対応できる組織―運動構造こそが問われていたからだと思う故である。70年代は情勢の

転換と共に政治集団―闘争組織にも革命的転換を迫っている。そして、政治組織の転換は大衆の直接的運動と無関係には存在して

いない。それでは大衆の直接的運動はどう理解すればよいか。そしてこれとどう関わり、どう指導すべきか。これに解答するには大衆の存在の内容を理解せねばならない。又、それがなければ階級の形成の方向も明らかとはならない。大衆が市民社会の中で「共同体」に対して闘うとき(社会闘争)と政治的国家の領域で共同体からの疎外と闘うときと、その共同性に対する位置を明らかにすべきである。すなわち人間の存在基底の解明である。歴史の究極的な原動力たる下部構造と現在の関係である。そして下部構造と上部構造との近代社会に於ける位置は、「市民社会」と「国家」という形でひきさかれている。そして我々の存在する市民社会と国家との総体への闘争が重大なのだ。中世に於いては、市民社会が政治社会であったが故に、市民社会の組織的原理は国家の原理と同一であり、市民社会の階級と政治社会に於ける階級とは同一であった。しかし、法を媒介にした市民的階級と政治的階級の分離こそが近代社会なのだ。市民社会に於ける私的階級は、国家が法を媒介にして政治的国家として現われてくるとき、官僚制として公認された立法権支配に対して政治的階級(被支配階級)に転化する。大衆は単一的な存在ではない。意識問題と生活過程、国家と市民社会―引きさかれた大衆。どこに行くべきなのか。

○国家―市民社会の形成過程は、国家に於いて政治的国家と、社

会的国家の二重化の過程であること。

○そして国家の二重性と市民社会の成立は、階級の私的階級と公的階級の分化の過程でもあること（経済的階級と政治的階級）

○経済的階級—政治的階級を総括するときに階級の方向性として、社会的階級の形成を明らかにすること。

以上のことを、具体的に検討していかねばならない。

△「国家—市民社会」の成立▽

労働力の自然からの分離—主観的生産力は、資本の媒介なしに対象化できない生産力である。自然（土地）からの解放過程は、同時に資本（第二の自然）への隷属過程である。又賃労働と資本の関係は、その社会構成の原理に私的所有性をおくものである。労働の蓄積としての資本所有者と労働力所有者とが私的所有を原理とする市民社会を形成する。かゝる市民社会に対して「観念の共同体」としての国家が成立する。私的所有—私的利害を擬似共同体所有—共同利害の幻想のもとに貫徹せんとするものである。市民社会の生産諸力—経済、社会構成に制約されつゝ、市民社会の私的所有原理を普遍性としての共同幻想に集約する。つまり市民社会の諸構成にもとづく社会的国家と外に独立する政治的国家である。そして、国家からの疎外は階級をも市民社会に於ける公的階級に登場させる。かゝる二重の共同性をどう突き破り、階級の二重的存在を総括的に「階級」として登場させようかと云うことである。市民社会から法を媒体として成立する国家への闘いと、

のアプローチは、実践の武器たりえなければならぬ。具体的組織建設の課題にこたえなければならぬ。階級形成のメルクマールたる生活の思想とは組織内部に於ける関係が現在の「個」の完全な実現と組織の伸長として着手されねばならない。すなわち、大衆組織に於ける直接民主主義—直接行動の貫徹である。又、市民社会—国家の間での党主体の位置を明確にすること、そしてこの事は、自己—党の関係を政治的階級へと一面化してはならないと云うことである。つまり、現実過程（生活過程）に於ける自己と幻想過程（意識過程）に於ける自己をどれだけ具体的に把握して、歴史と情況に肉迫できるかということなのである。市民社会からの疎外と政治国家からの疎外を統一的に把えないかぎり「階級」への接近はない。

中大に於ける5年の闘いの過程で—大学という社会的領域に於ける闘いの展望を思想的にも政治的にも把みることができなかつたのは、階級闘争の根本的構造への認識の未熟さに求めなければならぬ。そして、社会闘争か、政治闘争か、拠点か街頭か、の対峙や政治闘争、中央権力闘争の名もとの街頭闘争という択一は、両者をとり結ぶ媒介たる「階級」の措置により止揚されなければならぬのである。個別闘争に独自の論理を見いだすのもなければ、政治闘争へ全ての価値を見出すでもない。個別闘争が政治闘争と結合するとき、両者をとり結ぶ環と、何を実現するのかと云う方向が明らかにならねばならないのである。学館

市民社会内に於ける階級からの疎外との闘いとをいかに統合するのかと云うことである。大衆が政治的に表現されるとき、市民社会に於ける大衆の内在的存在とを闘いの過程で結合させる媒体が必要である。すなわち政治革命にどう社会革命をとり込むことができるかと云う問題である。社会的諸領域に於ける闘いを全て政治闘争に引き上げると云う戦略結集—党派結集への（個別闘争に於ける革命的敗北主義）指導を止揚しえる媒介である。

△社会的階級の形成—生活の思想▽

我々は、私的所有—国家的所有という資本制社会に於ける所有の統一的概念の批判と止揚の方向を明らかにできる時、初めて国家—市民社会をこえうる。すなわち、私的—国家的所有（擬似共同体所有）と云う所有に於ける関係の革命こそが必要なのである。どちらか一方に重点をおく価値生産や生活過程を、生活に媒介された思想としての価値生産—個的—共同体所有への方向を明らかにせねばならない。自然—人間の相互規定、不変の疎外関係の革命こそ自然的—人間的存在への接近である。階級形成は全自然と全人間の関わりの中の革命なのであり、そのメルクマールこそが個的—共同体的所有を基礎とする生活思想だとするのである。我々は経済的階級—賃労働者や普遍的とされている政治的階級でもない。我々の階級は、そして階級形成は、社会革命の射程でとらえ現実的共同体の創出を私的—擬似共同的所有を所有した個的—共同的所有の定着に求めるのである。そして、我々の階級形成へ

闘争の限界も常置委闘争と安保闘争との関連も「階級」と「階級形成」の方向が明らかになったときに始めて解答出来るのである。

⑤権力闘争の時代と党—大衆組織の転換

—全中闘、全共闘の限界—

△軍事と階級情勢▽

まず70年代階級闘争に於いて軍事武装がどのように問われているのかを見なければならぬ。我々は先に現代世界構造の転換期に於ける日本帝国主義の動向を見てきた。米—ソを軸とする開発路線の再編過程に対し、長期戦略を確定しえず開発路線—プロック化傾向へのどちらへも転換できない日本帝国主義の現在の情況こそが階級情勢の流動化の基底である。対外的には軍事を軸とした後進国対策も確立しえず、国内的には国家的統合をなすうるイデオロギーを所有しえない現状が現在の政治情勢と階級動向を形成している。政治情勢に於いては、長期戦略を確定しえない過渡的政策として反革命同盟—安保・沖縄問題として表現されている。そして階級情勢に於いてはどのように現出しているのか。支配権力による国内再編過程は70年以降の帝国主義的侵略、反革命を遂行する基盤を戦後の全社会的再編として進行している。そして戦後民主主義体制の根本的転換である。ブルジョア民主主義の集中化を通して質的には私的価値の生活意識を擬似共同体的価値への重点の移行として進行する。このことはポツダム自治会—組合と云う私的防衛の市民的結合関係の分解を通して日帝—民族の

新らたな枠の形成と云う過程である。すなわち、かゝる再編過程に於いては旧来の私的意識—秩序防衛の枠内での抵抗は秩序派としての役割をもつようになり、自然発生的にその枠をこえた自衛武装派を生み出して行くのである。学生に於いては帝国主義的再編の過程が大学マカデニズム幻想を幻想たらしめ、大学自治の否定としてたち現われてくる動向に対する闘いであった。無論アカデニズム防衛—大学自治防衛—民主主義防衛という枠内ではない。闘いはこの防衛派との対立を契機にして暴力的に対決するまでに到り、その時点で国家との対立へと到達して行くのである。すなわち全共闘運動がそれである。全共闘運動は旧来の改良と革命、経済闘争と政治闘争と云う枠組みを突破して権力闘争に到るソビエト的団結様式のイデオロギーを提起して行くのである。しかしこれらの運動・闘争組織の限界も又明白であった。運動的には武装の問題が権力との闘いに於いてヘゲモニー論の枠を抜け切れず政治闘争—経済闘争の分離として現出し、組織的には、平時の組織に軍事をつぎ木するという政治組織の構造が全共闘運動への指導的發展となりえなかつたのである。

△軍事と組織▽

それでは権力闘争の政治—闘争組織は如何にあるべきか。軍事—武装の問題は組織構成主体にその転換を迫るのである。前提的に拒否せねばならないのは権力分析をあいまいにした武装対抗論であり、軍事を自衛武装の段階にとゞめ旧来の組織構造、政治へ

闘の分解は安保全学連以降の統一戦線—大衆組織の様式の限界と崩壊であり、構造的転換が要請されているのである。安保全学連の崩壊はすでに述べたように50年—60年型の運動構造に支えられたポツダム組織の分解に拠をおくものであり、かゝる大衆組織の实体の喪失の過程であった。「民主主義」と云う価値理念を軸にブルジョワ急進主義と同一基盤の大衆結合に活動家集団が戦略、戦術をもちこみ運動の指導を行なうという党—大衆の連関性自体が大衆組織の分解と共に解体を迫られて行くのである。自治会の党派系列化と活動家組織の党代行という過程である。そして、かゝる情況に対し三派全学連の結成は民主主義闘争から反帝闘争への移行発展と云う運動構造の転換に合わせ党派系列化した「大衆組織」の統一戦線として形成され、戦略、戦術による結合と行動力による大衆吸引という実体をもつものであった。そしてかゝる三派全学連は全共闘の分解過程と同じく、羽田闘争以降の運動の昂揚がその解体の要因となっていく。すなわち闘争の質的發展は従来の大衆組織の大衆性が喪失し、党派と大衆組織の連関構造が変質していくのであり、活動家集団の戦略戦術をめぐる対立は、そのまゝ全学連の崩壊へとつながるのである。このような党—活動家集団—大衆という構造の転換への一つの解答として大衆組織レベルに於いて自治会の枠を突破する全共闘として生み出されていくのであるが、これも上からの政治的ヘゲモニーを形成せんとする統一戦線の枠の中にとりこまれることにより軍事問題（武装）

ゲモニーに軍事をつぎ木せんとする傾向である。軍事問題と階級形成を分解した組織路線は自滅するか孤立し、権力に粉砕される。我々の解答は（党—活動家集団—大衆）と云う組織、運動構造を（党—軍—統一戦線）へと転換させることである。すなわち党—大衆の相互の関わり方を軍事を軸として転換させることである。そしてさらに軍事組織と共にあらゆる領域を含む青年同盟（大衆政治組織）を併行して形成するということである。すなわち軍事と階級形成が不可決の関係にあることを軍事組織の基盤の組織的確定と共に形成していくことである。全共闘の分解が秋期決戦に到って軍事に解答すべき情況でおこったということは全共闘に表現された大衆団結の質を党派の対立のなかで発展させることなしに終ったということである。何故か？ 全共闘は自然発生的に作られた新しい大衆闘争機関に上からの党派の統一戦線が政治ヘゲモニーを形成すると云う内容であった。かゝる上からの統一戦線が軍事を政治ヘゲモニーの枠におしとゞめ平時の組織構造の上で自衛武装を保障すると云うものであったが故に、党—活動家集団—大衆と云う構造に於ける統一戦線であったが故に、軍事—武装に対応できえず分解をおこすのである。（コンミュニオン型全学連論はこの典型である。）全共闘運動の発展は同時に党派間統一戦線の展望として提出されなければならず学生運動という個別運動を全階層の運動に広げ地区の形成、諸階層の結合と軍事組織による共同行動等を媒介として再編—発展させねばならない。全共

への解答を出し切れぬまゝに解体させられていったのである。全共闘の止揚は、以上の過程から党—軍—統一戦線という構造への転換の中で始めて可能になって行くのである。

（Ⅲ）総括の最後に

— 諸問題についての見解 —

(1) 7月自主退去—8月学館徹底抗戦について

6月再バリ以降、最も大きな焦点となったのは学年末試験であった。入試に於いて問われたのと同等の問題に解答せねばならなかった。しかし入試闘争以降我々指導部に大きな前進はなかった。根本的な対応をなすところなく、大学立法を軸にじつゝもり上りをみせたエネルギーも闘いに参加した一人一人が試験に呑み込まれることにより急速に霧散して行くのである。試験を拒否することにより、自らの生活展望まで賭けた闘いへの参加をうながす政治指導が不在であったこと、ここに7月闘争の敗北—自主退去の根本原因がある。そしてもう一方我がブンド内に於ける赤軍派との分派闘争が大衆闘争に於ける組織温存として働いたことをこゝに自己批判する。

8月学館徹底抗戦もこの敗北の上で最少限の抵抗をこゝろみたものであり、この時点に至ってはこの攻防戦が大きな実践的影響をもつであろうと云う判断ではなく、指導部の政治的責任としての闘いでしかなかったのである。8月末授業再開に対しても9月

以降の安保闘争への期待を残しつつも極めて戦術的（技術的）な対応に終ってしまったのである。

(2) 10月総決起集会をめぐって

8月大学立法の成立から10月安保決戦を控えた9月、我々は再度全中闘への結集をなさんとした。しかしながら、この過程に至って全中闘の決定的な力量の低下と我が政治組織の危機的状況は一方我々以外の諸党派の相対的力量の強化となって現われ、一切政治的責任のないかゝる党派と我々の党派闘争、ヘゲモニー争いとして、全中闘の統一戦線機能の分裂となり、大衆結集能力を完全に喪失して行くのである。かゝる事実は先に述べた通りに、我々政治党派の統一戦線の把え方、又はその基盤の在り方への限界と誤謬にその因をおくものであり、全中闘に結集し、最後まで闘われた諸君には止揚の方向を提示するとともに自己批判を行なうものである。10-11月安保決戦への全中闘としての関わりは、それ故全く統一的になされないうちに終り、勿論全中闘-全共闘が権力状況に対応出来なかつた根本的原因は別にあり、先に述べた通りであるが、こゝに至って第3次中大闘争は完全に終息するのである。

(3) 自主オリエンテーションについて

70年に入り、69年秋期の闘いの敗北は総括と展望を即座に提出し得る程の余裕のあるものではなかつた。全くの戦後の状況のなかで中大に於ける弾圧は、一層シ烈を加え完全なロックアウト状況下での卒試、学年末試験、入試が強行されていく。4月以降に

於いて、新入生を向かえ、サークルを中心に全中闘の組織再建がなされるのを恐れた学校権力はサークル連盟に対する圧力を加えてくる。これに対しての我々の対応は69年までの闘いの根本的な総括をなさないまま、そして70年に於ける闘いの展望を含んだ中大闘争の方針を提出することなく、サークル連盟中心の組織運動方針としての「自主オリ」を提出するにとどまる。サークル連盟の今後のあり方-既存の大衆組織の再編-転換という方針展望もないままの対応になるのである。これに対して大きな批判があったのは然るべきことであり、我々の限界としてこゝに総括しておきたい。ただ明らかにしておきたいことは、69年以降の政治党派の敗北に対して、それへの止揚を政治党派への拒否反応としての「ノンセクト・ラジカル」にその立場を求めようとした傾向は時期的必然性があつたとしても原則的にそのような立場は批判されるべきであることを附言しておきたい。そのような立場は市民社会も国家もこえられないのであり、政治闘争においてはプチブル急進主義として、社会闘争においては、サンディカリズムとしての必然性を内包しているということである。

(IV) 第四次中大闘争に向けて

—学内共闘組織について—

我々はまずもって現状を打破しなければならぬ。ロックアウトを粉碎し、常置委体制を打倒する闘いを再開せねばならない。

過去の敗北を貴重な教訓としつゝ、今、第四次中大闘争へと永続化した闘いを開始せねばならない。この数年間、闘わずして生きのぼる道を選んだ者たちの末裔どもには用はない。我々は真に闘い、そして闘わんとする者たちの強固な団結をこゝに新しく作り、育て上げ、70年代闘争への烽火たるべく中大闘争を開始せねばならない。

学館闘争-全中闘、学費闘争-学費闘争連絡会議、常置委闘争-全中闘、この数年間、我々の団結は様々な組織的表現をとってきた。そしていずれに於いても一歩ずつ前進し、それぞれに大いなる限界に達してきた。

すでに我々が見てきた通り、ポツダム自治会から全共闘（全中闘）への道のりの長かつたように、全共闘（全中闘）も又長い歩みが始めている。確認し得た方向性のもとに、具体的な歩みを開始せねばならない。

第四次の大闘争を開始するにあたり、ここに於いては我々にとつては最大の眼目である学内共闘組織の再建についてのみ述べておきたい。新しい大学組織形成の方向性についてはすでに述べているが簡単に再述するならば次の通りであろう。

すなわち党派-大衆組織の関わり方を軍事・武装を軸として転換させる事である。統一戦線の再編も軍事問題を中軸とした共同行動の保障から始めねばならない。そして軍事の問題は階級形成と分離した組織路線であつてはならない。すなわち階級闘争に於け

る軍事の保障は諸階層結合を目指した組織路線なしには有り得ないと云えよう。そしてその為の出発点として地区共闘の形成は不可決であり、産別の運動を階層へと拡大するソヴィエト運動こそ我々の目指すべき方向であると云えよう。

それでは中大に於ける具体的課題とは何か、第一次闘争に於いては自治会+各連盟闘争委としての全中闘が結成され、闘争の終了と共に解散し、平時の闘争は自治会のもとに行ない第二次闘争に於いて再び同じ構造の学闘連が結成され、解散し、自治会運動に戻り、第三次闘争に於いて全中闘と云うくり返してあつた。つまり臨時闘争委員会と云う以上の性格を越えられる持続力がなかつたのである。と云つても、自治会に変る定着した大衆組織の展望がなかつたわけではない。学費闘争時に於いて、我々は「全学評」の構想を明らかにした。羽田闘争を経た68年、大衆の分解と大衆組織の解体の進行は新しい価値観-結合軸のもとにその再編を迫られているとし、大衆の反抗のエネルギーをその末端に於いて直接民主主義を軸とする組織に再編せねばならないとした。すなわち学生運動に於いては大学の自治と云われるものが権力から相対的自由を表現するものであり、この下で学生の闘いが間接的にせよ防衛されていた地点から、これが抑圧の武器に転換していくとき、直接民主主義による大学の諸大衆組織の改変をなさなければならぬと云う方向性を明らかにしたのである。しかし、あまりに早すぎた主張であつたのかも知れない。我々以外の全て

の党派がセクト的策謀であるとし、強固に反発するという事態になったのである。彼らはあまりに遅れすぎていたのである。

いまだ、我々の構想と目的は前進していない。構想は具体的に検討されねばならないと考える。この事は学内に於ける学生・教授・職員の共闘関係、そして地区との関わりをも明らかにしていく事である。

我々の現実的な歩みは、かゝるおぼよその方向性の意志統一から始め、全中闘崩壊の理論的解明をなしとげる事である。

60年の敗北が70年を実現したのであるなら我々は「前進」していると言えよう。しかし70年が何を実現出来るかは現実の歩みを始める以外に答えようがない。そしてそれが全てであるとは断言出来よう。

わが中大に於ける闘いも再び出発出来る主体的条件をととのえる事が出来た。闘わずして生きのびた者たちが、我が世の春を謳歌する時は、余りに長すぎた。そろそろ、もとの隅の方の寝ぐらへ、帰ってもらわねばなるまい。嫌がるのであるなら、実力でそうしたいと考えている。

一九七〇年秋 社学同中大支部

(文責・室 淳一)

△おわりに▽

70年秋、我々にとってこの一年間程に屈辱の時期をかつて知らない。60年代の後半期に始まった我々の小さな歴史には後退期という存在も、つまりは経験もなかった。そして党派の分裂という苦しさも覚えのないものであった。

この一年有餘、我々は闘いの敗北という事実につつまる諸過程に拒否しようもない経験を味あわせられ、ようやくに客観視出来る地点に立つ事が出来たと云えよう。

我々は現在を後退期と認識するものではない。主体的条件の限界をようやく越えうるか、否かの問題点をかゝっているにすぎない時期としてとらえかえさねばならない。

70年代の日本帝国主義はいよいよよあからさまである。階級闘争は「革命」という到達点があるとすれば、ますます本格化せねばならない時代である。

△スローガン▽

- ☆常置委体制粉砕！
- ☆本部体制粉砕！
- ☆学館・サークル室ロックアウトを実力で解除せよ！
- ☆学内共闘を再建せよ！

70年代へのルビコン

「かくめい」へ向かう核心的諸問題

はじめに

神 津 陽

I章 「第二次共産同」への弔辞

一、第二次共産同の醜状は「八派」の明白である

三、叛旗一号の限定性

イ 「公開論争」をめぐる戦旗派(党形成論)の変節

イ 「地区委」運動の波及力と党的制約

ロ 野合の解体||徒党の完成

ロ 「共同体論」と全共闘運動

二、一〇・八以降の私たちの歩み

ハ 「情況派」問題の自己批判的総括

イ マル戦|関西の相補的対立

四、「四号」党内闘争宣言」が目指したもの

ロ 私たちとマル戦、関西との対立点

イ 六九年「秋」が要求した「共同体論」の具体化

ア 革通主義|マル戦派批判

ア 「たそがれのブント」を救出せよ

ブ 明大敗北と一向理論

ブ 七〇年代への水路を拓くこと

シ 私たちの立場

ロ 「軍事」は、「営|大衆」止揚から始まる

ハ 「叛旗一号」の形成とその検証

ア 戦旗、情況との非和解的対立

ア 「党|大衆」論批判

ブント、中核論争を越えるもの

「政治焦点|拠点」の闘いをどう評価するか

II 章 飛躍の「環」は何か

一、脚下照顧

- イ まず精神の小商人—小市民を解体せよ
 - ア 諸党派—全共闘、反戦の窮状
 - ビ 「八派—全共闘」のどこかだめなのか
 - ク 困難は「次は何か」にある
 - ロ 社会主義⇄階級論を捨てよ
 - ア 共同体的契機の点検から始めよ
 - ビ 「ロマン主義—プラグマチズム」円環の背景
- 二、前世代—同世代への思想的闘争宣言
- イ ロマン主義批判
 - ア 知識層の陥穽
 - ビ 自己救済としての「マルクス主義」の敗北
 - ク 私所有意識は共同体的契機を汲みえない
 - ロ 戦後「現実」主義批判
 - ア 都市民の生活倫理の変容
 - ビ 全肯定とニヒリズム
 - ク 戦無派単純行動主義
 - ハ、現代「知的大衆」気質
 - ア 三派全学連の後衛—ベ平連
 - ビ 全共闘運動と諸党派とベ平連
 - ク 「全共闘世代」の特質

- ド 「八派—全共闘」構造の成立—全共闘運動の敗北
- エ 全共闘良識派—ベ平連—「反乱派」知識層のロンド

三、何故に、何に固執するか

- イ 政治組織における時—空の転位
 - ア 断言1—袋は袋を破り得ない
 - ビ 断言2—空間は党派を撃ち得ない
 - ク 「階級を創る」組織の規準と限定
 - ロ 階級発現様式としての「党—軍—統一戦線」論
 - ア 「戦旗」「赤軍」は何故誤まるか
 - ビ 階級を創る「党」「軍」「統一戦線」の任務
 - ク 綱領と規律と生活倫理
 - ハ、今、何から始めるか
 - ア 党について
 - ビ 軍について
 - ク 統一戦線について
- ### III 章 「かくめい」をめぐる理論状況
- 一、「綱領—戦略」論争の現段階
 - イ 「理論戦線」 ホ 情況派「ローテ」
 - ロ 関西「烽火」 ハ 赤軍—花園論文
 - ハ 神奈川「左派」 ト パルチ—滝田論文
 - ニ 仏派「鉄の戦線」 チ 「甦える不死鳥」所見
- 二、当世知識層の政治思想

70年代へのルビコン

「かくめい」へ向かう核心的諸問題

はじめに

五号予告では本号において「共同体」詳論—共同体再指定と関係の革命—を展開することになっていた。誤読や悪読される事の多かつた不親切な文章一号「共同体論へ」をより具体的に展開するというのがその意図であつたが、本稿では考える所あつて最終的な焦点をそこにあてつつも、深く潜行するのではなく、政治思想領域全般を浅くさらうやり方を採つた。世界の、と言わうが、私の、と言わうが保持、欠落も含めて「具体性」「現実性」の所在から問いつめてみようと考えたからである。

上部構造に対して土台を、党派に対して大衆を引き合いに出す形で新左翼に不足している「具体性」を語ることはもはや何の意味もなさないという判断を私は有つている。「存在」の認識方法で、観念論と唯物論の立場を分け、意味づける事をぞこりごりだ。そんな事つまらなさは、そのように思つても感じてもないのに、あるいは了解してもいないのに「わかつたような貌」をする

小インテリや倫理主義者しか輩出して来なかつた、戦後民主主義教育が証明済みだ。問題は、認識を含めての存在にある。主体も対象も含めての「自然」の解体の了知からの出発にある。

ともかく、私たちは小山の大将を競つたり、今の八派の中で市民権や大義名分を得ようなどとさらさら考えず、批判するなら総批判を、手袋を裏返しにする手の温もりを確保しつつ進みたいと考へているのだ。

遠くの眺望もいいものだが、今日のところは足元から視つめてみようという訳だ。

総花的に並べたてた諸問題に透けて何条かの閃光が視えればそこでは諸兄弟は私(たち)の友である。固執するか、歩を踏み出すかの差はあれ、本当は何事も単純な根拠や動機に関わつていないということが大切なのだ。その契機を初発心をつきとめることこそが学問ではできない、思想の課題なのだ。

広く浅くさらうという事はいわば演繹法によらず、帰納法によ

るといふ事である。

以下で展開する諸内容、走り書き風の分節も含めて、論理化と体系化の関わりをつきつめて、折あらばより丁寧にとめるつもりである。

一章 「第二次共産同」への弔辞

一、第二次共産同の醜状は「八派」の明白である

イ、「公開論争」をめぐる戦旗派（党形成論）の変節

諸文書、「叛旗」四、五号等で述べてきたように共産同内論争は、昨春の軍事、昨秋の過渡期世界論をめぐる対立が、今春、党一階級形成論へ典型化され、噴出する中で戦旗一情況一我々という分派斗争へ至つたものであつた。現在顧みてもみるに、その対立は必然的な根柢を有していた、と同時に対立点は全党派——大衆諸組織へもオーバーラップをした形により明瞭になつて来たという事を確認しようと思われる。

明瞭化した対立点を挙げてみよう。「党内論争——斗争のやり方は即党形成論を反映する」という議論が赤軍問題以降の党内斗争の規準として今春まで煮つまつていた。私たちはともかく連合戦線をやつていこうという看板かつぎの発想のより奥深くへ思いを致し、むしろ暗黙の了解を逆手にとる形で「叛旗四号」を発刊したのであつた。それは「戦斗団」突

「赤軍」に似てる、否「叛旗」に似ているというケチのつけ合ひである。

私たちは、結果的な党内論争の公開化を喜ぶべきか、否私たちが党内斗争を党内一党派斗争へ持続させて初めて論争の全面化に至つた彼らの半年遅れのピンぼけぶりに失笑すべきだろうか。

どちらでもない。私たちは今回の党内一党派斗争を、コップの中でのヘゲモニー争いとして前提、遂行せず、「党一大衆」運動、組織構造の解体、止揚として、全党派、大衆組織へ公開し、波及させんとしてきた。

党派と全共斗、反戦の関りを変質させることなくして、如何なる党内一党派斗争も「八派」の円環を超えることはないのである。ブント内斗争が八派の本来を指すとはかかる領域への先駆であり、八派の中の一派として市民権を得てまず「軍事を組織する党作り」を宣伝する戦旗と、ノンセクトの味方づらして八派へ成り上らんとする情況と、八派一「ノンセクト」構造を規定している八階級意識形成論Vを斥け、行為の共同性に基く階級発現様式として党一軍一統一戦線の、同時的準備を考ふる私たちの差であつたのだ。

「八派」はどうなるか。小型日共Ⅱ軍共同、没落寸前のMLを除いて、解放派、構改三派、旧マル戦、プロ軍、全てで進行している党内一分派斗争は、八党派一大衆組織V総体の

出以降「叛」のヘルメット（今では随分流行つているが）着用問題へ至る過程での「内部対立、論争が大衆化するのはずい」一「地区委機関誌禁止、党中央機関誌へ一元化」という見解と、「全党派、全大衆組織への公開綱領論争の提起」一「綱領問題が党形成と不可分である故に対立点をはつきりさせる」という意見対立への私たちの側からする終止符であつた。

さて、事態は如何変化したか。まず彼等の変節である。空砲の第三次ブントに座席を得んために自らの旧来の主張を曲げ、「ブント防衛」の一点でのみ野合し、内部対立を対「叛旗」先陣争いへ転化させ、「戦旗」紙面の可もなし不可もない官僚型文体を受け入れる努力をし、自らを誤魔可していた諸君の「一板岩の党」の解体である。

「叛旗四号」に対して、形式的内部討論で、公開論争に替へようとした野合派諸君の、路線を有しての上ではない。野合故の追いつめられた悪あがき故に、事態はより喜劇的なのである。

六月「理論戦線九号」（社学同全国委）、八月「烽火再刊一号」（関西地方委）、「左派二号」（神奈川県委）、そして十月「鉄の戦線創刊号」（仏派南部地区委）の軒並みの発刊がそれである。

中央委員会も流会し、十回大会の見透しもたえず、お前は

再編を射程にくみ込めなければ、いくら気張つて「われこそは」と名乗りを上げようとも、「八派」が十派に、十五派に細分化し、共存するだけで、事態は一向に変わらず、又もや看板と数と困い込みがばつこするに至るのだ。

私たちは、この一点において、野合戦旗派が、理戦、関西、神奈川、仏派へ分解し「八派の座」を争うとも、九派、十派にならうとも「お気に召すまま」であり、我が道を行くと訣れねばならなかつたのである。

公開論争の呼びかけはかかる意図に基いており、野合戦旗派はそのことにまるで無知なまま、私たちが訣別したあと、似た者同志でありきたりの徒党内斗争へ共産同内斗争をおとしめ、私たちに恥をかかせたのである。

ロ、野合の解体Ⅱ徒党の完成
各フラクの見解表明として明瞭化した事態の中心点は以下に在る。

旧MLの流れをひき、ブント内では発想、運動ともその伝統に最も拘らわつてきた仏派は、「鉄の戦線」発刊にあつて次のように述べている。

七〇年の「総括の季節」は膨大な大衆の自然発生性の渦まぐ中で展開されている。我々と赤軍派、我々と叛旗派との内ゲバの展開を、大衆は知らうとし、自らの評価をそれに対し

てせまられている。かかる中で、党一大衆の関連において、極めて「公開論争」の様相を深めている我が同盟の論争について、我々は一貫して大衆化する事に深く反対してきたのであるが、関西地方委「烽火」復刊、神奈川県委「左派」の出版を咎まえ、むしろ、我々自身の態度を明確化することこそが、同盟内においても、また我々が共に闘ってきた先進的活動家諸君に対しても問われていると考え、あえて「鉄の戦線」発刊に踏み切つたのである。

「公開論争」に「深く反対」しながら、あえて「鉄の戦線」発刊に踏み切つた結論との間には、何の必然的關係もないのである。「我々自身の態度を明確化すること」の根柢はバスに乗り遅れまいとの便利的な心情しかないのである。

「烽火」、「左派」も含めて「公開論争」に反対し、中央機関誌への一元化を主張しながら、公開論争に転換する根柢について宣言ひとつ誌さないし、党一大衆との関連でそのことが「党内論争」斗争のやり方が即党形成論を反映する「最も中心問題だ」という反省もないのである。

私たちが分派して以降の野合戦旗派において、スターリン主義がその組織体質、党一大衆の評価も含めて定着したという事、このような経緯は遅かれ早かれ七〇年代の「八派」の未来を象徴している事、そこが各フラク機関誌の内容でなく、まず発刊形式に私たちがこだわる理由なのだ。

と、六八年秋田原芳は「烽火一号」で意気揚々と廃刊の言葉を書いた。廃刊、即ち「共産主義」への政治的任務を統一したはずの「烽火」再刊こそは、「赤軍」にかき回され、「理論戦線」に嘲笑されつつも「ブント」の大義名分にすがりつき、延命を画らんとするありし日の関西ブントのなれの果てである。

「烽火再刊一号」の「再刊にあつて」は、廃刊の際の心がまえを反省、何が至らなかつたかを検討する姿勢もなく、再刊の本音は田原問題に象徴される対「理論戦線」巻き返しにあるにも拘らず、それに一切触れえず、「掲載論文については中央機関の指示と指導を全面的に受け入れなければならぬ」とひとたすら面従腹背につとめているのである。

私たちが公開綱領論争を呼びかけた時、基本的対決は「組織内問題」として扱われ、その組織内結論、見通しがついた後で結果のみ下級機関や大衆組織に下ろされるといふ旧来の党派・大衆組織関係を止揚するという意図を有していた。政治内容からすれば、赤軍と我々の間に在つてゆるやかに「左派」「烽火」「理論戦線」(戦旗)「鉄の戦線」といふ連環を成している、そのどのフラクもが兎事に我々の期待を裏切つてくれたのである。

「戦旗」編集権を持つ機関主流派「理論戦線」へのこび

六月以降の野合戦旗派内「ゲモノ」は、「理論戦線」派が掌握しており、「戦旗」紙面の大半が「叛旗」批判と、野合派内多数派たる関西ブント批判に割かれているのは周知の事実である。

野合派が内部矛盾を対「叛旗」へ集約し、「連合ブントを脱皮した」「一枚岩の団結」を打ち取つたと大衆的にアジテーション・オルグしつつも、組織内では最も借み合ひ徒党関係しか形成しえてない事こそが、いやいやながら「公開論争」へ踏み切らざるを得なかつた背景である。

徒党政治のいざなさは、それ故極小派である神奈川や仏派南部委においてより、理論戦線・関西の相剋に典型化される。

例えば、私たちが自己の政治思想、総路線を党内外に主張するものとして準備した「七・一七集会」の当日付の「戦旗」は「三上治、神津陽除名」を「叛旗」を放逐し、第三次共産同盟への見出しで公表した。不思議なことにこの戦旗二三三号は八月末まで獄中の共産同盟同志に差し入れされていない。更には、関西ブントの実質上の責任者であつた「田原芳無期限権利停止」については、二三三号も、それ以降も戦旗紙上に一切公表されていないのである。

「烽火」をあげ、広めた時代は終つた、今や我々は、国際的国内的に正規の包囲軍を打ち固める時代に入つた

と、既に結論が出た(除名した)とされている「叛旗」への月並みな批判。「左派」は一向健の、「烽火」は田原芳の、「鉄の戦線」は仏徳二の継承止揚(これは便利なことばである)の自認とその範囲でのみみづから困り込み、これが野合戦旗派の公開論争の結論である。

彼らは何故、中央集権の一枚岩の「党」を目指しても、内部解体せざるを得ないのかという時代にも、原理的つきつめにも着目しないし、受容する感性にも欠けているから、綱領問題について、党一軍一統一戦線について、現時点での公然たる対立を掘り下げる事こそ自己が関わつてきた運動や組織や、諸君の好みの「プロレタリアート」への責務である事を了解しえず、面従腹背の自己保身の結果は、「党」に対して自らを「フラク」や「分派」として押し出そうとも、行きつく所、大きな神Vに八小さな神Vを取つて換えるに過ぎないのである。

私は、政治や党派を必要悪とみなしたり新左翼の就中、第二次共産同盟の退廃を公開し実践の足を引く気はさらさらない。実践を理論で批判する革マル的手法や、「決戦」の後に路線の批判や、結果的総括を行なう小インテリを、私(たち)は大衆運動主義故にこの間最も鋭敏に拒否してきた呈である。

私は、実践を、運動との関わりを、組織表現の持続性の現在と、根柢をつきとめる事により、拡げられた「政治」への

参加を、「革命のかくめい」へイメージされ結果する共同作業への呼びかけを行わんとしているのだ。

政治党派が他党派や大衆組織に対して内部対立をはらみつつも総体として自己表現するという時、実は組織結集環、論争が同一土俵内に存するという前提は、はたして忘失されがちである。

私たちが、綱領問題という時、世界革命のテーゼの明文化を焦る（田原芳、等）のではなくて、まだ見ぬ綱領への基本的把握の方、つまり綱領戦略の関連、党階級の指針を指しているのだ。

私たちが、赤軍一神奈川、毛沢東派一関西、革マル理論戦線の組織論をめぐる類似性を指摘し、私たちがそれらから分離せんとしたのは綱領問題をめぐる「土俵」の差故である。「亜流がオリジナルを越えない」とは、日共、革共同、中共派、ソ連派の行末が透けてみえるという事である。

はつきりいつておくが、私たちは自らとブンドとの関りを運動、思想から切実につきつめんとするが故に、革共同や中共派へ組織の最も大切な原点を身売りする諸君とは、さばさばと党内一分派斗争を成し得たと言いうものだ。

三派全学連一全共斗一八派連合を顧みてみるに、それは三派のヘゲモニー均衡から小党派乱立への移行であり、しかも重要な事は、仰々しく自派の優越性と多党派批判を並べたて

多くの新党派が産まれたが、そのどれもが、親の貌か、仇敵の貌に似てしか形成されなかつた。少なくとも組織構造と表現においてはそうであつたという事である。つまり、小日共一小社民一中共派一ソ連派とそのヴァリエーションの差でしか自己表現しえなかつた点である。

現在の全党派における二重、三重の複雑化した党内斗争、党派斗争もそこを押えない限り、必ず自己完結集團の党内一党派間分割にしか至りえない事は自明である。

現在の共産同は、党内斗争の凝縮度、関西、情況系陰謀家の左派、右派大ブンド構想の最終的壊滅も含めて、六〇年代左翼の縮図である。

私たちが共産主義者同盟に執着するのは、ブンドの内に全てが混在し、私たちがその中から七〇年代の尻尾をつかんだという「過渡」を直視せんとする故である。

スターリン主義を、組織構造として越えうるかという時、サロンアナキスムや原罪論や、政治と思想の二刀使いに組み込まない事は前提である。

同じ敗け方をやらないという意味で、同じ事の持続力は唯一その根拠を生活の沈黙の部分に求められるという意味で、私たちが起ち上がった。

私たちは、その意味で、「大衆運動主義」として除名、弾圧、自滅させられた多くの党派の諸君たち、自立社学同や

SECRET 66 ヤ、解放反レーニン派や、中核小野田派や、革マル〇〇〇支部の軌跡に学ぶであろうし、主観的には、むしろ、彼らの存在を支え、集中し、拡散している多くの活動家諸君の「政治」への怨念と連帯してきたし、私たちの志を多くの表現領域で生活で貫徹してゆく心算である。

大衆「原像」を、党派の側から取り出すとすれば、不可避により原像化するか、知的大衆を大衆だとしてごまかすかしかないという困難な状況を私たちは了知しているし、その上で焦ることもないゆつくりと歩んで行こうと考えている。

ここで概観した、党内論争一斗争の明瞭な対立点の掘り下げ、スターリン主義組織構造を越えるものについては、政治組織の持続性の根拠へさかのぼって「関係の革命」のイメージと回路として、後節で見解を表明する。

二、一〇・八以降の私たちの歩み

六七年一〇・八を前後して、世界革命の第四の波と呼ばれた、西独非常事態 斗争、米黒人暴動、フランス五月、ベトナム、インド、アラブ、チリ、チェコ、中共文革等が一挙に噴出した。六〇年後の低迷から一〇・八を経験した日本新左翼にも、羽田と国際的階級斗争の昂揚をどう統一して把握するかが要求されたのである。

この時期「新左翼理論」の形成者であつたブントにおいて、

「階級斗争の新たな自然発生性の質」及び「過渡期世界の把握」をめぐって、激裂な党内論争が展開された。

私たちが「共同理論」を形成するに至る過程として前者を中心し、マル戦一関西の相補的対立

「階級斗争の新たな自然発生性の質」をめぐる党内論争の第一は世界資本主義一通貨危機一フアンズム化一生活と権利実力防衛の徹底化という岩田弘一旧マル戦系と、ベトナム一世界革命の第四の波一膨大な、だから経済主義的な自然発生性一世界党、世界赤軍による世界革命への統合という一向健一関西一赤軍系との対立であった。

しかし、これらは旧ブント以降の革通系と関西系との経済決定論、政治過程論という伝統的な発想、理論化過程の対立を拠にしており、しかも両者が表層あるいは裏面で相互依存している事こそが点検されるべきポイントであった。つまり、階級斗争のいわば六〇年代前半の低迷を突発的に揚棄するよるな昂揚に対して、六〇年安保に対して、決戦方針を出し得なかつた経済分析の誤まりを指適した革通派、高度成長期であるにも拘らず安保は昂揚したとの総括から政治過程、の重要性、宣伝、煽動内容の限界を指適した関西の対立はそのまま新たな装いで持ち込まれたのであった。

岩田弘等は日韓決戦一世界危機論の敗北を一八〇度逆転さ

せて国益国防論合理化、既得権抹殺、ふんづまり帝国主義の国内抑圧を逆手取りせんとした。一向健等は、世界的視野からする革命戦略の必要性より高度の目的意識性↓革命的敗北主義による政治的階級形成へ至った。

革命戦略において、共産同七大会路線は、旧革通一マル戦系、先進国危機論、に対して、世界同時革命を提起し、日共、社民、ソ共、中共、反スタ派の円環を突破する方向を示しつつもその「世界性」が、過渡期世界一帝国主義と分離されて政治過程に力点がおかれ、それ故世界的な階級斗争の昂揚が世界党、世界赤軍による政治意識の均質化への過渡として把握えられるという先験的限界を有していたのである。

現在の赤軍、戦旗、遅れてきた少年フロント主流派等も含めての致命傷は階級斗争の昂揚を、階級の存在様式の転質、エナジーの所在から把握できない事にある。攻撃型階級斗争が、何故に革命的敗北主義へ、レーニン主義の革命的権へ自己完結するのか、その背景は、「進んだ大衆、遅れた党派」と一応旧左翼と異なり自己を相対化しながらも、結局の所党派が政治意識の広がり、戦略の見地から大衆を乗り越えるという旧態依然たる党一大衆把握の限定性に存する。

大衆斗争の昂揚を自己の成熟への鏡として捉ええず、自己の「党派」としての存在を、孤立感を戦略認識により他党派と大衆への差別性へ転化させ閉ざされた「党派」へもたれか

かる事によってしたが救済しえぬ根拠こそ撃たねばならなかったのである。

「階級斗争の新たな自然発生性の質」をめぐる論争の第二口、私たちとマル戦、関西との対立は、それ故過渡期世界論を、危機論や党的立場と捉える部分、旧マル戦、赤軍、野合戦旗派総体と、綱領基軸を階級形成論へおきつつ、それを戦略基軸へ位置づけんとする我々との対立であった。

「綱領一戦略」論争については後に検討するとして、ここで問われていた中心環は、党派が階級斗争に対してとる構え、関わり、評価軸に存した。

a、革通主義一マル戦派
「新たな階級斗争の昂揚」に対して、マル戦派は、それは予測出来たのだと、必然的な根拠を世界危機からの演繹に求めた。赤軍系、それに引きつられた野合戦旗部分は党の立ち遅れを指適し、情勢に対応する、否情勢を先取りしうる主体への転換を主張した。

「党」を先験した階級斗争への関わりが、一方社民との擬似連帯も辞さず政策で勝負するというマル戦系と、革命的敗北主義により大衆に自己否定させる為、党派は孤高(?)を守るべきだという赤軍系と対極を産んだのだ。先に私は、マル戦系と赤軍系は相補関係に在ると言った。

客観主義と主観主義、経済決定論と政治過程論、危機論と立場論という対立は本来的な意味での対立ではない。つまりは理論が理論として自足するという前提の下に、理論を軸にして党派が形成され、理論を媒介して大衆と関わる、そのような理論域想定内部での傾向性、所属感の差でしかないのである。

革通一マル戦系にみられる「政治は政治である」という発想は運動の昂揚期には政治の果実を、結果的效果を獲得物に指定するし、後退期には、戦線を駆け網打ちをしておいて状況を待つという路線に、つまりは党一大衆関係を、統一戦線内の党一他党派関係に転移させ、その領域での政治行為の持続を組織保持の原理へ転化させる。

彼らの場合、革共同の主体性論に対して大衆運動を対置する時、自己が大衆とどう関わっていくかという発想はなく政治は効果である事を反復しているにすぎない。主体を問わないという事は、その領域が無縁だという事ではなくて、科学主義により解決済みの事と前提してしまっているのだ。旧プントの支配的な思想である政治リアリズム論は、主体性論をも利用し尽した革共同(中核派)へ最も正統に伝えられた。革通派一マル戦派へ即ちプント正統派を自称してきた部分は、中核派のように危機アジリと主体、力量形成を交互に使い分けしえぬ故に運動の後退期に、危機を叫び

切る事もしえず、戦線拡大すればする程、主体派に喰われ行く過程は一〇、八前後で象徴的に示された。

戦略の優位性で大衆獲得するという古典的科学主義は、外に対しては戦略を、内に在っては主体性論をというブラグマチスム観念主義の日本の結合に敗退したのである。

b、明大敗北と一向理論

赤軍系の革命的敗北主義は、プントが革共同に対して有していた優位性、観相的主体性論に対し、運動の中から、理論をつかみとるといふ立場を、対権力関係に規制され、つまりは状況からの強制により戦略を結合環とする主体論、政治的主体即ち党形成論へ転化せざるを得なかった結果の一表現である。

明大学費斗争の敗北は、共産同が三派全学連の主流派を政治技術に長じた中核派に追い落される結果を産み、共産同内においては、その後の対立の原型を産んだのである。同内においては、つまり状況便乗主義の松本一古賀(斉藤)連合の一時後退、一気に旧統一系からヘゲモニー奪環を目指したマル戦派、学園拠点斗争の新たな社会的質に固執していた私たちもさることながら、最も象徴的事態は、急進的ジャコバン主義者一向健他、在京関西プントの「レーニン原則主義」というたてまえでの「党」至上主義への反動的回帰であった。

赤軍系理論が形成されてくるつばは、明大斗争敗北一
遁走の二ケ目に存したという事は、一向健自身が最もよく
知悉していると考える。

統一プロント形成過程での、新先駆性論、市民的反戦斗争
組合的労働運動、ポツダム自治会止揚反帝実力斗争等で形
成された私たち（当時の中大プロント、社会学同）と関西プロ
ントとのゆるやかな連合は中大学館勝利（党派↓大衆Mの関
係として）、明大敗北後の三月中大合宿で解体したと私は
考える。

全てのカギは、「倫理主義」が、斗いの退潮期（むしろ
敗北過程）に自己倫理に耐えず、自己を「党」へ増巾し、よ
り倫理を加重する事により自己救済するという方法にある。

「新たな斗いの昂揚」の際には遅れた党派の根拠を問い
返すものとしてあった自己一大家関係、責任意識としての
倫理は、斗いの退潮期には責任意識が激減し、自己否定↓
大衆否定の極限、ニヒリズムを克服せんとする時旧来の自
己、大衆との差別性を新たな自己一党派再生へ二重写しさ
れ表現されたのである。

大衆斗争の敗北から学ぶという時、より「党」へ自己を
のめり込ませて復活するという主体的展開の根拠は、この「
倫理主義」にあり、自己倫理一党の倫理が、観念的に完結
し、自己一大家の社会過程とはいささかも触れえなからず。

実化が横行し、内部矛盾が凝縮してゆくという明大闘争以降
の第二次共産同についての批判は手易い。しかし、現在の八
八派や、「ノンセクト」セクトが批判者の位置に立つ時自
分の井戸につばを吐き、鏡の中の自分を嫌悪しているに過
ぎないという事ははつきりさせておいた方がよい。

第二次プロントがその「運動」主義故に組織論一階級形成
論でロックにのり上げ、親中共派、親ゲバラ赤軍派、
親革マル派、大衆反乱派（親構改）そして私たちを産み落
した事に関しては「反スターリン主義」組織を追究する者
全てにとって、眼を背けてならない事実である。

「党派」の看板を掲げてあらわれるもの全て、何故似た
ような顔付きになるのかについては、喧合風な政治悪論や、
坊ちゃんアナキズムではなくて、「党一大家」論総括の観
点から先に述べた。

ハ、「叛旗一号」のモチーフ

私たちが前述の党内斗争過程でいわゆる叛旗派の立脚点
を形成してゆく過程で、党組織論一階級形成論一共同体論
の検証を行いたい。原理的深化ということではなくて、私
（たち）の理論化へのモチーフ、欲求の質を明らかにし、そ
れが六七年一七〇年へどのような変容を被っているかを検討
した。

組織論一階級形成論が、実践過程で如何ように問われるか

そのような自己完結する「倫理」自体が誤まっているから
だ。

オ、私たちの立場

この時期、私たちは吉本国家論に力点を置きつつ藤本進
治「革命の哲学」を検討し、自立派以降の総括を党組織論
一階級形成論へ結実化させんとしていた。

赤軍系は、明大後私たちへは自立主義一無政府主義と論
難しつつ、革共同との分岐を、主客対象化論、実践一理論
の相互関係として弁明せんとしていた。

私たちは、若干の試食のあと藤本進治に拠りつつ日共一
革共同組織論への対質は原理的に不毛であると結論づけた。
一向の「党」至上主義への転換に触発され藤本進治を
全面的に援用した日向翔の「若ポリ二号論文」が、結局の
所旧プロント山形論文の水準、つまり運動から形成される理
論、組織・党を先駆した上での大衆把握を越えなかった事
にそれは象徴された。

私たちは、明大斗争以降のいわゆる「関西」系（仏派を
除く野合戦旗三派も含む）の「レーニン党」への回帰に対
して、よしとせず階級形成一党形成論への手探りの歩みを
始めた。

戦後や政治路線で結合しえても、組織問題については原
理的に回答しえず、具体過程ではフラク間協定と、既成事

ということは、私たちの綱領一戦略の了解からは、実は「党
派」としての私たちの階級斗争に占める位置を定めると
いう事であり、「党一大家」を止揚する「階級」の成熟度に
制約されているのである。

戦後世界における：からではなくて私たちの世代の歴史的
経験から始めよう。六〇年安保を行為の衝撃 実践内容にお
いて陵賀しえたのは党派のレヴェルにおいて一〇・八羽田で
あり、大衆Mにおいては六八年一杯咲き乱れた全共斗運動で
あった。

羽田斗争が私たちの「国際主義と組織された暴力」の大胆
な主張により、六〇年プロントの世界革命、暴力革命、プロレ
タリア独裁の第三次綱領草案のレヴェルをはるかに越えた、
理論の積み上げによってというより実践的飛躍により越えた
事を知らされたことについては、三上治「羽田斗争の総括」
（三上治論文集所収）以降多く語られてきた。一〇・八前段の
侵略反革命同盟粉砕のプロントのスローガンが、日本参戦国化
反対の中核派や、世界ブル対世界プロの青解に対して正当な世
界認識をもちつつも、素朴実践主義一プラグマチズムの中核
派に大衆斗争のヘゲモニーを吸収された事についての検討も
行なってきた。むしろプロント対中核派の「戦略戦術の党」か
「党の戦略戦術か」の論争が結局△党↓戦略戦術↓大衆▽か
△「党」物神↓大衆▽かの差にすぎず、「党」対「目覚める

べき大衆」という図式内の対立ではないかという視点から私たちは自らの立場を形成してきた。

a、「党・大衆」論批判

一、ブント、中核論争を超えるもの

「戦略戦術の党」論を私たちは以下のように理解していた。六〇年以降の共産同は組織に対して二つの軸を有した。一つは「党か大衆か」に対しての大衆という回答であり、これは自己の存立根拠、価値の置き方である。他の一つは「理論からの組織か、運動からの組織か」に対しての運動からの組織という回答であり、これは組織（形成）論の方法についてである。いわゆる「大衆・運動主義」がその二つの軸を、「党・理論主義」の革共同に浸蝕される過程にセクト化、谷川自立論に典型化される防衛線は「大衆」運動主義であり、政治過程論で戦術重視した関西ブントは大衆「運動」主義をその防衛線としたのである。

「戦略戦術の党」は三派全学連形成過程での実質多数派にも拘らず「統一」ブント故の組織力の弱さが、中核派の官僚政治・技術主義に勝をゆずるといふ事態への反省と、他方政治過程論・三期論・統一戦線ブント路線、運動による連繫主義への固執の産物である。

「戦略戦術の党」は、「党・運動主義」の選択であり、「大衆」運動主義の経験的反省を、政治へゲモニー論と結

合せたものであり、それ故それは容易に「戦略戦術」の大衆への持ち込み、党派斗争「レーニン党」形成へ回帰しえたのである。

私たちは、当時「党・大衆」の枠そのものが問題であるとしつつも、第二次ブントが党への過渡期政治集団であるという限定自体を問い返しえなかった。そして一〇・八総括が深化される過程での、成田、王子、砂川評価↓社会的階級形成↓共同体論から党形成論を提起しながらそれが、第二次共産同で如何ように実現されるかという課題には、党内斗争↓大衆運動へゲモニー形成で、つまり異質な内容を「党・大衆」の枠内で表現したに止まったのである。

b、「政治焦点」闘いのどう評価するか

一〇・八以降の新たな階級斗争の昂揚の質を、私たちは羽田↓防衛庁へ引き継がれてゆく「政治焦点」での闘いと、砂川↓成田、佐世保↓王子↓新宿、中大↓日大↓東大、様々な領域での「拠点」での闘いに見出した。

羽田斗争へ登りつめる道程は、同時に「三派」全学連における熾烈な党派斗争の過程であった。そして、羽田以降↓佐世保↓王子↓成田の六ヶ月が、三派全学連↓反戦青年委員会の解体過程であった事もよく知られていることである。

党派斗争それ自体に疑問をさしはさむ一言居士は三つの

世にも存在するが注目せねばならぬのは「三派」全学連の

ブント、中核、解放+ML、インター、プロ軍ETCの内
部葛藤が、逆に膨大な学生層を中心とした暴力的エネルギーを引き出した事である。「党内斗争が党に新たな生命を吹き込む」といふ事態が、三派間党派斗争で進行した事、それを可能にした条件は政治焦点の形成へ向けた、反帝↓反戦論争を統合しうるかにみえた新たな政治課題の登場と、自治会を中軸とした共同行動の保障であった。

三派全学連では大衆的実力斗争の展開により、日共、革マルへの独自性を保ちつつ、政治焦点をめぐる戦略論争、党派斗争が展開されていった。

三派全学連のデッドロックは次のように表われた。第一に、政治焦点外の就中、学園斗争↓全共斗Mの昂揚を統一して評価する軸を欠落させていたこと。第二に、大衆的実力斗争が「暴力」斗争へ飛躍する過程で、党派と暴力と大衆組織の基本的な関係を把み切れず、実践への対処が先行した「党派軍団」化が、三派全学連そのものを解体させたことである。

一、二の諸関連と、共通項の把握についての弱さは、現在に至るも「八派」のガンになっている中心環である。

「拠点」の闘いが、その形成過程に於いて「政治焦点」の闘いと異質であり、党↓活動家集団↓大衆組織へ浸透して

ゆく政治「宣伝」と異なる政治指導の質が要求されること。

私たちからする党内斗争、党派斗争の提起は、この事に無関心な、全旧新左翼へ向けて「叛旗」一号で為された。

三派全学連が先鞭をつけた階級斗争の暴力的昂揚は、市民社会↓国家の六〇年以降の成熟の質に規定されていた。過渡期世界を語る部分にも、反スタを語る部分にも欠けていたのは、市民社会↓国家の成熟が形成する階級成熟の質への内省であり、そのような「階級」の発現様式の一環へ党がくみ込まれるという事態への無思慮であった。

党内斗争は「社会斗争」の評価をめぐって展開された。私たちは第一に拠点での新たな闘いの質の基底を、旧来の知識人↓大衆の変質、つまり知識人↓国家の、大衆↓市民社会の関りの変質、各々の自足性の解体においた。そのことは同時に、大衆組織↓活動家集団↓党という党形成↓意識形成過程を前提とした、自然発生的斗争↓経済斗争、目的意識的斗争↓政治斗争という硬直した二分法に対しての激動的なつぼ、異質のエネルギーの噴出としての社会斗争の指適をも意味した。

私たちは第二に政治焦点の闘いを「拠点」の闘いと結合させ戦後社会秩序、権力構造総体を転倒せしめる社会力の形成へ向けて「党」はそのプロバターの任務を政治焦点の闘いと全国政治新聞と、非合法軍事の習熟におき、拠点の闘

いは、生活基盤を地域民衆と共に持ち、「政治」的にはなく、社会的に結合した「地区」党のみが、広め深め得ること、「党」における綱領、非合法の準備と、日共や革共同の吸い上げ方式ではない長期射程での「地区」党建設こそが、急務であると主張したのである。

c、「共同体論」の主調は何だったのか

「拠点」での斗争の評価、社会的階級形成論こそはブンド内論争においても、現在の八派状況においても了解されてゐない、否「党派」が古い皮ごころを愛する限りは了解されえない主調である。

一〇・二一防衛斗争へ向けての論争過程は、それ以降の事態の鏡である。米タン、基地斗争等を反米斗争と規定し、反米斗争＝防衛斗争として一国主義を堅持した一向健、新宿斗争を「レールはがし」とやゆし、だまされた大衆はよしのだ、指導した党派が悪いのだと革マル風の大家への善意を表明した日向翔がおり一〇・一〇集会での中核新宿方針提起による統一戦線解体に、党派の立ち遅れと合法斗争でのヘゲモニー獲得に躍起となっていたのは松本礼二であった。

私たちは、三多摩における細谷加工、砂川、米タン、反軍斗争の蓄積の中から、「防衛斗争」と基地、反軍、反合法斗争集約としての「新宿斗争」との統一した把握こそが必要であった。

何故階級形成をするのか？について旧来の革命論からは結論は出ない。革命をやる権力奪取する↓党が要するという文脈には「階級」は党が代行する基盤でしか扱えられない。生活苦↓対企業主斗争↓組合が要するという文脈からは、組合員＝階級成員という短絡がある。

階級形成を考える困難さは、一つは「革命」のイメージに規制されるという事であり、他の一つは「党」と不可分な関係にあるという事である。

革命を、一国社会主義やプロ独で考える者はもとより、世界革命として先験する部分も含めて、現在扱えられている「政治」概念の延長で、政治革命と扱える部分についても「階級形成」は無縁である。そこでは、日共風に階級＝党代表者と擬制されるか、革マル風に党成員＝階級とされるかにすぎない。

私たちが想定しうる革命が、政治革命であるという事と、政治革命即革命という事とは別である。権力奪取の射程での政治革命においては、啓蒙主義であれロマン主義であれ、つまり党を階級の延長と考えるのであれ、意識的障壁を設けようと、人民の頭脳「党」と啓蒙されるべき「大衆」という構図を避けられない。私たちは、これを、政治的階級形成における党の自然成長性と呼んだ。

又、レーニンが定式化した、自然発生的な経済的諸要求

ると主張しつつも、党内論争の成熟度に規定され、政治局、書記局経由の「方針」を、学生、地区代、レヴェルで反撃しえず、別方針貫徹不能の判断の下統一方針を貫徹したのであった。

政治焦点＝拠点の階級形成の観点からの「了解」の主張は、地区党の独立ブント化に対する「軍事」のつきつけの過程で、機関進駐か機関空洞化か、党内ヘゲモニー獲得か分派別党かという組織路線の選択、創出として具体化を要求されたのである。

私たちは、六八年一〇月二日以降顕在化した党内斗争において、論争を論争として展開しながらも、組織形成に関しては経験的、外在的に関らざるを得なかった事を深く省みねばならない。しかし、「機関」ゼロからの、地区を基盤にしての歩みが、一つの「政治同盟」に関する仕方としては、自分たちが党を創るという了解、限定も含めて半ば必然的な過程であった事も押えておかねばならない。

ともかく、六〇年後敗けに敗け続けた自立派が、「党派」を創るという困難な業は、理論の整合性や、仲間意識を越えて、試行錯誤的にしか進みえなかったのである。

d、「社会的」階級論

何故、社会的階級形成なのか。問題は二つである。「社会的」と「階級形成」と。まず階級形成について考えてみる。

を獲得する闘争、即自的な労働者の団結体としての組合」は市民社会＝国家の成熟により、特にドイツ市民の帝国主義への積極的屈服と、コミンテルン愛国主義のアメリカ国独政策への妥協、それらの総合的完成としての戦後世界構造の中で大いに変質を遂げた。

仏、伊の風な労働者運動の気風を有す国を例外として、与えられた米国式民主主義を受容した先進国労働者は、生産力増強と作られる欲望の円環内で自足し、労働者国家群は、自由陣営への遅れへ、利潤率導入をニンジンとして対抗軸を形成し、後進国は、選ばれた者は軍へ、貧民層が買弁資本下へと構造化され、日本基幹プロレタリアートに典型化される、下層への差別感と、消費文明のピエロとして、「労組として」の任務の不在、階級意識の欠落、混在化、緩衝装置としての核家族、夜昼論へ吸引されてゆくのである。

収入諸源泉の差にもとづく、階級としてのプロレタリアート（私たちはこれを経済的階級と呼称している）は実在するが、帝国主義下の労働貴族、特に日本の丸抱え従業員組合、第三次産業の増大の中では、何の意味も為さない。つまり、経済的階級と革命的プロレタリアートを等号ではつなぎえない。

私たちは、革命的プロレタリアートをイメージする時、

政治的階級概念（階級意識論）を導入して経済的階級を切り捨てるか、ブランキ風の下層プロレタリア像を、犯罪者、在日外国人、非定着ルンプロに原像化する他に、術はあるかという地点に立っているのである。

「階級」形成を把える場合の、より深い困難さは、生命や、運動を学問に翻訳する障害に酷似している。つまり、一つの人間層総体へ階級概念を付加するという事と、個々の成員が自己をどう把えているかという事と、概念づける他との相関が問われる。いい変えれば、総体としての存在思想と個々の主体思想とのからみが問われるのだ。

その見地からは経済的プロレタリアートは、事実を概念といいかせている大だし、政治的プロレタリアートは、意識的主体を概念へ接近すべきものとして把えているにすぎない。経済プロ↓政治プロの発想の根源は、即自プロ↓向自プロというヘーゲルの悪読み、意識化Ⅱ主体化という、言語の二重性にも感知しえぬオプティスムである。しかし、ここで問われるのはその批判でなくて、存在思想、主体意識総体を表現しうるプロレタリアートとは何か、「階級」とは何かである。

階級が形成されるという事は、「階級」が所与のものとしてはない事を前提している。つまり「あらゆる歴史は階級斗争の歴史である」（宣言）という叙述での「階級」と、

を問わぬ戦革集団）、大衆の生活防衛、即自としての経済的プロレタリアート、双方の自足性が解体する時点でそれは問われる。帝国主義からする階級形成即、既成階層秩序分解に対して、実践体としての「階級」が問われるのである。

第二にそれは、「最後の階級」即ち止揚されゆく階級である。一国↓世界の空間の拡がりの中で、一国プロ独↓世界プロ独を把える者は、遂に二段階か一段階かのスターリン、トロツキー論争の土俵を脱し得ない。「世界プロ独」が古典マルクス主義に対して有する画期性は実に、世界プロ独が「人類史」へのとばぐちである事への了解にある。プロレタリア独裁が、「プロレタリア」の衣を脱ぎ、「独裁を自己統治へ転化する歩みこそが、個的共同体的、主体意識、所有獲得の総過程なのだ。

第三に「社会的階級」形成は、「関係の革命」過程である。つまり知識層の幻想的共同性としての国家への、大衆の生活―社会過程を包摂するものとしての市民社会への関りの自足性の解体を前提し、その再編過程である。

知識層が、市民社会からゆさぶりをかけられることは、国家に対する反国家や、アカデミア幻想、理論信仰の解体を観念的交通手段を媒介しての意識の自足性、あるいは諦念を背景にした知性―感性の不安定な均衡の崩壊を根拠と

「収入諸源泉になにかがプラスされる」（資本論）されたものとしての「階級」とは概念領域が異なるのである。このことのつきつめなくして「最後の階級としてのプロレタリアート」は了解しえぬのである。

階級形成は、経済的階級、つまり階級構造の学的認識からも、政治的階級への、プロレタリアからプロレタリアートへの脱皮、党からする階級意識形成からも導き出しえぬ。

所与のものとしての「階級」は、経済的階級としては、組織化、非組織化含めてホワイトカラーに席捲されつつある賃労働者であり、政治的階級としては、ブルジョワ政党内対する議会内反対党、既成左翼であり、三派の突出がその牙をぬかれてゆるやかに手を結び左翼反対派へ転落寸前の八派連合である。

「階級形成」はかくして、その契機を、経済的階級、政治的階級におきつつも、階級は「在る」ものでなくして、「創る」ものであるという結論を導く。

II 「階級」は創るものである

創られる階級こそが「社会的階級」である。「社会的階級」という事を私たちは次のように考えている。第一に「創られる」ものである。即ち、国家―市民社会円環内での知識人の政治的プロレタリアート志向（出身階級、階層

している。自己と小共同性、論壇、文壇、象牙の塔の緊密感の低下は、知性への疑義を感性への傾斜へ任せ、自然生的に自己をゆだねるか、意識のオートマチスム自己救済へ至るかを結果する。つまり、「幻想」の小共同性を解体し、知性にとっては「不安」を行為の共同性へ移住するか、小共同性を縮小再生産するか、どのみち旧来の時間度、空間度での「関係」は自然的に再編される。

大衆の国家との関わりは、上げ底された知的大衆の自然過程として現出している。そこへ押し出す圧力は、自然的生活の、前共同的団結や、私生活民主主義の、国家からする生産力思想―欲求創出、消費文化への敗退である。

大衆の自然的な「関係」の変質は、膨大な知的大衆、情報社会の基盤成立と、他方小共同性の企業別、転種別、肩ふれあう同志の仲間意識へ薄められた関係への固執である。

「社会的階級」への具体的関りは、「関係の革命」へのモデルタイプは、左翼を含めてこれまでの政治、生活思潮が人間の思想―存在の総体を問いえなかった事からして、未知の領域である。否、定式化しえない領域だといった方が正確である。

「関係の革命」への衝動は、知識層においては、山岸会、キブツ、部族 M の興隆として、大衆においては諸新興

宗教、念力への帰依として何い知る事ができる。

しかし、私たちは、これらの一見生活への、共同体への欲求の爆発と自賛している諸運動の背景が、「覚めた自意識を、あるべき共同性へおしこめる」最も意識的な傾きをもつこと、即ち「生活」「共同体」の復括が、日常に対する「非日常」として考え、実践されている事に注目せねばならぬ。

「関係の革命」を欲するなら「けいもう」を止めよ、自らのエネルギーが周辺を火傷さすような吸引力ある、主体、組織、運動を形成せよ。これは私たちの自戒であると共に、米イッピーの末路や、新しき村の復古版や、諸近代化宗教への訣別の辞である。

私たちは、創るものとしての「社会的階級」を、経済的階級、政治的階級論の質の転化を考慮しない、自己反省なき自然成長性への拝跪と異なり、又、概念を獲得さるべき者として天上へ押し上げてしまふ、欠食児童の待機論とも異なり、思想一存在総体の即ち現実の止揚の諸過程と方向を明らかにするものとして規定したのである。

三、「叛旗一号」の限定性

以上の、史的過程を経て形成されてきた私たちの立脚点「叛旗一号」は、六八年における情勢に規制されてより、私たちの理論一運動の広さと深さにおいて、以下の限定をも、

中央機関に別の領域の存在を認識させるということ、私たちにあっては、蓄積を待ちつつ、のんびりとやる他、方法がなかったのである。

私たちに對する「社会革命」主義、思想主義という批判は、綱領的課題を直ちに戦略内容に翻訳せんとする批判者の世界の狭さに由来している。しかし、地区党主義、大衆運動主義という批判は私たちの形成条件(力量)を考慮に入ればあつてないこともない。しかし、私たちは「下から党を創りかえる」なぞと夢想するほどのオブティミストではなく、むしろ「本音を吐くことは、分派、別党へ発展する」という想いと、「今まだ本音は、政治的に熟してゐない」という自己判断との矛盾をもて余してゐたといつてよい。

「党組織論」を「論争」すること馬鹿な事はないと私は考えていた。それは、党を先験する部分にとつては、自戒や反省材料を出す、運動の必要性から出発する部分にとつては、自己の地歩形成から手を抜いて党派動向に一喜一憂する結果を招かすに過ぎないからだ。

私たちは党派に属しつつ、党派、理論の先験性の解体と、ぶわーとした綱領領域での政治焦点一拠点の斗いの担い手としての了解を目指してゐたといえようか。

この件については、「綱領問題」が粗上にのぼつて以降、私たちのフラクより分派への飛躍と呼応して党内論争一組織

有してゐた。

イ、「地区委」運動の波及力と党的制約

まず第一は、「共同体論」展開方法の不充分性である。私たちは、革命運動における最も本質的なものを個的・共同的主体、意識、所有の獲得、社会的階級形成に、つまり現実を止揚すること、人間が変わることにゐた。しかし、私たちは、その綱領的内容をプリント内でいち早くつかみとりながらも、その具体化の契機を非合法党、インテリプリント、大衆プリントの協働としてイメージするに留めてしまった。私たちは防衛庁か米タンか反合理化かという戦略論争はなやかな中で、三派十aが考えている「党派へオルグする」以外の仕方で自己表現している、階級斗争の新たな質に着目していた。私たちは自らを三派の側に置きつつ、政治焦点一拠点の「媒介」たらんとしていた。綱領的内容の展開方法の不充分性とは、一地区委が為しうる「媒介」の限界であつた。

私たちに、「現場」に徹底して拘らわることによるその運動の波及力によってしか「共同体論」的発想、展開は了解されえないだろうという既成党派への開き直りがあつた。

一方、そのことは党内論争、政治路線をめぐつては、「政治焦点一拠点」の全運動のトータルな把握(認識)を要求するに止まつた。

「異なる土俵」の論争を、党内的に展開する時、それは中

(党)建設として具体化されたのであつた。

ロ、共同体論と全共斗運動

第二に、私たちは宣伝を媒介した理論の波及と、行為が有す衝撃力の差を了解しつつも、党一衆論を止揚する「階級」の交通形態、発現様式をトータルに、イメージしえなかつた。上述の党内左翼反対派の応と、現場主義という私たちのスタイルは、フラク内部においては行為の共同性を媒介にした結合、対外的には理論による共同性の波及という交通形態を産み出した。

一〇・八羽田以降六八年一六九年の全共斗、反戦運動の昂揚と私たちの「党派」としての登場は実に見事に符号していた。そこで、私たちは「書かれてある」内容の一段奥で、容量を喰ひ破るエネルギーの密度で「階級」への手ごたえを了解せんとしたが、他面「叛旗」はそれに数倍する自己の斗いの意味づけを求めるノンセクト、サークル「指導者」に利用され始めたのである。

私たちが斗いの初発力を問ひ、自己史より学んだ斗いへ立ち向かう根拠の確認が、全共斗運動の「総括」に、既成党派運動を止揚する足がかりとして着目されたという矛盾である。

私たちが把えていた「行為の共同性」は、その△了解V軸が、「経験」主義の枠を突破しえないが故に、一方で「何故プリントなのか」への小共同性を支えると共に、逆により広汎

な領域で「行為の共同性」の理論として読まれ、伝播していったのである。

党とインテリブントと大衆ブントへ架けた私たちの橋は、党ではない、大衆ではない「階級」だという時、感性と意識へ分解したのである。

党派にある私たちは「書きことば」のそのうらの大衆像と心中せんと希み、全共斗、反戦は「書きことば」の世界の緻密化を、現象的に強い党派を希むという逆転がそれである。

情況派といわれる部分は、この時点で、私たちの「苦悶」を了解しえなかったつまり私たちが「書かなかった」領域で私たちと最も隔ったのである。

ハ、「情況派」問題の自己批判的総括

「情況派」は、ブントを統一戦線党として位置づけ、党派間統一戦線のつまり、外からの圧力により党内へゲモニーを獲得せんとする部分と、斗いへ関わる根拠を堀り下げもせず、反乱大衆像を作り上げ、全共斗運動に全面迎合するふりをして「知的大衆化」への道をはき清めた部分との結合であった。

つまりは、党派のレベルにおいても、大衆運動の抱え方についても、私たちを楯にしつつ、その影として振舞わんとしたのである。

情況派にとっての私たちとの野合の根拠は、元々レーニン主義者の

なのだ。

情況派は、古い皮袋と古い頭脳に、「ノンセクト」を抱え込まんとして敗退した。彼らには、八派の系列外の膨大な「ノンセクト」が正しい党派がないが故に低い政治意識に停まっていると見えたのである。情況派の「反乱大衆」がその実は、全共斗運動のもえかすであり、しかも自らは「ノンセクト」セクトとして振舞いつつも、何の責任も持たず、知的関心のみ旺盛で、「意味」付与してのちゲバルトに関わるという、夢破れし党派くずれやくずれ左翼に過ぎなかった事は、大々的な『情況』誌のキャンペーンと手の内の残の差をみてみればわかることである。

「反乱大衆」と共に情況派が、新左翼批判をやる時、彼らにはボス交による党派の離合集散を前提にして、総括の季節に、時至って一旗挙げようというさもしい根性しかなかったと思われる。

「叛旗一号」の政治焦点と拠点の「運動」の相互了解とは、当面党派は政治焦点の斗いへ全力を賭け、大衆組織では自己の地歩へ踏み止まって新たな運動を構築する相互関係としてイメージされた。しかし「階級」形成への方向の不鮮明さと、「了解」の了解の差故に、「共同体論」を理論の共同性思想として利用する情況派的政治技術主義と、理論の共同性を深究する「反乱大衆」の「思想へのフアエティシズム」を登場させ、か

先地回復への雌伏と、大衆組織の味方のふりをして計算高く浮上のチャンスを狙っている「情況主義者の八派を越える

「第九派」への共同利害に存したのであると考える。

それ故、レーニン主義と私たち大衆運動主義者との結合は、当初「党派」の玄人と、「大衆組織」の玄人とが経験交換し、その意味で利用し合うという段階で生き生きとした「野合」であったが、それ故いざ結集基準を明瞭化する過程で技術的結合へ転化せざるを得なかったのである。

私たちは、赤軍派との分派斗争過程でのその情況と凝縮された「政治」のエッセンスの吸収により、つまり自らが最も分の悪い党機関を引き受けざるをえない段階で、平時の統一戦線部「レーニン主義」主義者を不要とするに至った。

情況派は、『叛旗』を一応結集基軸と定めながらも、「政治」論文は了解しうるとしつつも、「共同体論」へは一切関係しえなかったのである。彼らは私たちへ「思想主義」「自立主義」と批判しつつもその「思想」の吸引力を、自らの政治主義の反面教師とすることなく、どうやって「政治化」党派化「するかにのみ、つまりカードルづくりに腐心していたのである。彼らが、セクト第九派となる事を拒否する私たち（自立派）を路線修正も限界にきている共労党や、尻をかかすのを忘れていた陰謀屋広松渉なぞと、パージを謀り、「反乱」大衆にのっかって大右派ブント形成を夢想したも当然のこと

つ識別しえなかったのである。

私たちは、「叛旗一号」が「理論の共同性」として私たちの意図に拘らずふるまう事を、苦々しく思いながらも、斃れたものと連帯するための全戦線での蓄積に追われ、はっきりいえばかくもすみやかな「知的大衆化」を阻止しえず逆に進め越された、組織化のつまり「行為の共同性」のエネルギーの方向を示しえなかったのである。

四、「四号」党内斗争宣言」が目指したもの

「叛旗四号」は、上述の「叛旗一号」の限定性を、理論的補修というよりむしろ、実践の要請に回答すべく、その継承と飛躍として文章化されたものであった。

私（たち）が展開した「階級の発現様式としての組織構造把握」「行為の共同性が暴力の階級性を基礎づける」等の主張については、の誤解や曲解には驚かされた。私たちは綱領問題については一歩もゆずらぬこと、私たちの綱領とは党派の私有意識の水準にはなくて人類史への文化の水準度で画られることを宣言して、党内論争への歩みを進めた。

「叛旗四号」について、野合戦線派は、「叛旗一号」よりの「のりうつり」であるとして一号の撤回を要求した。

情況派は、秋期斗争は政治的敗北であり、これを軍事的敗北と総括するのは軍事至上主義であるとし、「党一軍一統

戦線」論は、戦旗派への屈伏である。叛旗一、二、三号は認めが四号は支持しない、陰口をたたいた。

以上の戦旗、情況の私たちへの対応こそは彼らの鏡であった。彼らは最も互に隔っているとみえて、実は私たちの提起した領域への無知の両端を示していたにすぎないのであった。

戦旗派と情況派が、いかに「軍事を組織する党」や「大衆反乱の時代」を語ろうとも、彼らは古い「党一衆」論の、階級意識形成論のカテゴリの中で、新たな装いを競っているにすぎないことは、私たちがつとに指摘してきたことである。（「叛旗五号」参照）

戦旗派が、党の同心円の拡大を、情況派が反乱大衆へのヘゲモニーを「階級形成」だと錯覚する事において、六〇年安保後の革マルと構改派の七〇年型スタイルを私たちに示唆し、それ故私たちは「党一衆」運動、組織構造の止揚こそが、七〇年代階級斗争の鍵であることを、八派「ノンセクト」セクト解体として六〇年代党派への訣別「戦斗宣言」として主張してきたのである。

戦旗派、情況派は、私たちの社会的「階級形成」論を、つまりは「叛旗一号」をついに了解しえなかった。

党一衆組織総体を刺し貫ぬく「行為の共同性」を政治焦点一社会拠点の主戦場を異にする両者の「了解」内容として、つまりは「理論の共同性」の枠内で舌たらずにしか提起しえ

なかった「叛旗一号」の組織的、実践的限定が、善意にして無知な戦旗、情況その他の「解釈」を許したのである。イ、六九年「秋」が要求した共同体論の具体化

「叛旗四号」の行為の共同性、暴力の階級性、階級の歴史的発現様式としての党一軍一統一戦線理解等は、書齋での理論探究深化の側からでなくて、政治斗争の実践の場から産まれたと先に述べた。

「四号」へ私たちが結論づけてゆく経過は、六九年一〇月、一月斗争とその総括過程へ集中していた。そこへ私たちがつき動かされた「実践の要請」は、二つの側面から頭われた。

第一は、いうまでもなく、赤軍一中間派一叛旗の党内斗争の激化、秋期斗争直前でのB.L.I. 叛旗の首都における三分解がもたらした事実上の党機関の機能停止である。このことは必然的に、機関多数派B.L.I.の凋落と、学生層を吸引しえない仏派の玉砕論と拠点防衛への分解へ結果し私たちの準備如何に拘らず学生、地区多数派の私たちが現場のみならず指導の責任も掌握することになった。

第二は、一〇・八一六九年四・二八に至る過程での「政治焦点」における党派の、六八年東大、日大一六九年夏大学立法に至る「社会拠点」における全共斗、反戦、市民団体等の、六〇年代「党一衆」運動の飛躍と敗北の総括が要求する六九年秋の主体的任務であった。

a、「たそがれのブント」を救出せよ

第一のブント内党内斗争一党内斗争の激化は、赤軍派への評価の分解から、関西ブントの、ひいては第二次、第一次ブントの総括論争へ枠組みは広がつつも、大衆組織へまでフラク問対立と、論争のための論争による機関形骸化フラク問調整機関化した政治局という代償を払いつつも、私たちが意図していた「綱領」論争のはるか手前の水準を円環していた。私たちが「叛旗一号」へ至る過程で、赤軍系その金魚のふんとしての野合派へ中核や構改に較べて相対的にいい位だと理論的見切りをつけた時点よりは遅く、組織的、機関統率力準備からいえば早く、党内斗争を「別方針」も辞さず遂行しきる決意をしたのは将に六九年一〇月二一日の完庫なきまでの敗北の総括に拠ってであった。六八年一〇月二一日の「あこがれのブント」は六九年一月二一日には「たそがれのブント」に転落してしまっただけで、組織体としては第二次ブントは落ちる所まで落ちたのである。

私たちは何とかブントの伝統を守ろう、一月斗争を一緒にやるうという野合戦旗派の、一見美しくロマン主義へ表現される背景が、実は大義名分や看板をかついで「現実の敗北」を「幻想の党」へすりかえる、六〇年代カンパニア党形成を一步も越えぬことを了知した。そして、一方情

況派にみられる「統一戦線の合法的ヘゲモニー」で党を作る発想、自ら手を下さずボス交と根廻しによる勢力拡張を夢みる傾向へは、きりと訣別を表明したのである。

赤軍派は、攻撃型階級斗争論にみあって、まことに珍奇な位置づけであれ、攻撃的分派斗争を展開した。野合戦旗派は赤軍派へ内容批判でなくて組織無政府主義のレッテルはりをしをかえなかった故に、論争はともかくまず組織防衛という形でいわば受動的に「綱領」論争へ接近したのである。私たちが、赤軍批判を、赤軍系批判として、否六〇年代左翼の理論発想の根底、宇野、黒寛、対馬+先進国革命主義の批判として展開しつつ、公開綱領論争を野合戦旗派へつきつけたのである。

「過渡期世界論」は、情勢分析であるか、党的立場の問題であるかという野合戦旗派内分裂に対し、私たちはそのような情勢分析→戦略戦術、認識主体としての党という発想そのものが打破されねばならず、綱領の基軸を階級形成論、戦略の基軸を過渡期世界論という綱領一戦略確定の共通の「土俵」を定めることから着手せよと主張した。（叛旗三号等参照）

党内論争が綱領論争へ煮つまっていく過程は、私たちに於いては「叛旗一―三号」をとりわけ一号階級形成論（共同体論へ！）と三号過渡期世界論を運動、組織的表現とし

定着化すること、つまり戦旗派との分化の鮮明化の過程であり、野合派にとっては「赤軍ショック」以降のフラク連合化を、「批判の自由と行動の統一」のたてまえにはめこむことにより、形成過程の党（創るのは世界党だよ！）を物神化する過程であった。プラグマチスム情況派部分にかかる綱領論争へ一切とりくめず、政治的言辭を吐くことが「政治的」であるという古い政治観を他党派とのオールドポリシエヴィキ達とぐちっていたにすぎない。

「叛旗四号」時の党内論争の性格は、かくして全新左翼―大衆組織に対して綱領―戦略の基軸を確定する事により六〇年代までの「党―大衆」運動、組織構造を止揚せよという私たちと、「政治」の相対的位置がみえず、それ故武装、軍事の階級性がわからず、軍事へ回答せねばならぬという焦りと、俺が俺がという階級意識形成論（党への意識的上昇）を党↓軍↓統一戦線へ接ぎ木した野合戦旗派との対立であった。そして、私たちがからする諸君が了解する与否に拘らず包摂されている広い戦場へ私たちは進撃する。諸君が旧い党と政治路線を保守するならば諸君は味方のおをした敵であるという宣言でもあった。

戦旗派は、一〇月二日の敗北を、赤軍へこびを売りつつ「党」物神で自己を区別けするという旧い組織体質の敗北として抱えぬ故斗争前のフラク連合が、斗争後再分解

一〇・一一斗争を野合戦旗派は軍事的敗北と総括し、情況派は政治的敗北と総括した、私たちが軍事的、かつ政治的敗北であり、その根底は六〇年代の政治思想「党―大衆」運動、組織構造自体にあるとした。

何のことはなく、戦旗派は「強い党と軍」がなかったからだといひ、その責任をR日批判の立場にたつた私たちと関西政治過程論的党形成へ転化したのである。情況派はウルトラをやれば大衆がはなれるという直観から、合法的統一戦線内政治へゲモニー持続をかたつたにすぎない。

戦旗派の一一月への関りは、それ故「一〇月でやりきれなかったこと」をその根拠から点検することなく、ブントの汚名返上の危機意識を、強い党づくりへすりかえんとしたにすぎない。

情況派の一一月への関わりは、統一戦線が解体し、ボス交と根回し政治が何の有効性を持ちえない一〇月二一日後において、「一一月をやりすこす」ことを決め、否「一一月をやるう」と私たちが呼びかけても、皆心は「一一月の後」へ向いているが故に「やりすこさざる」を得なかったのである。

私たちがと彼らの決定的分岐はここに全面化したのであった。

私たちの一一月への関わりは、戦旗―情況を典型とする

してくるという事態に「党」物神化で耐ええずその自然発生的疑心暗鬼が党への忠誠↓共同行動という倒錯を産んだのである。

野合派は結局、「軍事の提起がなぜ党の革命を要求するのか」「組織問題がなぜ綱領論争帰結するか」を了解しえなかった。（今に至るまでそうである）

彼らは、党形成―階級意識形成の、レーニン型宣伝の党作りの枠内で、「軍事」を目的意識性、党への忠誠でしか考えられなかったのである。（四号参照、後で議展開）

b、七〇年代への水路を拓くこと

第二の、政治焦点―拠点、双方における六七年以降の階級斗争の昂揚と敗北を越える「たたかろ」をめざし、私たちは全力を賭して二月斗争をやり切った。

しかし、私たちが「やれる丈やった」ということと、七〇年代階級斗争の水路が切り拓かれたかという事とは別物である。

私たちを含めて、全新左翼―全共斗、反戦はその主体的任務を貫徹しえなかった。一〇月斗争の総括に踏まえた一一月斗争は、七〇年代の課題をいかにつまみつつ、しかも私たちの弱点をもろにえぐり出して敗北したのである。

ロ、軍事は「党―大衆」止揚から始まる

a、戦旗、情況との非和解的対立

六〇年代党派への反動的回帰を止揚する米口を、理論―実践においてつかまんとするものであった。

戦旗派における依るべき党の窓から、つまりは政治局から世界を見るという発想が、「軍事」を政治的に強固な意識性の表現として把握する狭さの根拠であることを、情況派における、大衆の（知的大衆にすぎない）政治意識の少し先にニンジンをおさらげることが、党派の任務と感ちがしするごうまんさが、大衆の名をかたつて自ら「政治」を党派間論争ととりまとめに狭めていることの根拠を問うたのである。

軍事的敗北を「党の軍隊」で救済し、又政治的敗北を「政治へゲモニーの回路」で補填せんという時、では政治と軍事の基本関係は何かと問うたのである。

b、政治と軍事の基本関係

私たちの考えは第一に旧い政治の枠に軍事を継ぎ木出来ないこと。第二に「軍事」は日本の革命運動においては帝國主義軍隊への大衆のウルトラナショナリズムに依る参加以外学ぶべき経験を持たぬこと。

第三に日本資本主義の明治初年以降の強蓄積に規定された、知識層の閉鎖性こそが輸入マルクス主義を「知識」に押し止めた根拠であり、大衆組織↓活動家集団↓党という「何をなすべきか」の超歴史化、意識系列としての把握こ

それが知識層の「社会主義」像と民衆の「世界（世間）」像の障壁であったこと。

第四に「軍事」は、理論からか実践からかとか、戦略戦術の党か党の戦略戦術かの「党」活動家集団「大衆組織」を前提しての、何から始めるか、如何にして組織化するかという、カッコつきの「運動、組織論」のはんちゅうを越えていること。「軍事」は、まず実践であるが、理論的認識からあふれ出るものでもなく、なにがなんでも行動だという赤軍的焦り、情念の対象化でもなく、むしろ誰をも通過している日常的行為と、政治や国家の死滅過程、後の階級全人民像とをとり結ぶ橋であり、階級のエナジーの発現、交通様式に支えられることである。

第五に私たちは「軍事」を、暴力の階級性の根拠、「行為の共同性」の視点から把握した。それはとりもなおさず綱領基軸「階級形成論」共同体論へ「軍事」はそれ自体の攻撃性、協働性、社会性において、意識化過程を踏み台にする旧い「政治」より近いということである。

私たちは軍事「政治」を綱領「戦略」の相関で了解した。党派が世界プロ独を志向する時、民衆はナショナルな体験の想起でインターナショナルへ近づくという風に。

私たちは以上の了解のもとに、一月斗争を「戦闘団」として斗いぬいた。

界プロ独の内実であり、そこへ至るナショナルリズムとコスモポリタニズムの止揚の方途であることが忘失されているのだ。

私たちが、綱領「戦略」の位相と水準をおぼろげに体得してきた中で、直観的に了知されていたのは「階級形成論」と「過渡期世界論」のからみこそが、最も重要だし困難であるという事であった。

そして、この困難さは、綱領「戦略」論争の進化と別の方向から、自己を含めての「党」大衆「構造」の極端をつき破る欲求と実践の中から顕在化したのであった。

旧来の「戦略」論争に対する対応は、不鮮明ではあれ党志向へ堵け切った部分が、大衆組織の席を確保しつつ知的上昇する部分を、その断言性と確信と決定の要求によりひきづるという構図をなしていた。

戦旗が、どんな小さなストライキにも世界革命戦争の宣伝をせねば気がすまないというのは、正しい旗印が人民を導びくはずだという、西欧マルクス主義の正統性信仰に拠るオブテイニズムであり、情況が大言壮語を止そうと一応大衆像へ接近するが、決してナショナルなもの、又インターナショナルの萌芽に触れえず、経済的要求を政治化するに腐心するというのがその典型である。

本当は、「佐藤訪米阻止」自体は何の獲得目標でもあり

c、一月斗争をめぐって何を獲得するか

私たちの一月の獲得目標は以下の風であった。

第一に旧来の「戦略」論争の枠を拡げること。自己を相対化しうる「綱領「戦略」」の位相に、佐藤訪米阻止を位置づけること。

第二に「武装」斗争の飛躍、遂行に総力を向け、党「活動家集団」大衆組織の、自己卑下と精進の結合様式を越える新たな組織構造と運動様式を全党派「民衆」に提示すること。

第二の課題を「戦闘団」はその力量で可能限度一杯やり切った。戦旗は茶店指導と私たちへの追隨、情況はその中心部分は一月斗争を放棄した。しかし、問題は第一の課題と第二の課題との関連にあった。

たしかに、私たちは佐藤訪米を阻止しえなかった。蒲田へ進撃したが羽田へまでは行きつけなかった。

しかし、このことを「敗北」として新左翼や、全共斗や自党派の力量不足や他党派の不足をあげつらうことに意味があるだろうか。否である。党派の戦略的主張では、つまり「宣伝」内容においては、昨秋はふるしきを広げる文広げてしまった。アジア革命、極東革命、東アジア革命、日米同時峰起のどれも「世界革命」を射程に入れている今、それらは強調の差でしかない。そこでは最も困難な業は、世

はしない。まず佐藤訪米阻止が安保解体をひき起し、世界革命戦争（極東、革命アジア、東アジア：革命でもよい）の突破口になるという認識の誤りとして、他方民衆が意識化し、党派の政治路線が浸透することを勝利とする「集会」左翼の思い上がりの誤まりとしてそうである。

たとえば、極左が在る故に右派や中間派が存在する。この命題は正しいし、その限りで情況派やべ平連の誤りの根拠をなしている。

しかし、運動の突出力が波及するのはその「行為」自体に根拠をもつのであり、そこではやった本人の党派性意識と、大衆が受けとる印象とは別次元のものである。

党派が為さねばならぬのは、「行為」の意識的背景を説明することではなくて、「行為」の共同体的契機を、最も日常的な生活過程への衝撃として感じさせる、つまり自己をさらすことに他ならない。

つまり「佐藤訪米阻止」をどのような視点、位置づけで闘いかをめぐる党派論争は、旧来の「戦略」概念、カテゴリーにとらわれ、とり込まれている限り、「世の中まるでつまらない」「何か起る」と嗅ぎつけて佐藤なんか知らないが、ともかくボリをやっつけると集まってくる大衆との交通様式、共通話を持ちえぬのである。

「軍事」は、党派の戦略的位置づけをはるかに超えて、

党派、シンパ、大衆組織員、野次馬、総体と、目の前のポリ公を通して権力との対峙状況を形成する、つまり雑多な民衆に階級的契機を提供する交通様式、ことばでない「共通語」なのである。

「叛旗四号」における「叛旗一号」の深化とはかかる状況と、経過で為されてきた。

戦旗の私たちへの批判は、「軍事」が有する裕かな階級性を、再び意識の王としての「党」へ篡奪せんとする試みであり、情況の私たちへの批判は、あたかも民同が反戦青年委員会に追い落されたように、政策や路線の認識が人間を動かせると信じ込んでいる悲劇のポリシエヴィキを演じたに過ぎない。

私たちは、戦旗派（私たちはこれを革共同、日共含めての親スターリン主義的党派すきの典型として考えたいと思う）や情況派（私たちはこれを、共労党、社民、左翼くずれやベ平連右派、「大衆」を持ち上げて喰いものにする知的大衆すきの典型と考えたいと思う）とは、党派として所有する綱領—戦略的時間の射程、自らを含めての「階級」的時間、空間の密度がまるでちがうのだということを、退潮期に何かしら「党」へ帰依したり、自己と似た貌の大衆をさがしたり、日本左翼運動の悪しき伝統、ロマン主義とプ

II章 飛躍の「環」は何か

一、脚下照顧

イ 精神の小商人 小市民を解体せよ！

6月分派以降、私たちは日本の革命運動に対して自ら判断し理論化し、行動するという立場にたった。そのことは、綱領—戦略論争においても、政治的、社会的実践においても全く「自由」であるが故に、全党派—大衆組織、無告の民の政治思想、存在を把ええない限り自らつねに風化の危機にさらされることを意味している。

6月分派以降私たちは党の革命—「党—大衆」運動、組織の止揚、を掲げて全党派—大衆諸組織に対する自己表現を行ってきた。既に八派—「ノンセクト」セクトは、自壊を開始した。私たちの「創造の前の破壊」は、形態だけ、結果だけみれば見通しどおりすすんでいるといえる。

しかし、「八派—全共闘、反戦」が、私たちが提起したその風化の根拠を剔出することなく、自ら組織維持を希いつつ逆に実態はより形骸化するという意味で事態はより深刻なのである。

a 諸党派—全共闘、反戦の窮状

革マル派は海老原事件をめぐる中核の後退に乗じて、IOU造反分子をも自己批判させ、八派の成果をかすめんとしたが、足下の早大で身動きできなくなってきた。

中核派は、戦闘的第二社民部隊としての反戦部分を中心に、

ラグマチスムの相互交替のレヴェルをはるかに越えたいし、越えんとしているのだと断言しておきたい。

何度も、同じ部所をかみしめて総括するというのは、党派の頭のすげかえはそれを支持するかにみえる「系」を解体する以外ないことを熟知する故である。

私たちは私たちの現段階の極端と課題を検討するためにその前提を幾度でもそしやくせねばなるまい。

我が道を行くとはそういう事だ。

いかにして学生層の凋落を補てんし、組織維持するかに、ステッカー貼りシコシコ路線で耐えてゆかんとしている。

戦旗派は、対「叛旗」一枚岩団結のためまえの下から、野合の本質を露呈させ、理論戦線 神奈川、関西、仏派が、主要に理論戦線—神奈川対立を軸に四つどもえの分派闘争に入り、八中委流会、「戦旗」の理論戦線私有化、十大会の見通しは一切たためぬ醜状である。

情況派は、明大生田等川崎地区を除いて全て解体。SSL全都協なるデッチ上げ組織は北部においても、中部においても有名無実である。大阪経大部分は叛旗正統派を名乗るというハレンチさである。

解放派からは、滝口理論批判を軸に早大支部を中心に「甦える不死鳥」派が形成された。親社民派と学生自立派の対立は「機関」が組織的解決手段を有たぬまま顕在、拡大している。

ML派は、親中共派へ9割方吸収された。学生解放戦線は火焰ン世代に利用され、捨てられた訳である。

フロントは、機関—マイクロ戦旗派系と早大系への分岐を開始した。

共労党（プロ学同）は、党派といえぬザル組織だが、いいだも、樋口等「情況」追随派とベ平連上がりの学生部分の落差

はより拡大している。

社労同（共学同）は、松本礼二等と右派連合を夢想した中村丈夫除名後も、分派闘争が持続している。

四トロは、経験主義のまじめさで数は増えたが、関西―関東―東北差をみれば、全国組織の体をなしていない。

プロ軍、前衛派も各々分派闘争は顕在化している。

全国全共闘、全国反戦は、以上の八派十a状況に規定され、その自立的回転能力を全く喪失している。新左翼統一戦線機関としての最低限の機能も、入管闘や「カンパニア集会」のための中核―解放交渉に任せきりであり、「全共闘」「反戦」は統一カンパニアと平和デモの見学連集の「看板」になり下っている。

現在の全共闘、反戦路線では、メモ事処理役や、第九派を目指す者を吸引しえても、個別全共闘、職場、地区反戦再生の展望は一切なし。

b、「八派―全共闘」のどこがだめなのか。

私たちは、全国全共闘、全国反戦の任務は十一月二十二日で最後の尽きたと考える。しかるに、昨年十一月闘争後がそうであったように、「全共闘」「反戦」の看板を必要とするのは、八派十aの不可思議な連合である。そして、現在の八派十a内部の党内―分派闘争の統発が見る所二、三を除いて「八派」への市民権争いと、第九派としての割り込みによる「全共闘」「反

戦」への寄生をしか結果しないという誰にもわかる不幸な事態こそが問題なのだ。

八派―全共闘―反戦、ノンセクトのもたれ合い「構造」をこそ私たちは問いつめたのであり、八派が十五派になり、中核系全共闘や、ノンセクト連合が出来ようと、「党―大衆」運動、組織構造を、党―活動家集団―大衆家組織という秩序意識、身にしみた発想から解体せねば、依然として「七〇年代」の扉は開かれぬのだ。

私たちは、「党―大衆」止場の主張が、八派全共闘反戦の現状と形態は自ずと似てくるが、その心は一切通い合わぬという時点にたっている。

私たちは「党―大衆」運動、組織の止場に関して言葉を了解しても意味が通じず、新たな運動を創出する準備期であるという現時点において、旧来の「理論の共有性」、「行為の共同性」個々の限定をわかった上で互いをかみ合わせ、別の質へ転化させる新たな交通様式、組織形態を發明、実践、創出せねばならぬ事をつくづく思い知らされた。そして、そのことは、ようやく八階級を創るV門口に、私たちが、そして自壊を認めようとならない八派―全共闘反戦が、たどりついたということなのだ。

c、困難は「次は何か」にある。

「私たちは六月十一日をもって野合戦旗派、状況主義情況派と訣別した。そのことは綱領―戦略問題について、軍事問題に大衆化の壁にはばまれるように「行為の共同性」を暴力の軍事への飛躍としてさし示さんとした私たちは、今度は「行為の共同性」の持続力について、組織内関係構造について回答を迫られてきたのである。

私たちは「理論の共同性」の自己主張を綱領―戦略論争、党派闘争として展開してきた。そのレヴェルでは、硬直した日共、革共同、中共を除いて他党派への何がしかの影響力を為したことは歴然としている。しかし、党派が自壊する根拠は、自己を含めての合法カンパニア集会、デモ、大衆武装闘争という六〇年代新左翼運動の水準を為した全共闘、反戦の風化に、足をすくわれ、自己の存立基盤を見失っていることに基いているのである。

十一月闘争への過程で私たちは、「行為の共同性」を暴力の飛躍として扱えた。運動の退潮期において、その八階級性Vの検証こそが問われているのだ。

現局面における私たちの側からの「行為の共同性」提起、軍事展開は、やらざる八派への実践的批判たりえても、全共闘反戦のエナジーの低減に対しては、復古趣味か、第九党派への上昇しかもたらしえないという事こそが問われる。赤軍派は、「軍事」についてよく心がけているが、ここがわからぬから「敗北を認めない」という新手的ロマン主義へ至るのである。「行為の共同性」の共同体的契機は何か、その持続力、組織表

ついで、ブントを「内から変えてゆく」という路線を最大限追及（情況派は放棄したが）しながらもその事が遂に私たちにとっての桎梏になるに至った事を示している。私たちはブント内他フラクからもはや学ぶべきものが何もない。連合ブントへ執着すればするほど自らが腐ってゆく事態を透察し、マル戦や情況の逃亡路線や泣きを入れたが追い出された赤軍のようにではなく、「第二次ブント」を丁重に葬り、我が道を進まんとしたのである。

旧来の運動と組織の理解からすれば、「党―大衆」運動、組織構造の止揚を揚げて分派した私たちは、八派や全共闘、反戦に見向きもせずに、彼らに論争において回答するのではなくて新たな運動展開によって、「行為の波及度」によって新たな階級闘争の地平を知らしめるべきかもしれない。

私たちの1号「理論的了解」から4号「行為の共同性」に至る経過はそうであったし、公然たる党内別組織路線六九年十一月「戦闘団」へのモチーフはそのようなものであったといえる。しかし困難はその少し奥に「理論の共有性」に対する、それを深めるといふ意味での「行為の共同性」がそれ自体では行為の一回性からする風化へ至ること、その持続性こそが問われるという所であったのである。

「理論の共有性」に対する「行為の共同性」は、軍事に対する党派としての私たちの視点であった。しかし「理論の共同性」としての党派が、大衆原像をくみとらんとすればする程、知的

現は如何か、に答えない限り、「八派ノンセクト」解体の主張は、自壊・風化の根を撃ちえぬのである。

ここで私たちは、「理論の共同性」「行為の共同性」総体を保持しうる、つまり思想—存在総体をおおいうる△階級▽を創る作業へ、どう参画するかという初点に、「組織」のレヴェルで回答することを要求されているのである。

「八派—全共闘、反戦」の風化を、私たちが指摘し、理論的にすりぬけるのではなくて、風化を根底からくつがえし再生させる方途こそが問われているのである。そのためには八派の内からか外からか、風化を極限まで推し進めるか中途救済しうるかというのは技術的なレヴェルの問題でしかない。

八派に典型化された精神の小商人を解体せよ、「ノンセクト」セクトに典型化された精神の小市民を解体せよ、つまり「党—大衆論の解体」提起は「次は何か」しりじりと追いつめられたのである。

□ 社会主義⇩階級論を捨てよ

a 共同体的契機の点検から始めよ

「党—大衆」運動組織構造止揚の方向性についての論理的帰結は、何度も明言しているように「党—軍—統一戦線」である。しかし、そう言いさる時、何か私たちは後味の悪さをかみしめない訳にはゆかない。戦旗派の、革マルの二番せんじでの現在の「党派」を改組、増中してゆけば限りなくあるべき「党—軍—統一戦線」へ接近してゆくという、レーニン党十軍事とし

ての党、軍形成⇩政治的階級形成の中でしか党—軍—統一戦線を理解しえない意識の私所有論があり、他方軍事を技術としてしか把握しえず、その階級性を了解しえず、官僚制批判を軍事回避、合法指導部形成にすりかえている情況派があり、又、力量問題や状況を尺度にして、「一応「軍事」を口にしたがすが、大衆武装それ自体の発展と結合するのではなくて、その系列化、政治意識化を目指す故に、いつも自らの古いこうらに似せた穴掘りしか為しえぬ諸党派、学生新左翼が乱立しているからである。

△階級▽の発現様式として、組織構造を把握するという私たちの組織論⇩階級形成論を、論理展開のレヴェルで主張することをしばらく横におこう。そのポイントを示した「叛旗4号」にしても、戦旗、情況や、その他諸々の党派がまるで了解しえぬ事は、彼らの私たちへの批判、理論戦線 9号、烽火再刊1号、左派2号、鉄の戦線1号、情況派による陰口その他を見聞して思い知らされたからである。

論理展開でなくして、八派ノンセクトを成り立たしめている。むしろ私たちも含めての「現在」の切開かれ、ここでは「党—大衆」論の次は何かを、知識層⇩民衆の政治思想、世界像の変質を足がかりに検討してみよう。

b 「ロマン主義⇩プラグマチズム」円環の背景
私たちは、六月分派以降、八派ノンセクトの自壊、風化をその政治思想の側面から、ロマン主義とプラグマチズムへの分解と、密通として理解してきた。そして、「ノンセクト」セク

ト、政治的知識人のかかる自然過程が自らの知的、精神的均衡自己救済をもたすかに見えていささかも、民衆の世界像や

社会意識へ触れえぬことを指摘しておいた。精神の小商人（八派+αとよめ）は、元々書きことばに置換えしえぬ民衆の情念やエネルギーを手が先に出でしまう衝動を買いえぬし、精神の小市民（「ノンセクト」セクトや当世風知識人とよめ）は、自らを民衆の代弁者と思ひ込んだり、政治的前衛でないことを知的大衆の特権とはきらがえたりしても、自己の観念的円環を脱しえないのだと又、又思い知らされた。

現在知識層の政治思想がおおむねロマン主義へ帰結し、大衆の生活思想をとり出してみればプラグマチズムへ流れ落ちる過程はより詳しくみれば以下の分岐を為していると思われる。

前衛と大衆との関係は、党—活動家集団—大衆組織のどちらの方向から出発する政治思想もロマン主義を形創る。党派からの関りは、宣伝の限界を政治的突出で破り、大衆を牽引する代行しうるという自己帰依、党派性自体に対するロマン主義である。大衆からの関わりは、野次馬、シンバの系列化として、大衆自身の分割、差別性への転化、「俺の党派」への声援としてのロマン主義である。

知識層と大衆との関わりでは、六〇年後半以降の知識層の自己充足解体からの大衆への原像さがしは、自らを大衆に似せて語るという意でロマン主義であり、知的大衆化しか結集しえな

いという意では啓蒙主義（知的完結という意でのロマン主義）である。

大衆の知識層への関わりは、何でも利用してやれという戦後世代のプラグマチズムであり、知的上昇が階層的上昇を伴わないという事態へのニヒリズムと、自己嫌悪である。

私たちは、ここに日本政治思想と大衆の関りの中に、ヤンキー化社会と大衆の価値意識の関りの中に、大衆の生活思想、社会意識がとり込まれず、否大衆自体がその共同体的契機をつかみ出しえぬ戦後二五年の悲劇をみる。そしてかかる知識層⇩政治的階級、労働者、大衆⇩経済的階級の現状を、市民社会⇩国家の歴史的成熟がもたらした、日本的ほう和状況が産みだした退廃⇩帝国主義からする階級形成への屈服と承認せざるを得ぬのである。

帝国主義からする階級形成が優位を占めるとは、それが支配者の支配的思想であるからではない。むしろ、スターリン主義や構改論や一国プロ独も含めての革命思想の根の浅さに基いている。帝国主義の内からの浸蝕や、手直しは論外として、どれ丈帝国主義から隔っているか、又はイデオロギティプスたる世界像へ接近しているかという革命思想の「帝国主義反対派」的発想と、目標と不足な現実をつきくらへ忍耐で埋めるといふ目的的行為論が、民衆の世界像、社会主義へほとんど触れえなかった否方法的に対象不能であったからである。

現今の「社会主義」から始める知識層の政治思想と、民衆を即「階級」と等値せねば気がすまぬ下志向派、左翼くずれ、小インテリ、要するに反「前衛」知識人思想の対峙は、実は日本においては世代思想の転換を暗示しているに他ならない。

2 前世代—同世代への思想的闘争宣言

戦前派、戦中派のロマン主義、「社会主義」から始める発想と、戦後世代のプラグマチズム、民衆二階級等値それ故、全肯定から始まる発想こそ、私たちが越えねばならぬ現今の知識人—知的大衆をも規定している。心情、論理に他ならない。

知識層がロマン主義の名の自己回帰、プラグマチズムの名の自己放棄を為しうるといふ事は、共同体基盤を解体させつつある民衆の（共同性V）の篡奪、書きことばによる上げ底化に拠を有っているのである。

知識層、民衆総体の、市民社会—国家との関わりが産む、共同体—共同性の分断化、拡散化は日本資本主義社会形成の政治、経済、社会的不均等に基いているのだが、むしろ被支配層の社会意識、思想を支配層思想の枠内でしか展開しえなかったという知識層、民衆の自然過程の、つまり思想—生活総体の（階級V）的成熟度の弱さに総括軸はおかれるのである。

イ、ロマン主義批判

a、知識層の陥穽

度である。不満な現実の増大に従い、知識層の知識内充足は解体し、民衆の生活信仰は実利主義へ逆転し、ついに自己と自己観念の一体化、自己と共同幻想の一体化へつき進みこの時ロマン主義は、自然的な観念、宗教発生基盤から放れて、落魄の知識層の最後の知II美の拠り所となるのである。

私たちがロマン主義を「意識の私所有」と断言したのは、上述の書きことば—秩序意識からはなれない知識層の心的過程の、その枠内では普遍的な様態を言いあてたかったからである。ロシヤマルクス主義が、何故社会ファシズムへ敗北してゆくか、あるいは容易に転化してゆくかを私は、「意識の私所有」物内での、方法の選択、論理的整合を可とする性向、知識層の思想としてのロマン主義にみてとったのである。

何故にアナ・ボル論争は日清 日露のナショナリズムにまことにもろく敗退していったのかへさかのほれば、そのようなナショナリズム自体、自由民権運動をなだめ掌中に収めた富国強兵策と見合って、そのうら目で様々の民衆の怨念をはらみつつ醸成されていたという事に戦慄するのである。日比谷焼打や木騒動を語ろうと、明治後半以降のつまり現代の指導的世代総体において日本民衆の「かくめい」的伝統はない。知識層のロマン主義は、国家が行政的にではなく、祀的に民衆を吸引し、そのレヴェルへまず「知識」から拮抗せ

ロマン的精神形態は、「かくありたい」「あるべき」自己や世界像の像としての創出をその一つのメルクマールとする。無論「ありたい」「あるべき」イメージが喚起される裏側には「ありたくない」「あるべきでない」生活や世相理解がべったりとはりついている。個人の生き方の領域でロマン主義が成立するのは、近世の「市民社会—国家」の形成過程での私の歴史的自覚史に対応している、と考えられる。

ロマン主義は近代精神の正統派プラグマチズムへの裏面に附着し、疎外された知識層上向不能挫折派を吸引し、警察国家の出現以降より観念化度を強めていったといつてよい。

意識を意図としてつかみ出すという意での観念的対象化能力は、国家の生産力拡大を、技術、エネルギー集約で支えるための公教の標準語政策に見合って、国民的に形成される。支配的思想は、知識による知識抑制、反支配思想を包摂するものとして、提示され、その意識空間を「価値」として転倒して扱う所に知識層の自己増殖、又共同幻想維持の根拠がある。

ロマン主義は、その「ありたい」「あるべき」知識層、民衆の思想が密通する根拠は、将に「意識がその死を求めない」所に存するのである。

b、自己救済としての「マルクス主義」の敗北

意識が自己を救済しうる、あるいは自己を救済すべく意識するという自己と観念との絶対的関係の度合いがロマン主義の強弱であった。

c、私所有意識は共同体契機をくみえない

ヘーゲルのロマン主義批判は合理主義の讃歌のようにみえてやはり自己を理性の橋によって世界史へ至らしめ自己回復するといふ知の円環を越えなかった。明治後期以降の移入アナキスム、マルクス主義、レーニスムはそれが自己救済の論理として扱えられる限りで明治初年のダーウィスム、カソリックと同地平の頭から生活へ近づくパターンを思想としては踏襲したのである。

個の自覚史において思想が扱えられるというのは欺瞞であり、自己へ内化された体験の蓄積を、時間的に論理化し整理したと思ひ込んでいるにすぎない。

体験は、個に与える関係の密度の残影としてはんすうされるのであり、それは必ず共同体的契機をはらんでのみ成立するのである。ロマン主義はこの「関係」を、意識された関係として扱いたいという性向に基いており、それ故共同体的契機は、自己を疎外したあるべきものの不純な変形としてとらえ、あるいは自己と到達目標を結ぶ反面教師として共同幻想化するのである。ロマン主義は、日本知識層の閉鎖性を、維持し温存する拠点であり、それは外来思想の温床となり、社会フ

アシズムを革命的復古主義として成り立たしめた「反近代」の心情の共同性であったのだ。

ロ、戦後「現実」主義批判

a、都市民の生活倫理の変容

プログマチズムは Yankee 民主主義の定着過程で、戦後知識層—大衆総体の一般的生活態度を代弁するに至った。敗戦後の、日本民族の恥の意識の減少過程と、つまりは日本的共同体—共同性の拡散、無焦点化、小集団化と、プログマチズムの生活思想化とは見合っているのである。

アメリカ民主主義を支える、ウェーバー風相対主義と、自覚した個人を前提とした社会倫理、倫理なき倫理としての実利主義、プログマチズムは戦後日本へ斜めから膨大な都市人口の増大を背景に進入してきたのである。

プログマチズムは生活者大衆に、自己のつまり「利己」の積極的肯定の根拠を与えた。戦前天皇の、親方の、親の、名の下の「かくされた秩序」は、民衆を国家へは吸引しえたが、社会過程でのびのびした振舞いを保障しはしなかった。それは小共同体（の残存を前提として）の、内部関係として処理されてきたのである。戦後復興の生産力増大に見合って、小銭をためる思想を公然と主張することを、秩序の下の競争から競争自体が秩序である社会情勢の下で、プログマチズムは思想ではない生活倫理として浸透していったのである。

っているのだ。

戦後復興期の、まず「喰わねばならぬ」ための生産力思想としてのプログマチズムは戦中派の「あきらめ」である。そして「民主主義」を幻想化した体制内反体制派、政治好きの三〇代を経て、プログマチズムは戦無派世代の単純「行動」主義として再生しているのだ。

c、戦無派単純行動主義

戦後混乱期の生活態度としてのプログマチズムが高度成長の行きつく果てで、当初より隠し持った「焦ら立ち」を全面開花させ、思想としての「モダニズム」を日本において典型化させたのである。

プログマチズムとモダニズムは紙一重の差で生活執着と現実嫌悪へ分岐する。それらは行為と結果を、眼に視えるもので、物質化で、何よりも諸個人の対象化として把えている故にそうなのである。

戦後、生活者の「生活主義」、生きる為のひらき直りに対して、アブレゲール、太陽族、六本木族と戦後ヤングエイジの生活嫌悪、モダニズムは併進してきた。

そして、現実主義者同志の、つまり議会、組合、自治会をめぐる自由主義と民主主義の闘いの結論、六〇年「敗北」はその膨大な民主主義層を、理念へ向う運動からひきはなし、その前提たる「社会主義」「階級」を自らへひきつけること

d、全肯定とニヒリズム

プログマチズムは、「思想界」を混乱せしめた、つまり知識層は奈落の底へ突き落された。思想を秩序の側からみる保守派にも戦後社会は、無思想、無目的、無秩序の極みと写ったのである。

戦後思想の大勢は、ロマン主義のプログマチズムへの敗け方の差を争っているに過ぎぬと思われる。自由主義は旧支配層のもの見事な Yankee 民主主義への転向追隨であり、（戦後）民主主義は、知識層の頭からの大衆への移行、「正義の味方」である。

そしてプログマチズムが「全てよし」として登場する時、即ちめんどろなことは議会や法廷で争えと主張する時、自らの志操を固守した部分は、「全てだめだ」という実感を政治や、論理やプラスの領域で他に開くという表現をしえず、自己表現即自刃へ至るといふ負の倫理へ自ら陥ちこむ事しか為しえなかったのである。

太宰治他、美意識と負の倫理を結合せんとしたものは、「全てよし」という戦後復興の原動力のうらに度し難いニヒリズムが、つまり人間への、「関係」への関心の放棄が付着していたのを見抜いていたと思われる。つまり「全てよし」と「どの人間も同じようなものだ」とは、身体を動かしていれば楽しいという昼日中と、目覚めの悪い朝のようになれあ

なく、逆に突き放して、どうしようもない 何かやることなにか、として次のベ平連運動への橋渡しをなす無自覚なモダニストへ追いやったのである。

ベ平連—全共闘—行動主義のゆるやかな円環成立は、倫理なき思想—モダニズムが、思想の拡がりなき倫理—ロマン主義を、その基盤、大衆性、実体によって世代的な「旧いもの」にしていた過程である。

そして、現今の「ノンセクト」セクトと今様知識層の野合は全共闘や地域闘争の行動主義の側面、運動のダイナミズムは、闘いのあと語る者に継承されず、ヒゲをぬかれた猫のようになり市民的連帯の謳歌へ転落したのである。

全共闘運動が有した面期的な側面、反権威主義、実力闘争、直接民主主義、とにかくやる—行為による波及を一義とする発想、遂行は、大学立法以降、運動がない時期の組織を、行動組織である故に形成しえず、八派系列化と「ノンセクト」セクトへ分解したのである。

一〇・八以降と、全共闘運動一過、旧態依然たる党派以外に、残ったものは膨大な個人主義者の群、ベ平連であり、しかもそれら知的大衆が増大、再生産される。

社会的基盤こそが「七〇年」の支配—被支配の調節弁であった事をよく視ねばならない。

そして全共闘運動過程でのぼう大なエネルギーの奔流を、

を、思想的には△了解▽しながらも、党一大衆組織の新たな結合関係として、保障し、追及しえなかつた事態を私たちは「叛旗一号」以来の歩みとして反省する必要がある。

「三派なんか知らない」諸君が六八―六九年の昂揚の後、ベ平連や「ノンセクト」セクトになれ合つて流されてゆくのには、困い込み、意識系列化、指導関係として以外の「党派」や「行動組織」のイメージを明らかにしえず、弱い吸引力―理論はいいが組織へは関係しないという―しか保ちえなかつた、六〇年安保以降の自立派、反官僚派八派なれあい路線への自戒として受けとめられねばならない。

へ、「現代知識階級」気質

私たちが組織に関して何をどのように始めるかについての予備作業のうち、諸党派(革共同系、構改系他)との位相の差、対立の根拠についてはロマン主義批判も含めて既に何度も明らかにしてきた。ここでもうひとつの予備作業、何故全共闘Mの持続力がベ平連へ傾斜するののかの社会的根拠と世代思想の私たちの評価を明らかにして、「次へ」進みたいと考える。

a、三派全学連の後衛―ベ平連

日韓闘争時に「何でもみてやろう」とアメリカ回りをしてきた小田実を中心に形成されたベ平連は、六七―六九年に大きく変貌を遂げた。その一因は三派全学連の解体であり、他の一因は全共闘運動の後退である。私たちは既成組織解体期

に、拡大するのはよりルーズな、過渡的組織であるという時間の冷酷さによってではなく、又党派が突出し、大衆組織が持続するという日本の党派の特性によってではなくて、三派全学連や全共闘運動を押しあげた社会構成の階級な構造の変質の一帰結として把握せねばならぬと考える。

三派全学連が解体し、党派全学連が固定化する過程がベ平連の第一次昂揚を促した。だがこれは、三派が包摂した無所属大衆が戦略論争の激化の中でまず大局論争よりも具体的行動について党派への系列化よりも対等な諸個人の連合をという消極的拠り所をベ平連に求めたにすぎない。三派に対するベ平連は、自己を後衛あるいは落穂捨いと位置づけつつ、「三派はまとまれ」と要求していたに止まると考える。この時期は、欧米型、市民意識覚醒を、日本で「民主主義」世代の残党知識人が、呼びかけ、内容でなくて「まず行動を」のレヴェルで三派くずれが結合したといえる。

b、全共闘運動と諸党派とベ平連

問題は、全共闘運動の昂揚と、諸党派の対応と、ベ平連の潮流化の背景である。全共闘運動は硬直した「ポツダム自治会」に対する直接民主主義、ソヴェト型組織を目指し、全員一致の実力行動を展開し、国内、反民、反右翼、統一戦線として形成された。ベ平連は、やりたい人がやる、誰でも参加できる運動、組織体ではなく運動体だという、個人の個

別課題に対する自由参加の原理で出発した。

この主体的規定の領域では学内組織たる全共闘と、市民運動主体としてのベ平連に類似点はあれ共通点は存しない。むしろ、両者の共通点は既成党派の結集軸、組織的運動が古ぼけてみえるという、運動の前段階、全共闘世代の社会―生活意識に存したのである。

。全共闘世代の特質

一〇・八以降の世代、とりわけ全共闘運動中に大学進学し、あるいは高校、中学造反を展開した世代は、六〇年安中派や日韓時の高校生会議、反戦高協や、首都の慶応―早大―中大―明大等学園闘争を、自らの政治、社会運動の初発の衝激力として受け止め、遂行した世代とかなり異質な社会関係を有している。

彼らは戦後民主主義が社会生活過程にまで浸透し、その裏目に育った世代である。勤評や、警職法時のような親子―教師が「民主主義」で連帯するという関係が安保以降解体し、民主主義防衛などという意識は無論なく、政治が生活へ関わるのは、戦争に巻きこまれる、つまらない日常でもそれが具体的におびやかされる限りにおいてである。無論、戦争に巻き込まれるなどは誰も信じていず、価値感を形成―解体される以前に、価値感を不要化された世代である。

戦中派と親子関係において無縁な、戦後民主主義と教育関係において無縁な意図せずして作られたモダニズムの世代、

これが一〇・八以降の、否三派以降の全共闘世代の普遍的質であると思われる。

彼らは、安中派が闘争体験より学び、革共同が黒寛に棒線を引き、例えば私が学園闘争で了解させられた「スターリン主義」組織やイデオロギーとは葛藤する以前に無縁であった。彼らにとって「闘い」は火が点けられていた。自らを問う前に、理論的に了解する前に「そこに在り」嫌々やっている学問、核家族化、吐気のする日常を、越えうる、つまりやりたい事をやりうる唯一の選択対象であった。まず身体が動いていた。それが六八―六九年の全共闘部分の実感であったに相違ないと考える。

彼らが「やらざる八派」と言った時、八派の理論内容の検討の事や、第九派を目指してなぞいなかたことは明白である。全共闘運動こそが、自己と仲間意識の唯一の表現形態であり、対権力、対民青、対革マルや政治スケジュールや、力量不足やつまりは「情況」を闘争の決定因とする「八派」の大人振りに反発し「ともかくやる」ことを希ったに過ぎない。

d、「八派―全共闘」構造の成立―全共闘運動の敗北

日共神話が六〇年安保で解体したとするなら、一〇・八以降は三派神話の解体であるといえる。そしてそれは同時に、それらと対を為して成立していた六〇年全学連、三派全学連、全共闘、反戦自体の風化でもあったのである。

全共闘運動は、自己の生活根拠「学園」へ執着する過程で八派とそれを生じた。ベ平連は自己を市民運動と呼び元来、新左翼と一線を画して温和な、行動の持続性を保ってきた。

全共闘運動の敗北は、機動隊を駆使した大学当局への敗北であるが、より根底的には「学内共闘」方式そのものの、党派との不鮮明な関わりの運動それ自体が唯一の目的とされる形成過程の、総じて「行為の共同性」「暴力の階級性」を組織構造化しえなかった、方途を見出しえなかった事による敗北である。

ベ平連の伸長は、全共闘の孤立化への疑問の、暴力闘争への肉体的反発の弱さを自覚しそれをそのまま保持、主張せんとする部分の、総じて八派の閉鎖性、引き直し反対を党派嫌いにまで高め、「自由」をいつも掌中にしていたい自意識の産物である。

全共闘運動の敗北は、沈黙し日常へ帰る部分と共に、明治百年史上かつてない程の膨大な「知的大衆」を産んだ。フォークゲリラ、アングラ、ミニコミ、地域運動、共同労働。この社会力は、以前の学歴無用、能率給制度へのひっかかりをどう取り払い、ブルジョワ開発派を有頂点にさせるに至った。

。全共闘良識派―ベ平連―

「反乱派」知識層のロンド

衆のマスターベーション、市民としての自信を支えても、モダニズム、啓発運動を越ええず民衆の頭上をかすめるにすぎないと思われる。

権力の許容と、機を見るに敏な情況主義者から「強制された自由」を拒否せよ。

個人の自由な結合など主張するな、諸君は今沈黙し、語らない者たちに「全共闘運動」「安保闘争」に触発されて来たのだ。その共同体的契機に固執せよ。風俗としての市民運動は解体せねばならぬ。

3 何故に何に固執するか

イ、政治組織における時―空の転位

私たちは遠くまで来た。私たちは六七年から六九年へ戦後階級闘争の新たな波が、世界で就中日本で昂揚し退潮してゆく総過程を体験し、視てしまった。七〇年秋、私たちは醒めている。醒めて「運動がない時期の組織」を維持している。その持続の根拠は何か、何に固執せんとしているのか。私たちは自らを含めた現局面を、先行する特に六〇年安保の思想的追体験によっても、学園闘争―一〇・八一―後退戦の体験の思想化によっても掌握し尽せない事を熟知している。七〇年（代）に課せられているのは、市民社会―政治的國家の世界史的、等質的成熟の根を奪ちえていない階級闘争史に於いても自己史の体験に於いて

全共闘運動敗北後の「知的大衆」は学内良識派であり、ゲバルトよりは反大学運動や自主講座がまず関心の対象となる部分であり、それ故八派に対する第九派を、まづ理論で、次いでベ平連部分も巻き込んだ数量のデモンストレーションで目指さんとしたのである。「知的大衆」部分は全共闘内体質的旧世代であり、理論から運動に入る「三派」世代と共通傾向を有し、「八派」へ根底から訣別も接近もせず、八派への圧力や、第九派志向を「理論の共有性」への回帰、サークル連合としての「全共闘」維持で為しえたのである。

そして全共闘運動の敗北の徒花「知的大衆」を「反乱大衆」と讃歌する無責任党派知識人の出現によって「全共闘」は、当面時期をまつ情況屋、便乗屋のかくれみのおしとめられたのである。

かかる情況屋こそは、全共闘諸君の味方のようにみえて、最も恥知らずな「全共闘運動」の寡奪者であることを肝に命じて置くといふ。そしてかかる、思想なき倫理なき政治、集団、合唱隊を生かす者こそベ平連に典型化される「市民」に他ならぬ。

「実力闘争」はカンパニア集会の参加で許される。「ソヴィエト型組織」は何でも自由に話せる組織へ移行される。拠点への固執は市民生活防衛へすりかえられる。

「全てよし」「持続する事こそが大切だ」それらは知的大

も、全く未踏な領域であることを確認しよう。私たちは自らの闘いの軌跡をその尽には根づかせてきたのだ。

私たちが今時「党派」に固執する理由は何か。それは六〇年安保後の先達によるマイナスの教訓に対する自戒である。

六〇年後、日共の認識に他の認識を対置させんとした革共同、天上から対して地上からを主張した解放派は、だまされている民衆や小ブル党派を問題にしたが、「党派」自体を問う事はなかった。それは党派を民衆のなにがしかの部分の代弁者、代表者という「党―大衆」の発想を、超ええなかったという事である。

だが、私たちが考えているのは *Socialist* や自立社学同の闘いと敗北についてである。安保プロットの残流の最も良質な部分は、プチブル急進主義、プランキズム学生党派の悪罵をにっこりと開きなおって引き受け、「自分が感知し、納得した事のみやる」という姿勢を最後まで貫き、組織としての自己表現の根拠を真に闘う者が集まるといふ信条以上に回答しえず自壊、四分五裂したのである。

自立社学同は、政治イデオロギー集団というよりも、思想探究集団かつ行動集団であったと思われる。そして、それは「昼寝の季節」を言った吉本隆明等と経験の内化し思想への執着と、自立した個の思想と行為を目的とする領域で結合しえたのである。

私たちは、「現実」に党派が回答能力を最も喪失した時期に最も党派の自足性のボルテージが上がるという逆説的關係をいやという程みせつけられてきた。

安保後、革共同に徐々に社学同が敗北してゆく過程は、個の価値観解体を党派の擬似共同性で補填する「党の自足性」に安住するものに、個の価値感触体の根拠を、自己を含めた大衆の思想的緊張の拡散に求めんとする部分が「政治的」に屈服する過程である。

日共―革共同に、小ブル党に対するプロレタリアートの党を対比した解放派、硬直した政治に個の思想的営為を対した自立社学同は敗北した。何故か。

党派に別の党派を同じレベルで対置するという事は、既に党的結集力と政治的有効性へ党派の規準を売り渡した事である。

「党派の観念的自足性」既ち党への帰依や主体論に、党派の階級的基盤を対置する時、「プロレタリアートの党」自体が幻想化、党派性へ昇天してゆく事は必至である。

思想へ執着する立場は、次の矛盾をはらんでいる。自己を党派として表現せんとする時は、党派の党派としての行為と、個の不均衡な思想の成熟度のあつれきを、政治的にプラグマチックに処理するか、思想の方向性をダブラセロマン主義へ至るしかないこと。前者は政治路線の結合故、退潮期に主体性派へ敗北し、後者はロマン主義を實踐へ移す過程で党的自足性へか、

組織の持続の根拠をつきとめる為に、まず私たちは意識的に「組織」へ執着する事を決めた。政治組織の生成―成熟―解体を最後まで引き受ける事により、「如何に敗けてはならないか」から、「何故、勝ち得なかったのか」へベクトルを移行させる形で敗けたし、「何故、勝ったのか」を了解しうる形で勝ちたいと考えなからである。

「組織を退く者は、現在の組織をつぶす党内闘争を展開せよ」という私たちの提案は、組織員を増やし、拡大するという祝点があつても、政治へ組織へかかわり退く、組織員に数倍する諸個人を取り込めず、反革命分子―脱落意識か、思想の未成熟―こっそり退くという円環を脱しえなかつた「新旧左翼」への挑発である。

私たちは、今思想と政治を取り結ぶ「共同体的契機」に固執すること、そのことが自らの政治との組織との関りの質を確定する規準の解明であると考えているのだ。

私たちは、在った事をなと言わせないうために、なくなっている物があると強弁しないために、自然的価値が解体し、生の等価性が乾いた個の自己保持へ地すべりしつつかあるが故に、視える、視えない△関係▽へ固執するのだ、意識的自然史―死へ向けて。

市民社会―国家の成熟は、日本においても自然的生活を解体させた。政治へ極左に突き進む者の思想的故郷たる帰るべき

プロレタリアートの代弁者へか、つまり「どれい政治」へ逆転するのでしかないのである。

党派嫌いを貫くとしても、思想の個的成熟と政治の共同的表現の「橋」を見出し、かけない限り、政治を思想で批判する、つまり指導的党派イデオロギーへ私的不満を述べるにすぎない。思想と政治は違うのだという主張はそれ自体が「政治」へ関りなく又思想の成熟へも寄与しないという意で主張すること自体が自己矛盾に陥る。

問題は「政治」を、主導的党派や、イデオログの表現から了解するという発想にあり、それは暗黙に「党―大衆」関係、経済的又は政治的階級感を前提していたのだ。

自立社学同は、「組織」の根拠を明らかにしえなかつた。それ故、思想的にはともかくも、政治的には「いかに敗けてはならないか」を示したにすぎないのである。私たちは、「組織」を強固に定着させようとすればするほど、個を党へ物神化させざるを得ず、一方組織の歯ごぼれに、「思想」は了解の不均衡や、体験の差異を知らしむるに過ぎず「又、縁あれば」のさよならをしか帰結しない事を知っている。そのどちらに転んでも組織の力的生命力の持続に至らず、意識的組織持続が、個と組織の時間を同化して価値への接近と抱えられるか、個の思想への節操、「耐える」事が、倫理化するに過ぎぬ帰結も又、了知されたのである。

「生活」なぞはない。

ここに、党派の自足性の解体故の自足性への偏執や、思想家が一言居士へせり出してくる根拠がある。学生層に知的無関心と、自己消去としての集団行動が流行り、いわゆる労働者上がり、最も知的志向と個人主義への回帰を結論づける逆説的、全ゆる神話解体の根拠である。

無論、どのような軌跡をもとうと、小状況に固執しようと、何をやってもよいのだ。

何をやってもよいが故に、私(たち)は政治をやる。他にやりたいことがある諸君はそうすればよい。しかし、一個人が一つの生活場を振得することはやりたい事ではない。何をやっていようとひきづらざるを得ない安息と不満の日常であり、やらざるを得ぬ事だ。

私たちは、関係をひきづって生き自己関係の総和として死ぬ。等価を生は、諸々の吸収―排泄を含めて、上塗りされ、個をおおひ関係として生きられるのである。

関係へ固執する。しかも、自然的生活―価値観解体のただなかでまず関係の共同体的契機へ固執する。

私たちは、革命をかくぬいへ、階級を創るものへ概念を変えた。そして「党派」を階級発現様式から把みとるが故に、当面組織員にはなくて△叛旗派▽総体へ固執するのである。それを組織員へは要求するのである。

もう一度言う。どんな耐え方も、生の等価に引きつけられれば同じである。生きる側へ、関係を創る側へ意識的に入り込む中で私たちは内的・外的自然を、自然としての自己を産み出さんとしているだけだ。

私たちは、叛旗派の理論や組織や運動の軌跡に固執するに至るまでに、「党一大衆」観にしがみついた既成党派や上げ底大衆組織と訣別してきた。轍を踏まぬために二、三確認しておきたい。

a. 断言——袋は袋を破り得ない

「袋は袋を破りうるか」否、「袋は袋を破りえない」これは谷川雁の初発の問いへの行きずりの私たちの「七〇年」の地点での回答である。随分私たちも考えたものだ。安保ブントの残りかす社会学同から統一ブントへ、明大独立派、マル戦、赤軍、情況と、除名されたり、来なくなったり、飛び出したり、逃げたりそれらをながめつつ、私たちは最後の世戸際まで「袋は袋を破りうるか」をはんすうしていた。

私は自分が組織を創らない以上、否創るまでは最も自分自身近く、許容力のある組織に入るといふ考えだったから、現象的離合集散には心驚かされなかったが、原理的にはいつも私がブントに居る根拠を問うていたので。第二次ブントは当初より連合戦線党だった。その結合環は、組織体質まで問えない故に、革共同の綱領主義（党づくり運動）への対抗の故

しかし、新左翼一〇年の歴史は、党派が政治表現に固執し耐えて得た政治経験も、反スタを掲げ既成左翼との分離を目指した組織間の離合集散も、結論的により日共へ近似する。過程であった事を直視せざるを得ないのだ。

それは、日共から共産同が産まれたという人的、実体的問題ではなく、理論、組織、運動に涉って反スタ―反日共を標榜する度合の強度が、日共への近似度であるという笑えない事実である。日共―革マル―中核―理論戦線―4トロと並べてみればわかるというものではないか。

このことは私たちに以下の事を教える。

i 意識のオートマチスムは自己増殖へ向かう。一つの傾向性の認識や体系、学問に同じレヴェルで理論的に反駁し或は別の系を対置するという方法は、相補的關係として二者併存を目指すに至る。Aを打倒する為の理論がAを過ぎない事は自明であり、綱領―思想的結合環を感性の振幅も含めて主体性論より落ちこぼれる空間的共同体的契機を鮮明化する以外「反スタ」論はサークルや学習会の一素材に止まるのである。

ii 4トロ、解放派等の加入戦術も自己矛盾に陥る。一組織内で、しかも自民党から議会の心中を強要される社民党の内で、多数派工作―機関奪取という展望は成立しえない。そういう平和主義、ボス交路線を拒否せんとすれば、何故

に、科学的的情勢分析に基く戦略戦術に求められたのである。戦略戦術での結合は、左翼であること、つまり、党派を抜き差しならぬ関係であること、を前提した、クールな、客観主義的な結合であった。その結合が、大衆運動のダイナミスムと、理論的優位を党派性にしようとして、理論的誤謬の発見より速く、大衆運動の停滞により個々の人間関係へ逆転することによく見えた事である。マル戦と統一派の結合、分解過程でよく見えた事を、統一戦線レヴェルで三派全学連、八派全共闘へうけつがれた、世界情勢↓日本情勢↓戦略・提起という大言壮語、帰納法である。

戦略戦術での党派結合は、党派それ自体に持続し、豊富化する共同体的契機を有しない。つまり戦略戦術の党は、外的空間の科学的認識を結集軸とし、運動評価の軸を空間的波及度、大衆運動のダイナミスムに置く故、組織論の核心、外的時間と内的時間の関りへはしよせん回答しえぬのだ。

私たちは、自らが組織性が薄い、つまり実力闘争にはバイト休んでもゆくが、カンパニア集会には電車賃を使う気がしないという体質を、大衆運動指導部という形成過程や、政治への割り切り方という意で組織へのかけ方が薄いのかなぞと反省していた。そして中核派の安保残党の政治技術を見るにつけ、方法は納得しなくても政治経験の蓄積というものも一つの能力だなどと己れの年を数えたりしたもののだ。

ゆえに社民党のどこに固執するかを常に反観点検査せざるを得ない。社民党の中に常に自己の鏡をおき、良い貌を写さなければ加入戦術は成立しない。社青同解放派から社会党解放派へ、つまり社民の枠へのゆり込む道を探りながら、除名抗議で被害者意識を盛りたてるなぞは茶番である。執着するものがなくなったのなら、加入戦術を反省し、わが道を行くというのが結論になるべきなのだ。

iii 理論的には、党形成―党派闘争の軸が、党派イデオロギ―を論争で粉砕したり、カンパニア集会の頭数を競ったりでしか把えられないという限界である。

「党一大衆」論の円環内での山の大将を目指すというのは、階級意識形成論の、ブルジョア国民教育と同じレヴェルでの「正しい知識」が人間を動かせるというオプティミスムに基いている。日共が最多数でも誰も心からの支持はして、中核がその絶頂期においても彼らの理論へ心触かれて支持する者はいなかったのである。八派内で何とか、他党派より一馬身でもせり出したというのは、彼らが反スタやサンジカリズム批判の視点を持とうと知的大衆化した全共闘、反戦に過剰な期待をよせているからに他ならない。八派にとっての階級とは全共闘、反戦残党に代表される政治的階級だからである。

「袋は袋を破りうるか」は、「必要悪」や「産婆」とし

ての党把握、つまり「大衆」大衆「V」円環内での問いであり、この枠組をこええない限り、常に回答は否である。

さて、「大衆」大衆「V」の意識系列の枠組みを越えられるか、への党派に対する大衆の、理論に対する行動の、政治に対する思想の対置の試みの結論を明らかにしておく。

b. 断言2—空間は党派を撃ち得ない

大衆の生活過程の変質・血や過去へのフュティシズムではなくて生活態度の、価値判断に基く意識的行動ではなくてさりげなく交わす会話や日常行為の、形態は過去—現在そして想定される未来も変らなくても、そこにおける主体と意識と行為の時間—空間の度合いの変貌が全ての「空間論」流行の根拠である。戦後二五年の本当の怖しさは、民主主義の定着が同時に国内統合力を後退させ左翼の持続力の弱化をも産んだという「政治」世界の悲喜劇にはなくて、生活過程をむしろむブラグマチスムにあるのだ。

戦争責任論は、大衆の自然的生活への執着を基に、コスモポリタニスムを断罪し、ナシヨナリティがインタナシヨナルへ至る通路を戦後思想との格闘の中で手に入れた。現在その基点が、大衆の自然的生活への執着度が問われているのだ。

六〇年代後半の知識層の一傾向「党派」に対する思想的批判、科学的にはなくて大衆反乱を支持するという心情と論理は、問われているのが自己である事への予防線にすぎない。

伝統や、慣習や、伝承や教育の諸関係が小共同体においても、家族においても凝縮度を欠き、疎通を欠き、諸集団の個有時間が拡散し、単なる自己へ押し返えされている時に、彼ら思想好みは、元々個の営為である思想をすて、空間的世界の拡大へ、肩すりあう仲を形態上追っている訳だ。

知識層の「生活」への乗り移りは、知的大衆ブラグマチスムの受容から、体質化への浸透とまったく相補的に成立しているのである。

政治を退めた、退めたい知識層諸士よ、「生活」を語るなら自らを語れ、書きものや、ペンを離れられない自己の性を恥じよ。誰にとっても通有なその「生活」の変質を、執着力—時間度の減少と、作られた消費への迎合、空間度の拡大から、それを「共同体的契機」の質として透察せよ。「生活」に馴れる事を政治批判と思ひ込んでいる諸君と、今時「政治」へ固執する私たちとの共通な土俵は、その先に生の等価性と「関係」へ開けるのである。

かくして以下が確認される。

Ⅰ 政治組織の持続力の根拠は個々成員の体験、組織的結集の契機、政治思想の了解も含めてその固有時間にあるのであり、これに空間的、量的拡がりを対置することは「政治の狭さ」を批判するに過ぎず、党派の側はその

い。吉本の知識人—大衆論の出立過程をふまえずに、植谷雄高風に「生活は政治より広い」とうそぶくことが偽りの基点である。

「生活は政治より広い」というのは、当然の誰をも通過する「生活」を一票や、学問探究、科学的判断に委ねてはならぬという警鐘であり、それ自体はあたりまえの事である。所が、当世知識層がそれをつぶやく時政治に対する「思想」の対置であり、全共闘、特に助手共闘くずれがそう語る時党派に対する物神化された「大衆」の対置へ、何故意義づけされるのか。

答えは簡単、知識層が小文壇、論壇、詩壇で安息したり、学問的貢献や党員作家へ自己充足しえぬまでに、生活過程の変容が進んでいるという事である。

彼らには、もう一度最初から考えて欲しいと思う。思想がらいつとも思想好き。政治嫌いと政治好き。党派嫌いと党派好き。問われているのは、こういう系列ではない。思想がらいつとも思想好き。政治嫌いと政治好き。党派嫌いと党派好き。私たちは綱領と呼んでいる代物なのだ。

ともかく、生活過程から固有時間が剝離してゆく時に、そのことへ誰をも含めた生活者の共同体的契機に、執着する、自己を追い詰める事をせず、政治へ思想を、党派に大衆を対置するなぞ、本当にボケ加減もひどいものだと思われる。

批判を時間へ翻訳させて組み込むか、良心的市民として政治軸を包む層として、位置づけ処置するのである。

Ⅱ 「大衆」枠内では、つまりは党派への被害者意識や、憎悪での、大衆組織を支持する事の安堵感や、自己の知的解体への防波堤としての、党派批判や、政治批判は、絶対に「政治」や「党派」の呪縛を逃れられない。つまり、それらは政治や党派を整理された意識過程として把え、批判する故に常に、「秩序意識」への反発や、帰依を語るに過ぎぬのである。

政治へ賭けるでも、知識世界から身を退くでもない。ようやく時間がマスコミへ押し上げた（年を重ねたと言う丈のことだ）安中派インテリ、助手層の致命的欠点はこの「過剰な党派」への「意識」を自己史と重ねえない所にある。つまり世代思想としても、思想の営為としても中途半端で醒めた恋を懐しむ年増女のように、燃えきれず、かつ耐えきれぬのである。

Ⅲ 全共闘世代の自然成長的な、党志向は、全共闘運動のバリエード防衛、玉砕路線が暴力の質においても、持続力においても個別「全共闘」の枠を越えるものを要求している事、そして個別「全共闘」を軍事力量において側面援助し、維持させうる、又政治思想において「全共闘」の昂揚と停滞の根拠と諸矛盾と方向性を示し吸引力を有す党派が

いないという「現実的」要請に、自ら党派を代行して回答せんとするものである。しかし八派の下手な政治を「見ちゃおれない」魅力のある党派がない、俺が一肌脱いでという発想は自然過程であるが、あたかも日本を「見ちゃおられない」とだんだん太平洋戦争に乗っていった民衆の国家との関りのように、「党」の矛盾を解決するには、全共闘の矛盾も解決せねばならぬことをないがしろにし、爪先だって先急ぎしているにすぎない故に、八党→大衆→円環を最後まで、脱しえず、位置を変えるに過ぎないのである。第九派になろうとせずに、全共闘運動の再構築を準備せよ。見学連としての八派批判の固定化を止め、自己を含めて党や階級について何が要請されているかつきつめよ。

全共闘、反戦の持続力の一面、党的志向とその反面批判的批判こそが、「八派」をボス交統一戦線、政治意識形成、政治的階級論を生き延びさせ、ブルジョアジーに対する体制内反対派のそのまた反対派の位置へ、「新左翼」を固定化する根拠だという事に着目せよ。

自力で闘うことが全共闘運動の初心ではなかったか。今は秋だ、薪を集めよ。「たたかい」へ執着するなら、隣の花などを気にするな、それこそが現在残っている者と、それを数倍する沈黙者結び（全共闘）運動総体を持続、開花させうる最低限の倫理（思想的態度）である。又、そ

の代行者として、その実、知的大衆、労働貴族の自己防衛者として考える社会民主主義潮流に対しての訣別の辞、新たな地平に立つという事である。

党が常に大衆と区別され、見た目にも純化されているべきだとするスターリン主義者、大衆に必要を時だけ浮上すべきで後は日常活動を強調する社会民主主義者と異なって、私たちが「党」を考える時、これまでのスターリン主義、社会民主主義、反スタ主義、共通な八党→活動家集団→大衆組織で示される「党」の概念をまず破壊した地点にたっているのだ。

社会的階級形成の一環として「党」を把握するとは、以下の結論（規準と限定）を導く。

I 社会的階級は、本来の目標でもなく、現時点で、経済的階級、政治的階級と併存して実在するというものでもな

S。社会的階級は、社会主義→共産主義の歴史的、世界的主体である。しかし、その主体は現存する民衆の、意識→感性が時計的時間、感覚しつくす事の出事ぬ空間の世界的拡がり、その共同体的契機の中に把え込む、共同体間交通へ表象しようという、人間と、自己、他者、自然との関係→所有の変質としてのみ了解される。

II 私たちは諸階級、諸階層の、社会的→政治的自己表現を、歴史的に民衆の共同体→共同性の社会的階級へ向か

ることへの固執が八党→大衆→構造を止揚する潜在的契機の持続であり、八階級→への共同体的契機を顕在化せんとする私たちがとみえない絆である。私たちはそれを欲している。

C 「階級を創る」組織の規準と限定

既に「階級を創る」ことについては述べた。経済的階級が市民社会→政治的國家の成熟に基く階級分解→再編策により上げ底化、上層部の知的大衆化を招来し、そのことが政治的階級（党派→a）をより大言壮語と心情的ロマン主義へ導いていること。「党→大衆」運動、組織構造の限界、手づまりは、経済的階級→政治的階級の発想と展開自体に基いていること、それが前提であった。

政治的階級と経済的階級を包摂し、その閉じられた場を世界史へ開くものとして、私たちは社会的階級形成を提起した。私たちは「社会的階級」について、「階級形成論→共同体論」について多く語ってきた。

ここでは「階級形成の思想」についてはなくて、階級形成について、私たちはどの位置にいるか、誰とどのような事をするかについての規準と限定を明らかにしておこう。

私たちは、「党」は社会的階級への部分だという事を言った。それは「党」を政治的階級の最も目的意識的なものとする擬、垂、新、親スターリン主義潮流や、「党」を経済闘争

う、階級の発現様式として把握することが出来る。

III 階級の発現様式として諸共同体→共同性を組織構造から把握する時、私たちが八党→活動家集団→大衆組織→と呼ぶのは、近代国民政党的組織構造であり、知識層と不満派知識層の対抗関係を、諸共同体の対抗関係として擬制する、支配、被支配層双方にとって最も安易な、つまり自然成長的な組織構造である。党に党を対置させて、つまり平和革命論で権力を奪取しうる訳はなく、イデオロギーの浸透→階級ヘゲモニーの形成という政治意識形成論は、常にブルジョワ政党に対する政策反対派か、権力に容認される領域での、つまりは言辞の上での反権力派に留らざるをえないのである。

IV 日共史における活動家集団をめぐるジグザグは、党になりたがる、八秩序→への憧憬とコムプレックスを緊張感と思い込める日本インテリの閉鎖性に基いていた。反戦学同→社会学同が為した活動家集団（といっても学生層ののだが）の定型化は、共産同→社会学同→全学連として構造化された。これは現在の革共同両派を中心とする八派→党組織論としてはそのまま受けつがれているのである。全共闘運動が有した「行為の共同性」を媒介した組織という新たな結合様式も、武装→軍事が有する階級性も、八党→活動家集団→大衆→構造へ固執する限り、問題意識化されてもとり込み

得ないのである。そこへ気がつかない限り八派が十五派 (+α) になり、革共同―マル学同―中核系全学連、全共闘、反戦に八派と全共闘、反戦の系列化、集団分化が進行するだろう事は、疑いようもないことである。

V 階級発現様式としての、 \wedge 党―活動家集団―大衆組織 \vee を超えるとは、階級意識形成論、意識系列(時間系列)としての組織構造把握を超えるという事である。

しかし、意識系列化反対、いかなる権威をも認めないという全共闘運動等の行為の共同性による結合(空間的併存)が、それ自体に時間化への契機を、持続的表現力を欠き、党派嫌いや新左翼反対派として、 \wedge 党―活動家集団―大衆組織 \vee を受容し、知的大衆、シンパ層へ転落する事は既に見た所である。

\wedge 党―活動家集団―大衆組織 \vee を、「ノンセクト」セクト、見学連を含めての \wedge 党派(―活動家集団―大衆組織―大衆 \vee) 構造を止揚するとは、意識系列化に対して空間的併存を対置するのではなくて、その双方も含み、かつ社会、文化過程を含めて \wedge 階級 \vee を構造的に把握する以外にないのである。

VI 社会的階級への発現様式として、組織構造を把握するという事は、個の意識―存在総体の共同体的契機を包摂するものとして \wedge 階級 \vee を想定し、欲求し、執着し、創ると

線」を把握した。それは、赤軍、戦旗、フロント(軍なき党―統一戦線)等の亜流、一応世界で初めて戦争陣型として提起してきた正統派―中共派とも全く異なる革命―階級観に基きである。その隔りは、「党」「軍」「統一戦線」という歴史的蓄積を有している用語を別に変えたい位に大きい。

昨秋闘争における、十一月への戦闘団提起から私たちは、 \wedge 党―活動家集団―大衆組織 \vee の転換方向として様々の試行錯誤の一環として \wedge 党―軍―ソヴェト \vee へ着目した。私たちが「情況派」は軍事主義だとか、赤軍、戦旗派の世界党―世界赤用論への敗北だと陰口をたたいた。彼らは、戦旗、赤軍よりもひと回り問題意識の旧い構改派並みの合法的政治へゲモノ―論者である故に \wedge 共産同―社学同―全共闘、反戦 \vee へ固執し、ボス交根回し統一戦線を手離そうとしなかったのである。一年遅れて「意識の系列化―認識における組織化の否定」(ローテ二号)などを総括なし、軍事抜きで、「反乱大衆」への乗り移りとして語るとは茶番であり、しかも総括なし、軍事なし、党派へも大衆組織へも行けぬ不満分子のニコニコクラブを目指している故に犯罪的なのである。

「野合戦旗派」の腐敗の根源は、 \wedge 党―軍―統一戦線 \vee を煮つめえず、放棄してゆく過程にあった。

ML派、赤軍派に触発されて一〇・二一後「党―軍―統一

いう事の別の謂である。私たちが、 \wedge 党―軍―統一戦線 \vee を言う時、そのレベルで考えているのである。つまり「党」は社会的階級へ至る意識過程の、「軍」は行為過程の、「統一戦線」 \downarrow 「ソヴェト」は非表現部分も含む社会―生活過程の共同体的側面での表現なのである。

VII 「社会的階級」への過程は、党が死滅し、軍が生産組織体へ転移し、諸共同体が様々の共同性幻想の外皮をとりぞき語の真の意でのソヴェトへ至る過程である。

それ故、 \wedge 党―軍―統一戦線 \vee を創出する、準備するという時「構造的」に創るという事であり、個の意識―行為と生活過程総体の「共同体的契機」をつきとめ、開花させるという事に他ならない。

VIII 階級発現様式として、 \wedge 党―軍―統一戦線 \vee の組織構造を創るとは政治意識の均質性を組織規準、組織原理とする旧来の全ての「党形成論」を空間的に拡大、適用するのではなくて、各々組織原理を異にする \wedge 党―軍―統一戦線を構造的に創るという事である。一枚岩の党の発想から「軍事をはらむ党」へ短絡するなぞというのは、古い皮袋に新しい酒を汲まんとする茶番である。

階級発現様式としての「党―軍―統一戦線」論

a 「赤軍」、「戦旗」は何故誤まるか

私たちは社会的階級への発現様式として「党―軍―統一戦線」に組織戦略を定めた本是を、六月以降の分派闘争過程で全く忘れさせたのである。それは関西、神奈川、仏派の党―軍―統一戦線論の底の浅さが、「党―階級―大衆」盲信派―理論戦線にごまかされ、足すくわれる過程でもあったのだ。関西と東京で各十回大会を開き、互いに他を除名するという野合戦旗派の遅すぎた十二月分裂も、その根拠は綱領―戦略をめぐる非和解対立を処理する方法を、軍事をはらむ党形成論、 \wedge 党―軍―統一戦線論のいずれも持ちえていなかった故なのである。

「党―軍―統一戦線」を階級発現様式として把える時、私たちが「野合戦旗派」に対して以下の批判点を指摘していた。

I 毛沢東の「党―軍」を支持する軍―軍を支持する統一戦線」を、彼が階級闘争の貫徹形態として前提にした先進諸国での合法的な大衆闘争、特殊中国での革命戦争を抜きにして「世界党―世界赤軍」へ重ね合わせることは出来ないこと。スライド可能とする時は、 \wedge 党―活動家集団―大衆組織 \vee の中共版としての \wedge 党―軍―統一戦線 \vee を固定化し、意識系列と軍事系列を合法闘争の時代と非合法闘争の時代として使いわけ、かつ意識化―軍事化と把えるプラグマチズムへ至ること。

II 関西派の誤りは、戦略の時間的射程の長さを綱領と取りちがえることに基き、「世界党―世界赤軍」を赤軍派に学

んだのはよいがそれが社会主義を実現する為に必要だとされる限りで、質の変化が問われず、「統一戦線」は旧来の「大衆組織」の革命戦争の時代の呼び方以上ではなく、「党一軍」への付録でしかないのである。

III 神奈川派の誤りは、「党一軍一戦線」を毛沢東を踏襲しつつ、「党一軍一革命戦争統一戦線」へアレンジして提起しつつも第一に綱領一戦略に無知な故、党一軍一統一戦線形成を政治的階級形成へとりちがえていること、第二に時間一空間と階級の関連がわからぬから、黒寛の認識へ実践を置き変えれば党一軍一統一戦線、特に党の実体としての軍の中で共産主義、永遠の今が実現するというオプティミスムへ陥ることを指摘しておいた。神奈川派が毛沢東から学んだものうち評価しうるものは「人民の側に立つ」という基本姿勢であるが、これも理論戦線派の「政治に軍事は従属する」という強弁に屈服していったのである。

IV 仏派は、党一軍一統一戦線を「党組織の内部構造」として把握するが、それが必要な根拠を時代の要求でしか答えられず、それ故内部構造は平板的な任務分担にすぎず、つまり階級総体の構造、発現様式、と「党一軍一統一戦線」の関りの差はついに問題意識にも上らないのである。

V 理論戦線派、特に日向論文(理論戦線九号)は、上述的拡がりの差、革命戦争をやるという意志一致の有無の差にすぎないのである。

同一実体が政治機能と共に軍事機能をも担うという時、政治と軍事の基本関係も、感性や意識の関り方の差にも気付くはずはなく、「意識上昇→軍事遂行」という自然成長性への拝跪しているにすぎず、その不足を「情念」の空気入れ、お山の大将、おれ一人で補足し、「党」への帰依で「軍事」を行なうという「革共同+軍事」の現代的表現へ至るのである。実践しないロマン主義者が、自意識や心情で開鎖的に自己保持するという日本の変型は、党派闘争すきの権力闘争嫌いとここに第二革共同として増補されたのである。

VI 赤軍派は、世界党一世界赤軍一世界革命戦線の位置づけ、内部関係については不十分を展開しなかった。「向健等は、頭のみ、つまりアジテーションやスローガンのみ「世界」へ移行する、つまり「世界党一世界赤軍」と日本の私たちが同心円的に拡大してゆくという発想が顕著であった。花園紀夫の「自由への道」はこの点の総括としては評価しうる。しかし、平和的大衆闘争と武装大衆闘争の二元論から結論される、従来の党を捨て、軍を採るという組織路線は、「戦旗」派が言うような「党なき軍」その純化だからだめではなく、軍事をその階級性にお

三者に私たちを含めて、昨秋一今春へと深化されてきた。党一軍一統一戦線Vへの完全な否定である。自己の歴史的境界については思い切りよく総括すればよいのに日向氏は弁解がましく、レーニン+藤本進治の黒田寛一風理解論戦線七号運動組織論に、軍事をプラスして事足りれりと言弁しているのである。

九回大会における「軍事をほらむ党」論こそ、十月闘争の敗北の過程で、レーニン党+軍事の接ぎ木として反省され、「党一軍一統一戦線」が提起されたのではなかったのか。日向氏は、その黒寛亜流の創造力なき諸文献のつなぎ合わせとしての「概念的把握の論理」とやらを捨てない限り八戦革党一労働者政治組織一大衆V図式を捨て得ない、つまり階級形成を政治的階級形成へ、階級意識形成へ歪少化するロシアマルクス主義一革共同、反スタ主義が陥った誤りを踏襲せざるを得ないのだ。ともあれ、「党一軍一統一戦線」の構造的創出が、「軍事をほらむ」党作りへ歪少化される時、△ブント一キム一大衆Vが旧態依然たる△戦革党一労働者政治組織一大衆Vへあてはめられた上で、その同一実体が旧来の政治的機能の他に軍事的機能を持たねばならないとされ、「反帝戦線はキムの戦闘組織としての表現」であるという、泣きたくなるような結論を産むのである。社学同→社学同武行隊と、キム一反帝戦線は空間

さて、△党一軍一統一戦線Vを階級の発現様式として把握し、構造的に創出するという、「綱領一戦略」の中心課題が欠落、無視されている故にダメなのである。左翼の実践的ロマンチズムが「死を嗜して」の水準で、ピタリと日本ロマン派に符号するという倫理的死美的死の円環を超えざるにこそ、私たちはスターリン主義一アークスマーファシズムを視てきたのではないのか。大衆を変える、否大衆が変わる△共同体的契機Vを見出すことが困難なので、(知的)大衆を美化するのは党を美化すると同じく私所有意識、意識における結合一確信論へ行きつくのである。

d 階級を創る「党」「軍」「統一戦線」の任務階級を創る、構造的に創るという時、二、三明らかにかねばならぬことがある。

「構造」という時叛旗三号で提起した世界の関係の把握に対する構造的把握という意味では使っていない。無論構造主義で言うような、現象学以降の枠組みとしても使っていない。強いていえば、「構造」的創出とは存在一思想総体の重層的、立体的一総体的創出である。

△党一軍一統一戦線Vを「構造」的に創出するとは、それ故第一にまず党から作るという発想と無縁であるし、むしろ軍事をほらむ党作り一レーニン主義と軍事の接ぎ木という展開とも無縁である。それは第二に、△党一軍一統一戦線V総

んだのはよいがそれが社会主義を実現する為に必要だとされる限りで、質の変化が問われず、「統一戦線」は旧来の「大衆組織」の革命戦争の時代の呼び方以上ではなく、「党一軍」への付録でしかないのである。

III 神奈川派の誤りは、「党一軍一統一戦線」を毛沢東を踏襲しつつ、「党一軍一革命戦争統一戦線」へアレンジして提起しつつも第一に綱領一戦略に無知な故、党一軍一統一戦線形成を政治的階級形成へとりちがえていること、第二に時間一空間と階級の関連がわからぬから、黒寛の認識へ実践を置き変えれば党一軍一統一戦線、特に党の実体としての軍の中で共産主義、永遠の今が実現するというオプティミスムへ陥ることを指摘しておいた。神奈川派が毛沢東から学んだもののうち評価しうるものは「人民の側に立つ」という基本姿勢であるが、これも理論戦線派の「政治に軍事は従属する」という強弁に屈服していったのである。

IV 仏派は、党一軍一統一戦線を「党組織の内部構造」として把握するが、それが必要を根拠を時代の要求でしか答えられず、それ故内部構造は平板的な任務分担にすぎず、つまり階級総体の構造、発現様式、と「党一軍一統一戦線」の関りの差はついに問題意識にも上らないのである。

V 理論戦線派、特に日向論文(理論戦線九号)は、上述

的拡がりの差、革命戦争をやるという意志一致の有無の差にすぎなくなるのである。

同一実体が政治機能と共に軍事機能をも担うという時、政治と軍事の基本関係も、感性や意識の関り方の差にも気付くはずはなく、「意識上昇→軍事遂行」という自然成長性への拜跪しているにすぎず、その不足を「情念」の空気入れ、お山の大将、おれ一人で補足し、「党」への帰依で「軍事」を行なうという「革共同+軍事」の現代的表現へ至るのである。実践しないロマン主義者が、自意識や心情で開鎖的に自己保持するという日本の変型は、党派闘争ずきの権力闘争嫌いとしてここに第二革共同として増補されたのである。

VI 赤軍派は、世界党一世界赤軍一世界革命戦線の位置づけ、内部関係については不十分な展開しかしていなかった。一向健等は、頭のみ、つまりアジテーションやスローガンのみ「世界」へ移行する、つまり「世界党一世界赤軍」と日本の私たちが同心円的に拡大してゆくという発想が顕著であった。花園紀夫の「自由への道」はこの点の総括としては評価しうる。しかし、平和的大衆闘争と武装大衆闘争の二元論から結論される、従来の党を捨て、軍を採るという組織路線は、「戦旗」派が言うような「党なき軍」その純化だからだめなのではなく、軍事をその階級性にお

三者に私たちを含めて、昨秋一今春へと深化されてきた
△党一軍一統一戦線▽への完全な否定である。自己の歴史的境界については思い切りよく総括すればよいのに日向氏は弁解がましく、レーニン+藤本進治の黒田寛一風理解||理論戦線七号運動組織論に、軍事をプラスして事足りりと強弁しているのである。

九回大会における「軍事をほらむ党」論こそ、十月闘争の敗北の過程で、レーニン党+軍事の接ぎ木として反省され、「党一軍一統一戦線」が提起されたものではなかったのか。日向氏は、その黒寛亜流の創造力なき諸文献のつなぎ合わせとしての「概念的把握の論理」とやらを捨てない限り△戦革党一労働者政治組織一大衆▽図式を捨て得ない、つまり階級形成を政治的階級形成へ、階級意識形成へ至少化するロシアマルクス主義一革共同、反スタ主義が陥った誤りを踏襲せざるを得ないのだ。ともあれ、「党一軍一統一戦線」の構造的創出が、「軍事をほらむ」党作りへ歪少化される時、△ブント一キム一大衆▽が旧態依然たる△戦革党一労働者政治組織一大衆▽へあてはめられた上で、その同一実体が旧来の政治的機能の他に軍事的機能を持たねばならないとされ、「反帝戦線はキムの戦闘組織としての表現」であるという、泣きたくなるような結論を産むのである。社会学一社会学同武行隊と、キム一反帝戦線は空間

さて、△党一軍一統一戦線▽を階級の発現様式として把握し、構造的に創出するという、「綱領一戦略」の中心課題が欠落、無視されている故にダメなのである。左翼の実践的ロマンチズムが「死を踏して」の水準で、ピタリと日本ロマン派に符号するという倫理的死||美的死の円環を超えろ為にこそ、私たちはスターリン主義一アーキスム一ファシズムを視てきたのではないのか。大衆を変える、否大衆が変わる△共同体的契機▽を見出すことが困難なので、(知的)大衆を美化するのは党を美化すると同じく私所有意識、意識における結合||確信論へ行きつくのである。

d 階級を創る「党」「軍」「統一戦線」の任務

階級を創る、構造的に創るという時、二、三明らかにおかねばならぬことがある。

「構造」という時叛旗三号で提起した世界の関係の把握に対する構造的把握という意味では使っていない。無論構造的主義で言うような、現象学以降の枠組みとしても使っていない。強いていえば、「構造」的創出とは存在一思想総体の重層的、立体的||総体的創出である。

△党一軍一統一戦線▽を「構造」的に創出するとは、それ故第一にまず党から作るという発想と無縁であるし、むしろ軍事をほらむ党作り||レーニン主義と軍事の接ぎ木という展開とも無縁である。それは第二に、△党一軍一統一戦線▽総

体を、社会的階級へ向けて自立した△階級を創る▽であり、党軍、統一戦線、各々への現在時点からの関りの差を明らかにし、総体へ答えてゆくことに他ならない。

党一軍一統一戦線は、社会的階級へ至るまでの、政治的階級、経済的階級が自足性を解体されるまでの、即ち世界プロ独迄を射程にした組織戦略である（四号参照）。世界プロ独へ至る歴史を輪切りしてみる時、社会的階級、個別的共同体的意識、関係、所有への階級総体の思想一存在の成熟度が、△党一軍一統一戦線▽の質を定める。

「階級発現様式」として党一軍一統一戦線を把握するとは、第一に社会的階級の入り口、世界プロ独に至って△党一軍一統一戦線▽は階級の完全な総体的内容をさし示し、世界プロ独↓社会主義の過程は△党一軍一統一戦線▽の構造を解体させる社会的階級形成一階級の止揚へ向けた、死滅しつつある党一軍一実質を得つつあるソヴェトが階級発現様式である。

第二に、世界同時革命戦略、中央権力闘争一マッセンストライキ運動戦略と共に世界プロ独へ至る組織戦略が党一軍一統一戦線である。この時、戦略実現過程は、既成の政治的階級や、経済的階級に対して、私たち、一党派の理論、非合法軍組織、私たちの空間的影響域総体が△社会的階級▽への過渡にあるというひとりよがりの発想展開は誤まりである。△階級▽を創るという時、政治的階級、経済的階級総体を含

へゆずるのである。

又、半合法や非合法の時代に突入するが故に、かえって日常的な合法闘争、組織領域の拡大、個別闘争への最後まで執着が問われ、市民社会内の「政治的でない」アジテータ、オルガナイザー、小共同体の掌握者を必要とするのである。

つまり同一の生活感覚や発想を持つ部分の、共に闘かい肩組んだ同志の、生活経験とともに持つ地域住民のゆるやかな共同組織の総体として統一戦線が要求され、その領域での組織メンバーはそのように希むのである。

○ 綱領と軍規律と生活倫理

党一軍一統一戦線を、構造的に創出するについては、旧来の党↓活動家集団↓大衆組織が「戦略内容の一致」で結合しえたのとは異なり、組織原理、結集環の分化は必然である事が前提され、明らかにされねばならない。

旧来の全ての左翼の綱領一戦略観念の誤まりは、戦術↓戦略↓綱領を、時間、空間的領域の、しかも党的「認識」の拡大としてしか位置づけ得ない所にあった。「綱領」域へ問題意識もひっかからない他党派は、むしろ「軍事」問題へも決意一般や政治技術的に対応しか為してはいない。しかし野合戦旗派は上述の綱領一戦略把握をする故に△党一軍一統一戦線▽について、新しい問題意識を古い類型へはめ込むようにしか理解しえぬのである。△党一軍一統一戦線▽を了解し

んで△階級▽へ成熟させるといふ事であり、私たちはこれら既成の政治的階級（党派+活動家層）、経済的階級（組合+組織、未組織労働者）とは別の立脚点から歩むという事である。

以上は△党一軍一統一戦線▽を何かしら野合旗派のように現在のポイント内各機関を党、軍、統一戦線へ振り分け世界党一世界赤軍一世界反帝統一戦線へ一歩近づいたつもりで二重化したり、旧来、私たちに存した世界プロ独の彼方へ党一軍一統一戦線を押しやって、現実の組織構造との関連を明らかにしてゆくことを面倒くさがる傾向に対しての老婆心である。

政治的階級、経済的階級総体の止揚、転質、熟成として社会的階級があり、それへ私たちは政治的階級へのように意識から、経済的階級へのように生活の必要から近づく、意識過程からは党へ、行為過程からは軍へ、日常、生活過程からは統一戦線へ、つまり私たち自身の存在一思想総体から近づくかんとしているのである。

階級を創る「党」、構造を造る「党」の任務とは、△党一軍一統一戦線▽を創出せんとする私たちには、綱領問題と非合法軍事への回答として純党活動、中央機関活動としては相対化、限定される。

そして、日常的闘争方針や党派闘争、戦略戦術問題への理論的、組織的回答を、地区党、ソヴェト軍へ向かう行動組織えず、旧来の党組織実体が軍事機能を合わせ持てばよいと考えている理論戦線は日共一反スタ、新左翼と同じ水準であり、問題外であるが、仏派の党組織の内部構造としての△党一軍一統一戦線▽把握（「鉄の路線」P六五）などは、善意の結論がいつか来た道へ回帰する典型である。そこでは、△党一軍一統一戦線▽総体が、「党」なのであり、全てが綱領一戦略の一致を結集環とされるのである。それならば、わざわざ党一軍一統一戦線などと言わず、中央地区機関一軍事委員会一統一戦線対策部と、党の各部署の名称に従っておればよいのである。

関西派、神奈川は、「軍は綱領により結合するのではなく」との正しい問題意識を持ちつつも、結局の所、赤軍一党の軍隊とか、党の実体は軍であるという実体的把握に留まり、同一組織体が党としては綱領で、軍としては規律で結合するという二面論に転落し、それを補完する為に心情的に党員皆軍論を、党の姿勢として呼んでいるにすぎない。

一 私たちは諸々の新旧左翼と異なり綱領を階級闘争の時間性の抽象として考え、戦略を階級闘争の空間性の抽象として考えた。

それ故、私たちが綱領という時、「党派の私所有意識」のレベルでのこれまでの「党派性」の基準とは別の所にヴェクトルをすえており、そのような現在の小「認識」の

差に固執する党派―諸大衆組織が、解体され、組み込まれ、かつ諸個人として活性化する（共同体―共同性）の社会的階級への洞察をいっているのだ。「党」は「綱領」により結集するがそれはかかる党の相対化の了解の上に成立しており、「軍」や「統一戦線」がその保障をなすのであぬ。「党」は、八階級Vのトータルな意識過程の発現であり、その水準を人類史へ飛躍させることを希み、かつ持続するのである。

II 戦略は、空間性の抽象として、世界プロ独までの時間―空間構造の中で、世界同時革命―中央権力闘争・マッセジストライキ―党・軍・統一戦線として展望される。ここでいう組織戦略としての党―軍―統一戦線は、世界プロ独へ向けて、形成される、形成せんとする組織構造である。党―軍―統一戦線が、丸ごと戦略内容を結集環に形成されると錯覚してはならない。戦略はその時空の最高表現としての「世界同時革命」のレベルで軍（や統一戦線）の結集環をなすのではなす。

そのような獲得目標へ至る組織性、集中性として、つまり戦略の遂行過程の共同体的契機の前規範的表現として、幻想性へ疎外されない共同体の規律として、間接的に「軍」の結集環を為すのである。

「軍」の結集環は「規律」であり、これは戦略遂行の為

の理論闘争主義としてどنگりのせいぐらべ、一番争いでは不可能であり、組織構造の等質化が前提である。等質な組織構造による、否それへ向かう、共同闘争の保障の上に立ってのみ、党派間統一戦線はその空間的ひろがりや階層間統一戦線を形成し、保持しうるのである。

旧来、ソヴェトは統一戦線の最高形態として、党派代表+地域代表+工場代表の構成で把えられてきた。

党―軍―統一戦線で把えられる統一戦線とは将に、この党派間統一戦線と階層間統一戦線の地区―居住区的結集、権力奪取後のソヴェトを指しているのである。

ソヴェトは、党派にとってみれば、直接民主主義下で、その力量がもろに表われる権力闘争をめぐる党派闘争の場である。しかし、ソヴェトの結集環は「バンと土地と自由」であり、それを防衛、維持してゆく為に「ツァー打倒」は掲げられたという事を銘記しておかねばならない。

「統一戦線」の結集環は、小共同体の「生活倫理」である。それは、日本においては、まず市民社会内における家族と職業人の、つまり擬似「共同体」における内と外に立ちあらわれる二重性の、又对国家関係における国民と民族の、つまり擬似「共同性」における内と外へベクトルを異にして表現される二重性の四者が核家族化、コンピュータシステム、既得権解体、国益主義に雪崩を打って解体する、

の最低限の禁止事項を中心とする共同体ルールでありかつ、民衆の共同行動の慣習的集団原理の明文化である。

III 「統一戦線」の結集環は、通常の八党―大衆V観からする、綱領―戦略の低位の戦術などではない。つまり高い、目的意識の水準に対する、低い、自然成長的な意識水準にあるのではない。軍の「規律」が綱領と異なり、認識域ではなくて「行為の共同性」の組織原理であったように、「統一戦線」はその結集環、その出生地を、社会―生活過程に求めるのである。

ここで「統一戦線」の旧来的理解と、八党―軍―統一戦線Vが示す統一戦線との差と、独自内容を明らかにしておきたい。

統一戦線は、これまで党派間交渉が先行するか、形式上共同行動―統一行動を前提とするかは別として八党派間統一戦線Vとして理解されてきた。しかし誰も納得しうるように、新左翼統一戦線は、「三派全学連」「反戦」「全共闘」等の合法、半合法大衆組織、維持、運営を第一義とした結合であり、自然成長的大衆闘争の停滞（むろん党派力量の限界が反映しての）と共に、大衆闘争機関の党派系列化、無原則的党派闘争の持ち込みと組織分断化に至ったのである。だが、「戦略」的一致を克ち取る本来の党派間統一戦線は獲得目標になるであろうか。諾、だが革マル風

その地点で自己の（共同体―共同性）を持続させてゆく志である。

第二に、小共同体―共同性相互間、異種共同体―共同性相互間への交通、領域拡大を、自己を保持しつつ、自己に對峙、敵対するものと、相互浸透し、転変させてゆく共同体的契機の抽出、普遍化への自己に蓄積した時間の外への放出の拠り所である。

「軍」の規律は、共同的申し合わせ、対権力への共同性の保持、自己増殖にあるが、「統一戦線」の生活倫理は、申し合わせ、規範のもう少し下方の個と家族、小共同体、自然的集団を結ぶ内的時間の凝縮度、内的時間を外的時―空との「関係の革命」へ向かわせしめる生―意識的自然死への反撃力である。「生活倫理」は、その最低辺で内的時、空の黙した拡大、持続の根拠をなし、その最上部で世界、社会を引き連れんとする「綱領」のほむらと切り結ぶのである。統一戦線（↓ソヴェト）を私は民衆のエナジーの根を掘り、その奔流を受容する、自己変転しつつある八共同体―共同性Vの視座と射程で理解したいと考える。

ハ 今、何から始めるか

本誌は理論機関誌である。当然同盟内外に公開されることを前提としている。私たちは、政治集会でRGを紹介した野合戦旗派のようにオプティミストではない。ここでは、日本新左翼

総体が「党」大衆「構造」を解体、止揚する為、「党」、「軍」「統一戦線」各々へ向け何を準備すればよいかを、メモ風に明らかにしておきたい。綱領「戦略的位置づけ、問題意識の展開」について当面、「叛旗四号」を参照して欲しい。

a 党について

「党」統一戦線」の主要な先行的環たる「党」に要求されるのは以下である。

i 中央機関の純党活動として最低限要求されるのは、第一に綱領内容の深化、綱領論争の組織化であり、第二に六八―六九年の対権力闘争、社会拠点闘争の二重の敗北を突破する非合法政治的軍事の長期的恒常的準備である。第三は全国的に組織される政治的焦点の闘争、全国差別の闘争へ対応しうる統一戦線、青学特に労対活動である。

第一については、「綱領の明文化」を焦るのではなくて、綱領「戦略」の基本関係の把握、綱領域の確定によりまず全党派的綱領論争の土表を確定すること。次いで、外堀を埋めつつ、じわじわと核心への接近、肉付けを行なうことになる。綱領明文化へは「マルクス」や「帝国主義」から書き出す事を止して当面、試行錯誤的であれ個人論文の共同討論として進行させる以外ない。党派の私有物としての「綱領「戦略」」を排する以上、大枠の設定と、譲れない「かくめ」への思想的拠点から始めるのが迂回のように

みえて、最も近道なのである。

第二は、新左翼が如何に、人材的、資金的窮地に陥つていようと、万難を排して遂行すべき課題である。その準備、間接的協力、保障なくしては、如何に七二年沖繩返還、恐慌、予想での爆発を期待しようと、決して六七年―六九年の昂揚と低滞を、打撃力においても、波及力においても超えない事は自明である。

非合法軍事に対しては非力であっても、独力で調査、訓練、資金、調達、実践をやり切るという基本態度が最も必要である。指導部、活動家層も含めて、少数の戦後派、大多数の戦無派で形成されている新左翼は、戦後二五年の「平和」の時代に育ち、如何なる意味においても（経験的な武装、ゲバ、ビン+αを除いては）軍事に関して、教育、習熟、実践、経験を有していない。だが、私たちが直面している先進国、都市革命は軍事、交通、情報網の質においても、階級成熟と革命への契機についても、前人未踏の領域である事を考えよ。帝国軍隊や山林工作隊くずれに技術を拝受した部分は全て、技術物神や相互不信に陥り、あるいは前世代に喰いつぶされたここ何年かの経験を胆に命じて、未踏の領域への諸準備を直ちに始め、より進めねばならぬ。

第三については、本来の党活動で了解しうると思われる

ので省略する。

ii 党が、大衆の前に具体的に姿を顕わすのは、政治集会やカンパニア闘争においてでない「地区党」としてである。民衆の党に対する関わり、共同体的諸矛盾の摘出と解決を信頼を、その領域、密度を決定するのはひとえに地区党に関わっている。

旧来政治機関紙の主要内容となっていた、彼我の分析、全国的な政治闘争への方針、地区政治闘争や、諸々の社会拠点の闘争の方向の従示、等は各地区闘争報告等も含めて、地区党連合とその統轄機関で討論され、文章化され、自らものものとされねばならない。

地区党は直接大衆の前には登場しない政治、軍事、組織委員を要すると同時に、恒常的大衆行動機関、諸闘争組織、全階層へ深く、あらゆる地域へ広く、合法、半合法組織へ入り込み、開花させねばならない。

「党」統一戦線」への組織内分業は、中央機関における「綱領形成」非合法政治的軍事「全国闘争」とは別に地区党においては「戦略」に導かれた戦術提起「大衆的武装行動組織」地区評議会運動」等として為される。

地区党への現在の焦眉の課題は、中央「地区党」の、従来の合法政治新聞を媒介した系列化の解体、地区党独自の政治的、軍事的力量で合法、半合法闘争に対応しうる、組

織強化、個々メンバーの力量形成である。

中央機関「地区党」を含めての「党」の結果環は「綱領」である。より正確に言えば明分化されるその諾否というより「綱領」への姿勢である。それは旧来、市民生活の意識的否定と二四時間の党生活として扱えられたロマン主義、市民生活の維持、諸関係の持続を前提に考えられたプラグマチズム、党や組合の諸傾向と異なり、その組織成員各自の「存在」思想「総体の共同体的側面を包摂し、短期の昂揚、退潮を了解し、かつ持続を保す契機としての綱領的ものの把握である。

選択はただ生へ賭ける事であり、そのことが死への道程をも明らかにするような、一回的な生が意味付与や死に急ぎでなく諸「関係」の総和として形成する価値の規準として、時間性が共同体的契機を媒介して、関係の革命、個的「共同体的所有」へ至る総過程の叙述「綱領」はあるのである。

綱領への接近は、生き方、死に方の規準を、「自然」如何に、何時より失われたか」を鏡として、個の自然への回帰の総過程を、沈黙の行為の、社会的共同性への欲求「意識的「自然」への執着へ置くという、様々な「体験」の對象化、あるいは自己の欠落が産み出す吸引力の持続である。ここが、自然的エネルギーの所在である。綱領試案の作成や、耐え方の選択は楽な仕儀である。

ルビコンはそこに、そしてここに在る。

b 軍について

私たちは、政治的階級と社会的階級の、区別と連関、現代的質に基いて軍事の二重性、非合法政治的軍事と大衆武装行動を区別した。ここでいう「軍」は後者についてであり、理論的には世界プロ独へ至って構造化される世界党―世界赤軍―世界統一戦線のうち、世界赤軍を、党の軍隊と共に構成するソヴェト軍（連合）である。

しかし、非合法政治的軍事は先行的に、綱領―戦略的結合を媒介に形成されうるが、ソヴェト軍、民兵は権力奪取前には実体的に形成されなす。

私たちは、「軍」への接近を、大衆の階級的成熟の視点から、行為の共同性に基づく団結が、国家を超える根拠を諸共同体間交通と、自然力の獲得として了解し、それへ最も近い団結様式を思想と権力闘争への回答の両者から提示する。

つまり、党―軍―統一戦線の「軍」は社会的共同性の表現、ソヴェトが産み出す共同組織である。

私たちが、今問うている「軍」は、旧来の活動家集団を、意識系列から解き放ち、諸産別組織の呪縛を解き、政治的階級の新たな登場様式の模索の行末である。「軍」は「行為の共同性」をその共同体的契機とし、「規律」をその結集環

（正確にはマイナスの結集環）として、当面大衆武装闘争を担う、行動組織である。それは旧活動家集団と、実体はダブル部分もあるがその共同体的契機結合環を異にし、新たな「規律」に基いて、まさきり一から形成される。

「軍」の結集環が「規律」であることは以下を意味する。

つまり、「規約」は必要条件の確定、戦略的一致を内容とし、恒常的組織の規準である。「規律」は第一に中心的には最低限の禁止事項にあり、禁止事項を破ったものは制裁が加えられるが、禁止事項の対象となる領域外では個々人の恣意、自主性は全的に保障される。第二に、「規律」は禁止と制裁の關係である故、「軍」は組織体をなすが、基本的には加盟方式を取らない。地区党と結合した、諸階層参加の、地区的行動組織、これが政治的階級の新たな発現様式の一つ「軍」へ向かう大衆の共同組織である。

名称はともあれ、かかる「軍」は、地区政治闘争、社会的拠点での闘いの地区的展開、地区評議会運動の実体的推進力であり、そのようなものとして「行為の共同性」保持をなしうるのである。

c 統一戦線

党―軍―統一戦線に言う統一戦線はソヴェトの母胎、大衆の社会過程の矛盾をも処理する共同機関である。

私たちが、現在提起し、実現しうる統一戦線は、旧来の自

然成長的団結、あるいは権力に尻押しされた団結体としての、組合、自治会、農協、漁協等のいわゆる大衆組織を、その空間の主體的拡がりにおいて諸階層間結合へ導びき、その空間の客体的拡がりを経過的統合へ導びき、共同闘争機関より正確にはそのような共同闘争機関―地区評議会を形成する母胎の創出である。

「全共闘、反戦を地域―全国評議会へ！」のスローガンで示されるものが、その方向であり、むしろ止揚されるべき大衆組織には自治会、組合をも含んでいるのはいうまでもあるまい。

地域（区）評議会運動の形成のためには、第一に大衆組織の行動組織への再編が、第二に、行動組織間の地区的結合を可能にする連絡センターが、第三に諸党派の組織構造の均質化が不可欠である。しかし、地域（区）評議会運動の形成を推進するのは、「党」からする党―軍―統一戦線への提起であり、「軍」、行動組織の現実的、持続的努力であり、何よりも共同闘争課題の提起、個別課題の地区的展開の典型を、全共闘、反戦の敗北を止揚する方途を、行為の共同性の側から、その波及力を形成してゆく事である。

むしろ「階級を創る」こと、創る以外「かくめ」への前進はなすこと、このことのもっとも深き所での了解がそのヘナジの根拠になる事は言うまでもなす。

（この項―II章の3のハ―についての具体的展開は、政治機関紙を参照されたい。）

III章 「かくめい」をめぐる理論状況

本章で第一に共産同諸分派を中心とする「綱領―戦略」論争の現段階と私たちの水準からする批判、第二に政治へ一言いいたい知識層の、政治思想と倫理についての個々の批判を行なう予定であったが、量が膨大なもので、後者は全部体裁を変えて政治機関紙に連載する事にしたい。

ともあれ、問題点の所在と、私たちの批判への反批判を「行く手をさえぎらせなす」範囲で誌しておく。

一、「綱領―戦略」論争の現段階

「綱領―戦略」論争が非和解的に展開されているのはブンドのみである。諸党派は漸く階級形成論が過渡期世界論か、それぞれの形成過程に応じてどちらかに回答せねばならぬハメになっているが、いまだ「綱領―戦略」の所在をつかんではいない。ブンド防衛の一点で野合した戦旗派が内部調整不能となり、各々の対抗関係が結果的に「公開綱領論争」をもたらした事は既に述べた。

まだ野合戦旗（解体の日は間近かだが）内にある理論戦線、関西、神奈川、仏派、党内理論闘争とは一切無縁だった共産同再建準備委員会（情況派）を検討し、その後それなりの流派をなしている赤軍―花園、パルチザン―滝田に触れ、最後に新左翼の内

相互浸透、体験交流が可能な小數部分、私たちと共に三派全学連の大衆運動の底辺を支えてきた「遠くまで行くんだ」と「甦える不死鳥」グループをみとめる。

イ 理論戦線派―9号と大熊論文

理論問題を扱っているのは日向論文「革命論の構築のため」にだけである。

この論文の革マル型「党づくり」―「党―軍―統一戦線の清算の批判についてはII章で触れた。彼らの7中委の「青学組織委員会」提起に私たちを除いて、賛成し屈服した野合内三分派は日向論文を受け入れたのだろうか。日向氏が「軍事をやらむ党の構造」を理論戦線10号に再筆し「赤きテキサス」で神奈川を悪のレッテルである私たちと同じだときめつけねばならぬ程、分極化は進んでいる。「軍事をやらむ党」では絶対に、党―軍―統一戦線も、野合三派をやらむことは出来ぬことを日向氏は胆に命じた方がよい。

だが、日向氏が「軍事をやらむ党」をつまみ何事もはらんでしまふ「党物神」を捨てきれぬことは自明であり、それは彼を必然的に（自分でそう思い込んでいるだけだが）規定している「概念的把握」の体系的論理に基いているからである。はじめにロスありき、日向氏は移入マルクス主義解釈の第一人者、黒田憲一氏の方法を、革命運動に、軍事に適用せんとしているのだ。そのようなうさんくさい学問や、法律や命令や、書きもの等の自己を抑圧する外皮をおしのけつき破るのが軍事ではなかったのか

い。

ともかく日向氏は、自己の規準を学的体系に求める限り、決して本質へは触れえず、論理的自由の牧師の世界に止まり得るのであり、誰がどう批判しようと、自己の内実が解体しようとして認めない「事が出来るのであり、「わかるまでしかたがない」のである。

9号の過渡期世界論に関する部分「叛旗3号」の視点プラス、反スタで「客観主義―なくすしファシズム」への批判的展開をしているにすぎないので問題にしない。

ii 「構造12月号」に大熊五郎（神田社会主義研究会？）とてう男が「吉本の政治思想と二元的革命論」なる一文を草している。流し読みして驚いた、本文の9割が六月末以降「叛旗派の政治的解体のために」として「戦旗」紙上で4回連載された文章の丸写しである。

同一の文章を、「戦旗」「反帝戦線結成大会議案書」「構造12月号」と前書きや、章別を変えて転載し、しかも「理論戦線10号」にも載せると予告しているのだからうんざりである。構造編集部も読者もなめられたものだ。同じ内容と同じ口調でしゃべる事が「一枚岩の団結」だと思ひ込む、思想―感性の貧困がかかる事態を産み、容認させているのである。私たちへの党内批判の数々は「西日本反帝戦線合宿レジュメ」にしても「神戸大班意見書」にしても皆、文体、字句まで画一化されているのだからいやになる。

ともかく、私たちが学び、進んできた間彼らは「六月」に留ま

っているのだから安心なことだ。

「戦旗」の叛旗批判シリーズへのバカさ加減への私見は「今、我々に何が必要か」（構造9月号）で大方述べた。大熊論文も又「戦旗」シリーズと同じく ①「労働疎外論から唯物史観への発展」なる通俗的、エンゲルスのマルクス理解からする吉本の『カールマルクス』批判、②「大衆・インテリとは何の歴史的规定性、場所性、対象変革実践性を有していない」「主体」概念にすぎないというこれまた意識的対象化論の強調。③又、「政治革命と社会革命を二元的に措定したうえで、政治革命（幻想域での革命）―闘争よりも経済闘争―生活の革命の方が重要である」と言っているなぞと、吉本も私たちも言っていないことをデッチ上げて得意がったり、④吉本のレーニン批判はルカーチ批判としては、あてはまるとしつつ、どうしてもルカーチと「戦旗」との本質的区別を述べえず（ルカーチ―福本―黒田の系譜を諸君は円環しているから当然のことだ）、⑤又、又、私たちが「党の目的意識性が不断に、政治化されない限定された大衆、層のみの運動に対する運動指導、意味を付与すること（「啓蒙主義」）と位置づけているなど、誰にでもわかる無知をさらけ出し、⑥その結果「社会的階級への形成なる概念は、結局政治革命―世界プロ独を捨象して、経済闘争の延長に地域共産主義を、また社会革命を夢想する小ブルのロマンチズム、自己表出の「典型にすぎない」と結論するのである。

この、6項のいずれを取っても、とり上げるに値しないものである。ひからびた新左翼の常識で、産みの苦しみへ水をかけているに過ぎない。私の大熊論文への批判は、彼の文章の引用のためにスペースをさき、多くの諸者にその間抜けな宗徒ぶりを示す事で尽される。

彼ら理論戦線派は、自らの「学問体系」への逆立ちを反省する事なく、つまり何も創造も変革もせず解釈のみよくし、拙ない私たちの試みに対して解放派が「新語作りの叛旗」と驚く能力、その領域での感受性さえも持ちえぬのである。彼らを生かしているのが実は「学問体系」が何か共同体的契機を有していると言っている閉鎖的、良心的、知識人達である事を、思い知った方がよい。

ロ 関西派「烽火」

再刊1号で、読むに値するのは、思い出まじりの編集委員会巻頭論文の経済学に関する部分のみである。再刊1号で大木伸一という男が「叛旗派解体のために」を書いている。彼には①マルクスの擁護という「立場」そのものが保守的であること、

②平田清明批判に、手を加えることが私たちへの批判を深めるといふ思いがよい。私たちが批判している弱点を、その同じ個所を誤まって指摘しているにすぎないことを知ってほしい。

③私が「経済的階級→政治的階級→社会的階級」と階級形成を段階的に把握しているなぞと「うその発見」をしたり、それにもとずいてプロレタリアートの主体的側面が無視されるなぞと結論し

ているが、「わからない」のなら、無視するか、沈黙せよ、本當に心動かされる領域しか、「読んでもわからない」のは、私たちのコミュニケーションの前提である。

④市民社会と国家と階級の関係一つ、彼は「読んでもわからない」のは何故か。彼が強調するプロレタリアートの主体性、意識性の根拠たる普遍的命題、対象変革→自己変革という、意識的对象化論、自体を私が前提にせず、別の土俵に居るからである。武市健人を多少かじった位のヘーゲル理解で、読み方がちがうなぞと叫んだりするな。「かくめい」とは手前の鏡を見付けることから始まるのだから。

ハ 神奈川「左派」

彼らが、それなりに自らの抱えた課題を追及せんとする姿勢も、努力も「左派」には読みとれる。むしろ間違いが多いが、「理論戦線」の教科書通りの論述より「かくめい」へ近いのである。「左派2号」で面白いのは、共産主義論、1.労働→生産論(梯、黒田批判)、2.資本制社会と階級闘争(解党主義→叛旗派批判)である。「二心みておこらう」。

①「一人が百人のために、万人が一人のために」なぞと、前後関係なく歯の浮くような言辭を乱発しているくせに、彼らは「個別的共同体的所有→ブルジョワ自由主義→大衆運動主義」と苦勞して自分の井戸につばを吐くような批判をしている。概念の時間的・空間的水準と位相の差を「ことば」でつなぎ合わせる、こういう

のをみそもくそも一緒と言うのだ。

②彼らは、黒田寛一の「物質の自己運動」、平田清明の「共同体の自己運動を客観主義として等値し、平田批判を私たちへの批判にかえん」としている。

思いつきはいいとしても、(仮に立論が正しいとしても)「客観主義」に対するものは何だ。そこで彼らは赤軍なみのプロレタリアートの攻撃性の先驗に基づき目的意識をつまりは主観主義を対置しているに過ぎないのだ。

諸君は、日向氏と逆の立場、人民の立場から黒田寛一へ近づいた。だが、黒田寛一の、正統、反スタマルクス主義を貫通する主観→客観→対立そのものが意識世界の暗闘なのだという事を知った方がよい。私たちは、広松渉のように「エンゲルスの視点」からではなく、△党→大衆→論批判の視点でそのことを先述しているのである。

ニ 仏派「鉄の戦線」

こゝでも「叛旗派の根底的解体のために」だ。叛旗派との闘いは「かなり長期にわたる闘いとなることも十分に覚悟し」党建設へと立ち向かうだ。諸君の悲観的観測はあたった。「叛旗派」を解体するに至る長い闘いの前に「野合戦旗派」が内部崩壊の危機に瀕しているのだからな。

さて、彼らの珍妙極まりない私たちへの批判点をみてみよう。

第一は、綱領と戦略の垂離→二元論との批判である。彼らは、「

蒼の叛旗」を引用しつつ、「叛旗派は、綱領→時間性→共同体論→X軸、戦略→空間性→過渡期世界→Y軸として、綱領と戦略を二元化し、乖離したものとして把えるのである」とまとめ、「叛旗派のいう綱領とは、規定の政治的実践となんのか、わりもない、単なる思想レベルの問題なのである。…一方、戦略戦術は…技術の問題に落しめられている」と評価し、結論として「綱領→戦略をかく二元化して把えるが故に、戦略→戦術は大衆の自然発生性の動向によっていかようにもブレるのであり、…その日ごろしのプラグマチック集団になつてしまふ」と批判したつもりになっている。

最初の前半はよい、しかし何故綱領→戦略が「二元化し、乖離したもの」となるのだろうか。それはこの真面目バカが勝手に「幻想」を創り上げ、解釈しているからなのだ。私の綱領→戦略規定を、図示したとするグラフ(こゝで見せられぬのが残念だが)がその表明である。書物に棒線を引いて世界を理解するとはまさにこのことだ。わざわざ歴史を「Y→X²」のプラスの放物線へ向けて想定し」と私が書いたら、真面目バカはY→X²の丸ごとの放物を図示してみせた。まず、マイナスの時間とは何だね、外的時間→空間のはさまで説明してみろ。次いで、諸君の、私への「綱領と戦略を二元化し、かい離したものとして把える」との批判を、諸君のグラフ自体が裏切っている事に気がついてはどうかね。放物線自身が、そのどの一点も時間度→空間度に規定され、特定されその連続としてあるのだ。直交するX軸、Y軸の設定そのもの

が既に二元論を拒否しているし、私は時間度、空間度の肉付けを、人間の自然―自然的人間への過程として放物線を想定したのだ。

イメージ（空想ではないのだよ）をイメージで超えることも、現実的根拠を掘りくずすこともせず、書かれたものを自分の尺度で解釈する学者馬鹿に諸君はなり下がったのだ。新らたな領域を知らしめられたら、少しは思いを凝らしてみたらどうなのだ。諸君は二元論批判（間違っていることは証明済みだね）を思いついたが、まともに時間についても空間についても、何故外的、内的と分けたり、時間度、空間度の規準を設けたりしたのか、綱領―戦略の関わりについても考えたこともなく、ましてや何故にそういう発想が生まれざるを得なかったのかなぞわからず、わからうとせず、否了解する手だてをもち合わせていないのである。

諸君は「価値論に基づいて、資本主義↓社会主義までを一貫して見通すことができる。」のだから、思いつきであつても、マルクスやレーニンの文献整理でなくて、自己の持続力で回答してみよ。時間、空間をとり込めない流布された「労働価値」論の先は見えているが、そのことに諸君が、気づき、体験する所から、思想も、綱領・戦略の領域も開けるのだ。理論戦線派のように、そう思ってもいないのに、カッコイイ事へ助平根性をそゝられるという風でなく、諸君が真面目である事は認めるが、平面ガエルの馬車馬政治こそがプラグマチズムの日本的根である事を反省した方がよい。私たちは共産同に居つゝも、その領域に関して断呼として

て容認しえぬのである。彼らの解体は私たちの責務である。

― まずしくとも自分の歌をうたえ。

「ローテ」に対する批判はこれに尽きる。

「情況」派の政治は趣味の政治である。趣味の政治を生かしているのは、知的大衆である。闘いの腐肉に群がるのは、敗ける闘いは止めようという合法集会、統一戦線指導部と、自ら闘い得なかった、なすことなく生きのびてしまった見学連である。

自らの特に、11月闘争への関わりは深刻な（そのはずである）総括を抜きにして、一年のち沖繩国政参加阻止闘争に便乗して空疎なアジで埋まった「政治新聞」を発行し、新左翼市民権を得ようという下司な根性はその表明である。

「ローテ」を見てみよ。そこにはアドバルーンを上げ、集会を設定し、他人の闘争を俺がやったといひ、「党派幻想」をまき散らしての人集めの素材しか書かれてないではないか。

『叛旗』を都合よく引用する前に、自分たちは何故『叛旗』に関わったのか、どこで対立した故分離したのか、つまり自分たちは『叛旗』ではないVという宣言から始めよ。執筆においても思想的政治的責任においても諸君と無縁な『叛旗』を引用する事を恥と思え。「戦略―戦術は階級―人民のものである」（ローテ2号）などとはざくなら、そのような意志表明こそが階級への責任のとり方（党派をなり立たしめる最低の倫理）だという事位わかりそうなものだ。

批判してきたのだ。「野合戦旗派」は新左翼に冠たるプラグマチスト連合ではないのかね。

仏派の私たちへの批判はその基礎視点が以上のように誤っているから第二の過渡期世界論、第三の組織論批判もまるでの外的の恥の上塗りではない。市民社会―政治国家の成熟がわからねば私たちの過渡期世界論はわかる訳がない。「前衛―大衆」と「知識人―大衆」の区別は共同体論の前提である事は私たちにとっては常識である。ともかく私たちは諸君たちとも遠いのである。

ホ 情況派―新聞「ローテ」

旧「情況」派が共産同再建準備会を名乗るに致るハレンチな経緯については「叛旗5号」で詳しく触れたが、どんな小闘争にも出てこれない彼らが「ローテ」なる発行所不明の新聞を出している。

政治思想的にも社会的波及力においても、心触れる独自性も、有無を言わせぬ力量をももたず、戦旗とも私たちとも遂にまともな論争―闘争をしたこともなく、逃亡した結論がこれだそうさ。そう言う事態を惹起した総括も、はじらいさえもなく出されたアジ新聞「ローテ」は形成過程、内容共にプラグマチストに見合ったものといえる。

私たちは、彼らと、かつて対「戦旗派」統一戦線を組んだ事のいたみを階級闘争に関わる限り永くのみ下す事は出来ないだろう。ましてや彼らが「ローテ」を叛旗正統派の機関紙などと売り歩き、私たちに恩を仇で返すに至っては、その火事場泥棒の品性からし

ii 「ローテ」の中味から私たちが何も学ぶものはないことを知らされる。彼らが私たちに接近していた間に身につけた衣服は、彼らのうすよごれた寝間着とおきかえられ、私たちが彼らに批判してきた欠点はそのまゝ残有しているからだ。もとのもくあみとはこのことだ。

彼らには元々思想的結合なぞありはしない、「政治」をしやべったり、ボス交したり、指図したり、つまり「政治的であること」を好んでいる丈なのである。その意味では情況派は、『叛旗』からの脱落分子ではなくて、「戦旗」からの脱落分子である。「戦旗」を革マル的と批判する彼らの顔付きが、自ら手を下さずに党派軍団批判をやっている構改派に似てくるのはそのためである。

彼らは、当面「八派」よりも全共闘、反戦、平運を隠れみのにした方が生きながらえうるといふ判断のもとに、知的大衆に迎合し、彼らを生かす「政治」へ高めるために『叛旗』のことは、ことばだけを集めるために利用しているのだ。

松本礼二は「都労活」での醜態を省みて出直すがよ。

iii 「ローテ」（1号、2号）の中で唯一理論的文章である社会学同論文に即して、変節と天の古巣に帰る道筋をみておこうか。

11月戦闘団提起の際、「党―活動家集団―大衆組織」に固執し、レーニン型組織論の立場から産別社会学同の継続を主張した彼らが、「意識の系列化―認識における組織化の否定」を語りはじめた。ではどこへ行くかという、その根拠を「現実の世界と社会構造と、そしてそのなかでの大衆反乱の様式と質」に求め、党派すき

から「反乱大衆」すきに逆転した丈なのである。

「社学同全都協議会を二、三校でデッチ上げることが、「腐敗しつゝある八派政治への訣別の状となる」だって、彼らは二重に誤まっている。第一「社学同」全都協なるものが、八派の共通構造、△党―活動家集団―大衆組織Vへの又、階級別同盟への逆転、であり、地区運動にも軍事にも答ええないこと。君たちはレーニン組織論を否定したのではなかったのかね。

第二「八派政治への訣別」だって、まるでカメレオンなみだ。統一戦線を組織決定に優位させ、他党派の顔色伺いをその身上とし、「統一戦線を媒介した政治へゲモノーの浸透」を語り、八派間統一戦線を大党派のエゴイズムが解体させた故に10・21は敗北したと、総括したのは諸君ではなかったのか。11月闘争へ向け、武装軍団よりもまず統一戦線の再建を、全共闘、反戦への方針をと語り、双方共為しえなかったのも又諸君ではなかったのかね。

彼らの変節は、技術的なものである。それ故「八派」批判をしていても、戦旗が弱体化すれば旧右派連合を目論んだ共労党など手引きされて「新たな統一戦線」などとせり出してくるのを見えている。「八派」を運動論的に批判するならそれを生かしている「反乱大衆」にこびを売るな。「八派」を理論的、思想的に批判せんとするなら、自ら首くられて組織を解体させる覚悟やれ。八派に寄生しての、全共闘くずれや大向うのくず捨いは止めよ。

さて、内容の批判点を明らかにしておく。

I 彼は前段階蜂起路線は、旧来の政治過程論的政治路線と、まだ見ぬ革命戦争路線の折衷であるとし、その清算と、革命戦争路線への一元化を結論する。又、組織路線において、古ぼけた「マルクスレーニン主義党」と新しい組織「中央軍」の二元化を総括し、自ら新しい党形成過程である中央軍へ統合することを結論する。

自他共にキューバ革命、ゲバラ||カストロ路線への回帰と認める結論だけ批判するのはやさしい。これについては「叛旗3号」で触れておいた。

私たちが、気にかゝるのは、平凡な結論の背景についてである。政治路線についていえばインターナショナルリズムの理解について世界を戦場にするインターナショナルは現に存在し闘っているという事態へのオブティミズムがある。ゲバラ路線は勝利しつつあるか、否68年以降敗け続けだ。世界の農村と世界の都市を革命戦争で結合させる要こそが、ナショナルとインターナショナルのからみに存するのだ。ハイジャックがもたらしたのは国際主義の発見（それはしゃべっても、見ても聞いとは別の位相である）などではなくて「行為の共同性」の衝撃力を、空間的に最大限拡大させたという、党派と人民、大衆との交通形態の高度化である。組織路線についていえば、旧い党と新しい軍の折衷への指摘は正しい、理論戦線の「軍事をはらむ党」が横行している現在、有

IV 従来「情況」系の悪しき傾向としてあった「個別闘争の政治闘争への引き上げ」論は更に悪く踏襲されている。彼らは、野合戦旗派等が「あるべき未来」から現在を見、身尺に合わぬ部分を切り捨てるのに対し、現在から、つまり姑息な現実の全面肯定を、大衆||階級とおきかえて行ない「彼らは革命を望んでいる」はずだから、結局政治が悪いのだという事を知らしめ、カンパニア集会へ、党派へ参加させようとしているに過ぎない。それは、彼らが反乱大衆を語っても「共同体論」がわからない、という事の証明である。そのようにして人集めをしてどうするのだ、何をやるのだ。昨秋11月へ賭けえなかった諸君が、「10・21闘争から11・15「国政参加」阻止の闘いへむけて、自己の再生を賭ける」(ローテ2号)という時、何事もなせず生き残った現状をどう説明するのだ。白豚は白豚の道を歩む、ということがね。

へ 赤軍―花園論文

赤軍兵士、花園紀夫が「構造12月号」に自由への道―前段階蜂起の総括―を書いている。書く事については得手でないこの男の総括は、かつての一向健や、書きまくっている佐野茂樹、八木健彦等の誰のものよりも密度の高い迫力を、つまり紙面の裏の凝集力を感じさせた。同一内容の作文を鼻立ちを変えて四度売ろうとする戦旗系「大熊論文」が併載されているからより対照的に見えたのかもしれない。

効である。だが新たな領域を作る軍が問題なのだ。作ることが第一である。しかし軍と階級の基本関係が明らかにされぬ限り

「兵士」の規律は、世界革命戦争を語るほど、日本武士道へ「ものふの志」へ回帰しそこを越ええない、明治維新のレヴェルを越ええないのだ。

II 彼の本音はそれ故「敵を愛をこめて殺すこと、かつ自己の死を芸術家の愛をもって受け入れること」に戦争の芸術への志向にある。戦士達の覚悟と「葉隠れ」が袖すりあう地点、そこをのり越えねばならない。

赤軍の課題は、実践的ではない、思想的に2・26を北一輝を越えることにある。彼らの国際主義、プロレタリアートの鏡は、鏡のまゝに自分を写す、しかし自分が、そのようにする方向に歪められてである。

問題は「自然」過程に、美を産み、死を指す意識が「共同体の契機」を共同化しえぬ所にあるのだ。

ト パルチー滝田論文

関西ブンドに居た滝田修が「赤軍」へ行こうか、残ろうか、たまたま昂揚局面の京大闘争、ついにパルチザンを作った。この一年半、あきずに「暴力論」を書いているが、出遅れた故に、捨てきれない、拾い集めるから爽雑物が多くなるのである。全国全共闘は八派野合の産物だとする指摘は正しかったが、さてどうするか

を一寸も示しえなかったのは何故か。助手の位置で学生運動に関わり、党派でも、大衆組織でもないさりとて、自立組織でもない、「パルチザン」と彼の不安定な位相に拠る。この人は、学生と肩寄せ合い、その意味での大学へのもたれかゝりをなくさねば、思想表現も政治表現もダメになると私は、多少のつきあひから今考える。

Ⅰ 「序章3号」で滝田修は「暴力考」を書き、昨秋闘争以降の諸党派の退廃を、暴力（軍事）力量形成を宙吊りにしたまゝの、現代投降派へ革共同反スタ潮流と現代逃亡派Ⅱソヴェト「運動主義」潮流と区別して嘲笑している。「それはいゝとして、お前は？」ゲバルトの側に身をおいているなら、そのことを語れ。「政治」を不足の指摘で、ことばで（暴力ということばもある）批判する姿勢を拒否せよ。そこが出発点だ。

Ⅱ さて、彼が「いちばん大切なこと」という暴力（軍事）力量の形成には、赤軍Ⅱ解放軍の結着づけの絶体的暴力Ⅲとしてという限定、結論がついている。赤軍と異なるのは、暴力を、師藤本進治の手法を使いつゝ展開する（起源としての、生成の暴力Ⅱ本源的暴力Ⅲと（疎外・展開段階における諸暴力Ⅳと（結着づけの絶体的暴力Ⅴの区別と連関の視点である。しかし、暴力の質の歴史的転変を語るのには、国家論における「国家と革命」への回帰、一つの視点を挙げた暴力史観をしか、意味しないのではな

いか。

タイトルを付して刊行された。

Ⅰ この分派結成は①分派の軸を自らの出生基盤Ⅰ滝ロイズムⅠの批判的検討と模索に求めていること、②当面社青同内分派闘争から進行させること、の特徴を有している。

「三派全学連」は66年12月結成後、1年足らずで解体した。三派連合はその後68年4・28を前後して五派Ⅱ六派Ⅲ八派Ⅳへ拡大し、69年9月全国全共闘を首導するに致った。

しかし、「三派全学連」は、今本当の意味で解体したのだ。三派時代、「宗派的利益よりも階級的利益を重んじる」という意で民青、革マル、右翼に対してゆるやかに連合していた、三派大衆運動主義グループが、所属組織から脱盟、党内闘争、分派を通じて、自己の政治思想の所在を明らかにすることによって、だ。全共闘の解体の秘密は三派全学連の解体にあった、そして八八派Ⅰ全共闘Ⅱ運動、組織構造は、かかる大衆運動主義グループを圧迫し、敵対者へ追いやることによって、ボス交、根回しと他党派解体戦術を三派が学び革マル化あるいは構造化してゆくことよって形成と同時に解体したといえる。

ともあれ「甦える不死鳥」分派は、第一点において、革共同の根底的敗北の確認から出発した中核Ⅰ小野田派と類似しており第二点において党内Ⅰ分派闘争の公開化として私たちに似ている。しかし、彼らが、今の所社青同内分派闘争を、現在の階級闘争総体のつまり、八党Ⅰ大衆Ⅱ構造の止揚へ迄煮つめて展開しているとは

そのことは、第二の暴力を「下部構造生活局面の矛盾の激成とそれによる上部構造への反乱」の位相でとらえ、その次元を超えらるものとして、第三の暴力（赤軍Ⅱ解放軍Ⅲの先駆的形が語られる所にも伺えるのだ。第二と第三の関係はと考える時、藤本進治「革命の哲学」の党形成論Ⅰ媒介と独自性がほのみえてきた。党と大衆を「暴力的形態」から把握すること、それは八意識の結合Ⅳに八行為の結合Ⅴをおきかえ、双方を活性化させるが、決して

八党Ⅰ大衆Ⅱ構造は止揚されないのだ。

Ⅲ 「赤軍Ⅰ民兵」の関係を明らかにするには、暴力を「行為の共同性」の視点からその階級性を明らかにする以外ないのだ。上述の「下部構造生活局面の矛盾の激成と上部構造への反乱」が古ぼけてくるのはそれ故である。誰が矛盾を激成させるのかと問う時、滝田の位置は暴力の「小商人」に在るのである。共産主義の流通構造を八生活空間Ⅱ政治空間Ⅲ暴力空間Ⅳ三者の吸引と反発のダイナリズムⅤという時にも、暴力空間Ⅲ生活と政治の外にあるものとする時、たやすく実力を持った目的意識性へすりかえられてしまう、つまり、生活空間から暴力が疎外されてしまうのである。政治・生活・暴力における時間Ⅰ空間構造の変質には既に触れた。

チ 「甦える不死鳥」所見

社青同解放派の早大グループを中心にして10月に「甦える不死鳥」創刊号が、Ⅰ解放派復活の諸問題Ⅰというサブ

いえない。内容を問うてゆきたら。

Ⅱ 第一に「滝ロイズム批判」についてである。出生地への訣別点

は新たな出発点でもあろうから。「革命的マルクス主義の旗を奪還するための闘争宣言」（解放6号）に象徴される滝ロイズムを評して、彼らは言う。①滝ロイズムは革共同的「政治」への「社会」存在、実践、大衆、生きた諸個人、自立Ⅰからする批判を出発点にしたため、過程的に国家が抜け落ち、プロレタリアがスマートに理念化された。②滝ロイズムの論理的性格は、純粋化論であり、「時間」「本質」へのオプティシズムに貫かれている。③滝ロイズムは、「プロレタリアート」及び「資本」が抽象化され「理想化」されているから、戦略論が立たない。④滝ロイズムの基本性格は「プロレタリア（統一戦線）」の安売りであり、フォイエルバッハ主義、本質頭元主義、労働派マルクス主義、総じて、近代主義の枠内にある。

以上は、八滝ロイズムⅤへの批判としては一応正しい。立脚点、視点は異なるが、私たちが三派全学連以降①には、革共同批判が、上から対する下からのプロレタリア党形成にすぎぬこと、②には、革共同の認識主義への、存在、本質の単純対置の誤まりとして③には「プロレタリア」物神批判として④には、反産協Ⅰ反合を直結する安易さについて、労働派マルクス主義の過大評価と、加入戦術へのオプティシズムについて、「解放派」批判を為して

きた(叛旗バックナンバー他、参照)結論と類似している。

Ⅲ だが、問題なのは、党形成に対して階級形成を対し、「プロレタリア統一戦線」を党派性としてきた解放派滝ロイズムの⑤△組織論▽批判である。ここが「甦える不死鳥」が最も執着し、しかも弱点がもろに暴露されている個所である。

彼らは滝ロ△組織論▽批判を、問いかけた「共同性」がなれあいに致った現実から始める。しかし△組織論▽批判を行なわず、それに彼らの△共同性論▽のレヴェルと位相の差を対置しているにすぎない。いわく「私達の家族―市民社会(市民社会―政治的国家)―国家(共同体)に対して△滝ロイズム▽のそれは、政治的国家―市民社会(家族、市民社会、国家)の後者の政治的国家化にすぎない」彼らは△滝ロイズム▽が市民社会の位相の思想であり、現実的諸個人としての汝と我を問題にするにすぎず、共同体(国家―注・政治的国家ではない)の水準へ及ばないと、言っているかにみえる。しかしこれでは、滝ロと自分たちがちがうのだといっているだけで批判はなっていない。

しかし類推よりは、彼らがヘーゲル「家族―市民社会―国家」体系を「家族―市民社会(市民社会―政治的国家)―国家(共同体)」と独自に読みかえている内容の検討へ入ろう。

①彼らは、△滝ロイズム▽の存在論主義、ブループロ二元論、国家批判の欠落を指摘し、その余り、ヘーゲルの「家族―市民社会―国家」の体系性の中に、彼等とマルクスの共同論―共産主義

と共同性理解において誤まっているし、「我―汝―世界の絶対的共同的統一であり、具体と抽象、顕現と本質の直接的一体であり、現在―過去―未来の共同的統一であるはず」の国家(共同体)を、想定する事は、ヘーゲルも嫌悪したロマン主義への逆転である。

学問に合わせて生活を切る。理念に思想を合わせる。あるべきものへありたいとする。そのような「理念」物神こそが日本インテリゲンチアを民衆から疎外してきた事を、「社会主義、共産主義」像を「プロレタリアート、階級」がものゝ見事にうらぎってきた事を反省してみよ。

政治思想からみれば、ヘーゲルもマルクスも大したことはないのだ。「マルクス主義者」をこそマルクスは拒否したのだ。位相やレヴェルや弁証法を語るなら、身につまされて、空間、論理、時間の関連から問い返してみるべきだ。「共同体」を言うなら理念としての「共同性」を深めるのではなくて、自らの△共同性契機▽の反省から始めよ、そこそ悪しき「自立の外部注入」

「生き生きした感性というコトバ」を超える道である。欲求や衝動や自然過程が、そこにおける規律が定まっていれば、自らに必要な限りで、マルクスやヘーゲルを採用すればよいのだ。人は何かを持って生まれも死にもしない。あたりまえのこのみを前提とせよ。

②方法的誤まりははっきりしていると思われる。ヘーゲルの「国家」の位置に共同体論を立たしめる?

論をみてしまうのである。②彼らは、新左翼の国家理解が、市民社会に對立する政治的国家の、つまりヘーゲルの市民社会レヴェルに止まるとし、論理的に、ヘーゲルの国家の位置に彼等の共同体論―共産主義論を立たせんとするのである。その結論が上の読みかえである。

彼らは、正しいのか否、「共同体論」を欲しているにも拘らず、発想、方法において誤まっている。

①発想の誤まり。彼等は「政治」へ関わる前提たる、思想と政治と学問の関係がわかっていない。つまり原点がない、否「解放派」としての自己が原点にすりかえられているのである。私は、「ヘーゲル」家族―市民社会―国家」体系の中に共同体論―共産主義論を見出すというパラグラフを「私たちの作ってきた世界の広さと密度の限界を反省せざるを得なくなった時、だからこそ逆に無限の広さと密度を持った共同体、新しい私達の闘いの拠点への熱裂な志向が沸き上ってくる」というパラグラフと共に異和感を持って読んだ。上は学問的関心による透察が、存在―思想の規準になるといふ発想であり、下は現実のみじめさが、あるべき未来(無論、共同体的関係では把えているが)を欲求するという疎外論の発想である。

私の意見はこうだ。

諸君の「共同性」「なぜ闘うか」は、滝口氏のプロレタリア物神に、国家(共同体)物神を対したにすぎない。それは、「共同体」諸君が共同体に込めているのは、そのレヴェルのものなのに、何故、世界史、いなもとはっきり絶対精神の位置ではだめなのだ。何故、「現実の共同体」が、市民社会の次に来るのだ。彼らの基準はヘーゲルの理論である。私たちは時間―空間において論理位置を定める、差は明瞭である。そういう事については、よく書いてきたのでこゝでは止める。

Ⅳ 彼等は、他者への批判は正しく、自らの根拠で誤まっている。それ故現在考えられる組織論を、家族―市民社会(市民社会―政治的国家)―国家に見合せて、大衆―党―行動委員会―共同体をあてはめるなどは最低である。「論理過程へのあてはめ」で組織が作られるなどと思うのは、それこそ小インテリの思い上がりである。第一、それは意識上昇論でしかない。ヘーゲルを黒幕におく限り、甦える不死鳥派が目指す共同体は、「倫理的理念の現実性」(ヘーゲルの現実概念に注意せよ)幻想的共同性へ後退し、そこに止まるのである。

初心に帰れ。日本の、諸君の生活や思想や諸関係から共同体契機をつきとめよ。それが理論的によりも、困難な「かくめい」の課題である。

一 当世知識層の政治思想

イ 三島問題と知識層(レジュメ)

政治思想から言えば、10・8羽田が有した広さと深さが、

☆バックナンバーのお知らせ

1号 200円	70年安保闘争と日本革命の展望 「共同体論」へ一階級、組織、党=神津陽
2号 200円	4.28闘争の総括と沖縄解放闘争への視点
3号 300円	70年代への展望と当面の任務 過渡期世界と世界同時革命=神津陽
4号 200円	70年代をわがものとするために党内闘争を断呼として押し進めよ！ 党内論争に対する私たちの態度=神津陽 党形成の現段階と軍・統一戦線 10・21闘争の三多摩学対部総括
5号 160円	戦闘宣言 「党-大衆」論の止揚へ向けて 党内一分派闘争の現局面と我々の態度

共産主義者同盟の政治機関紙を読もう！

「叛旗」 近日(月2回刊) 8ページ 1部50円 月刊

編集方針

- ☆ 誇大宣伝とひとりよがりな排して、政治-社会実践上の焦眉の課題を明らかにする。
- ☆ 日本革命思想史、政治思想の現在的「環」等についての論究を連載する。
- ☆ 各地域、各層活動家の闘争報告、経験交流に紙面を提供する。

空転し諸党派↓69・4・28、全共闘↓大学立法へ分散し、その理念化の両端が、ハイジャックと三島自刃であったこと。

ii 戦中派ロマン主義はより内化し、戦後民主主義世代は、「ファシスト批判」しか出さず、戦無派は、回りをまわって触れず過ぎ、これが世代反応の態様と考えられる。

iii 民衆-大衆には、如何なる意味でも2・26や5・15レヴェルの衝撃力を与えない。それは、民主主義が定着しているからではなくて、私たちの「行為の共同性」をものみ込んだ、生活倫理としてのプラグマチズムへ一異変として吸収されるからである。

iv 浮かび出るのは思想と行為の基本関係である。久坂玄瑞に心魅かれた三島は、何故、薩長主流でなく蛤御門なのかはわかるが、何故、近藤勇でなく土方歳三なのかはわかる術をもたなかった。赤軍、三島、日本ロマン派を本質的に超えるものは意識的「自然死」を生む結論とする倫理である。政治的に死すとも社会的に死ぬとは、人は諸関係を背負って死ぬという事であり、共同的契機を発酵させつゝ死ぬのである。

ロ、全共闘の徒花-津村、黒木、蓮台寺 etc
ハ、浮上せる安中派-柄谷、長崎、管 etc

iii章の二は、何も捨てるもなき私たちの持続力の一環であるが、関心ある方は、機関紙を参照され度い。

叛旗 第6号 領価 300円 (〒50円)

発行日 1970年12月15日
編集 共産主義者同盟叛旗編集委員会
発行 共産主義者同盟 (363)5809
大久保プロ気付
東京都新宿区百人町2-197
東京バレー劇場ビル内

都内、関東近県その他、京都、大阪、名古屋、仙台、山形、札幌、松山、北九州等にも取扱店あり、照介は大久保プロまで、なるべく封書で願います。

- 蒼氓の叛旗 神津 陽著 850円
 ははのくにとの幻想婚 森崎和江著 850円
 非所有の所有 森崎和江著 680円
 呪縛の構造 内村剛介著 850円
 1905年 トロツキー／原暉之訳 二期選集2 ■ 1,000円
 革命はいかに武装されたかI トロツキー／藤本和貴夫訳 二期選集10 ■ 1,000円
 文化革命論 トロツキー／和田あき子訳 二期選集16 ■ 1,200円
 わが第一革命 トロツキー／原暉之訳 二期選集3 ■ 1,300円
 過渡期経済論 ブハーリン／救仁郷繁訳 ブハーリン著作選1 ■ 700円
 経済学者の手記 ブハーリン／和田・辻訳 ブハーリン著作選 ■ 680円
 世界経済と帝国主義論 ブハーリン／西田・佐藤訳 ブハーリン著作選 ■ 850円
 レーニン死後の第3インターナショナル トロツキー／対馬忠行訳 トロツキー文庫 ■ 500円
 永続革命論 トロツキー／姫岡玲治訳 トロツキー文庫 ■ 500円
 社会ファシズム論批判 トロツキー／徳田・弥永訳 トロツキー文庫 ■ 580円
 中国革命論 トロツキー／山西英一訳 トロツキー文庫 ■ 550円
 スペイン革命と人民戦線 トロツキー／清水幾太郎訳 トロツキー文庫 ■ 500円
 文学と革命 I・II トロツキー／内村剛介訳 トロツキー文庫 ■ 各500円